魔女の言うことは信じるな！

くまのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の言うことは信じるな！

【Ｎコード】
Ｎ５７０２Ｑ

【作者名】
くまのすけ

【あらすじ】
魔女マーサによって命を与えられた魔法の箒が、どこからともなく現れた少女フィオーリアの成長を見守りつつ、町の平和に貢献する（？）というような話。
ファンタジー物によくある魔法使いとその弟子という話。もちろん、オーソドックスな物語ってわけではないけど・・・・・・

はじまりの実験　1

その畑には、今日もグリーンモンスターが侵入していた。
そのモンスターたちは、谷間を吹き渡る優しい風に、気持ちよさそうに上半身をそよがせながら、畑の土に下半身をもぐりこませ、うまい栄養分を身体の中に取り込んでいく。
まるで、舌なめずりしているかのように、緑色の体をかすかに震わせて・・・・・・
見る見るうちに、その体が大きくなり、より力を得たモンスターたちは、もっと多くの栄養を取り込もうと、さらに深く下半身を伸ばす。
そんな風なモンスターたちがあまり大きくなりすぎる前に、箒は怪物退治を終えなければならない。
だが、この箒の生みの親・魔女マーサが畑を開いて以来、箒が一日も休まず、畑の手入れをしているというのに、緑色の怪物たちを根絶やしにすることなんて、一度もできたことがなかった。
今朝も、日が昇る前から畑に出て、いつもの怪物退治を始めたというのに、昼になっても、畑の１０分の１を綺麗にすることができたかどうかという程度。
一日で、だいたい畑の５分の１の怪物退治を終えるから、全体を綺麗にするには、５日かかる計算だ。　だが、繁殖力のつよいモンスターたち。５日目を終えた頃には、最初にきれいに退治した領域ですでに復活を遂げ、うまそうに畑の栄養分を身体に取り込んでいるのだった。
それでも、箒は怪物退治を続けるだけ。５日前に退治し終えた場所に、またもどって、黙々と・・・・・・
もし、箒に疲れたとか、飽きたとか、そういう人間らしい感覚や感情があったとしたなら、とっくの昔に作業を放り出し、畑をグリーンモンスターたちの跳梁跋扈するままに捨て置いて、逃げ出して

しまったのだろう。が、残念（ｏｒ幸い）なことに、この箒には、そんな感情なんて高尚なものの持ち合わせがなかった。
何しろ、魔女によって生み出された、ただの魔法の箒にすぎないのだから。

箒が退治しているのは、緑色の怪物。本名は、もちろん、ただの『雑草』
でも、この雑草たちをキチンと引き抜き、退治してやらないと、養分を盗られて、畑に植えられた貴重な魔法植物が育たなくなってしまう。
大体、魔法植物なんて、自然界では絶対に成長することがない、ひ弱な植物ばかり。
月に向かって咲くひまわりだとか、冬にしか実がならないスイカ、芽が出てからは一度も雨に打たれてはならないアジサイ。一体、どうして、そんな植物が育つことができるだろうか？
当然、元々旺盛な生命力をもっている上に、畑に染み込んだ魔力まで吸収して大きくなる雑草たちに、太刀打ちなんてできるはずもなく・・・・・・
だから、箒が毎日畑に手を入れて、雑草を取り除いてやらないといけない。
しかし、そもそも、こんな広い畑を箒一人が面倒を見るなんて、土台無理な話だ。
畑の持ち主の魔女マーサも一緒になって、手入れをすればいいのに。あのぐーたら魔女ときたら、そんなことは絶対にしない。
すべての作業を箒に押し付けて、ひがな一日ゴロゴロしているばかりだった。
それでも、補助の魔法生物なり、なんなりを箒につけてやれば、もっと畑の管理が容易になりそうなものだが・・・・・・
だが、所詮は、ぐーたら魔女。そんなことすらも、面倒くさがってやろうとはしない。

だから、畑の管理はすべて箒一人の仕事。
魔女にすれば、必要な魔法植物が育てばいいのであって、畑の管理の効率性だとか、収穫量の多寡などどうでもいいことなのだろう。
それが、我々、特別な能力を持たない小市民な人間たちと、想像を越える魔力というものを持っている魔女の考え方の違いというものなのだろうか？

だが、しかし、この畑の持ち主のぐーたら魔女マーサ、近頃、毎朝早起きして、どこかへ出かけていく。
どういった風の吹き回しだろうか？
帰ってくるのは、いつも夜遅く。
帰宅時には、疲れきっており、着ているものが泥だらけだというのに、そのままベッドにもぐりこんで、いびきを掻いて寝込んでしまう。
マーサが疲れきるなどとは、ここ数十年にはない、珍しいことだ。
あのぐーたら魔女が、朝早くに起きて、夜遅くまで外を出歩き、体力を消耗しつくすなんて・・・・・・
そもそも、箒を作ったのも、自分自身で家事をこなしたり、畑を手入れしたりするのが面倒だったから。
魔法で箒に命を与え、使役すれば、自分が小屋のベッドで日がな一日ゴロゴロしていても、構わないという身勝手な理由からだというのに。

その日、箒がいつものように雑草の駆除をしていると、畑のすぐ下を流れる谷川に掛かった丸木橋を、背中が大きく曲がった老婆が渡って来るのが見えた。
何歳ぐらいなのか、まったく見当もつかない、しわくちゃの老婆。
だが、老婆のわりに足腰はしっかりしているようで、結構な早足で歩いてくる。
丸木橋を渡り、獣道に毛が生えた程度の踏み分け道を、畑に隣接

して建っている小屋の方へ向かってどんどん進んでいく。
麓の村の住民たちなら、この山の奥の森の小屋には、もう何十年も前から魔女が住んでいることを知っており、恐れて近づかないというのに、この老婆は、まったく恐れているような気配も見せずに、しっかりとした足取りで、魔女の小屋へ歩んでいくのだった・・・・・・・

実は、それもそのはずで、この老婆こそ、小屋の主、魔女マーサである。
マーサは、今年で、１９６歳。人間の寿命なら、とっくの昔に尽きているはずだが、様々な魔法を習得し、呪術に精通している魔女。このぐらいの長寿など簡単なことだった。
でもしかし、そのマーサがこんな太陽がまだ空の高い位置にあるときに帰ってくるなんて、ここ数日ではなかったこと。
それに、なんだか興奮した様子だ。
なにがあったのだろうか？

魔女マーサは、小屋の入り口たどり着き、中に入る前に、畑の箒にむかって大声で呼びかけてきた。
「箒！　畑から、龍涎草の房を５つほど、中身こぼさずもっといで！」
龍涎草とは、畑の隅の飛び切り日当たりの悪い場所に植わっている食虫植物で、つぼ型の房をぶら下げている。その房の中には、強力な消化液が蓄えられていて、その液の力で、虫を溶かし、自分の栄養にするのだ。
箒は、マーサに命じられたとおりに、龍涎草の房を５つもぎ取り、中身の液をこぼさないように気をつけ、慎重に小屋まで運んでいった。
だが、５つの房を箒の毛の部分で持ちつつ、歩いて、小屋まで移動しなければならない。しかも、長い柄がバランスをとりにくくしている。

小屋にたどり着いたころには、どうしても畑で採取した量に比べて、それぞれの房の中の液が半分以下になってしまっていたのは、仕方のないことだった。

はじまりの実験　１（後書き）

もともと、ブログの方（『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・・・・』：ｈｔｔｐ：／／ｌｏｖｅｅｔｃ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／）で掲載している作品を加筆・訂正の上、こちらへ転載します。

はじまりの実験　2

５つの房を受け取っても、マーサが感謝の言葉を口にすることはない。いつものことだ。

箒は生きているとはいえ、マーサの魔法で生み出されたもの。マーサに仕えるのが使命であって、命令に忠実に従うのが当然の存在だった。

そして、もちろん箒自身、労をねぎらわれなくても、傷つくような感情をそもそも持ち合わせてはいない。

マーサは、用意しておいた５つのグラスに中身の液を、慎重な手つきでこぼさずに注ぐ。

中身の消化液が半分近くに減っているはずなのだが、そんなことを別に気にしているそぶりはない。

というより、畑の管理を箒に任せきりにしているので、そもそも、通常の龍涎草の消化液の量がどれぐらいなのか、知らなかっただけだろう。

次に、懐から、５つの品物を取り出し、５つのグラスそれぞれの脇にならべた。

冬朝顔の花粉の入った小瓶。トカゲの尻尾だけを食べて育った蛇の脱皮した抜け殻。巨大イナゴの糞。赤子芋の地下茎から採取した赤い水の入ったビン。そして、１０年に一度咲くといわれているグリフィンダケの笠。

最初の３つは、この小屋に元々あったものだが、残りの２つは、箒にとっても初めて見るもの。

どうやら、マーサがこのところ忙しく、あちこち出かけていたのは、この２つの材料をあつめるためだったようだ。

「フッ、やれやれようやくだわぁ」

マーサは満足そうに息を吐くと、それぞれの材料の分量を計って龍涎草の液の入ったグラスに漬け込んだ。

と、見る間に、それぞれの材料が溶け出し、赤、青、黄、黒、緑の5つの色の液体が出来上がった。
どのグラスの中身も原形をとどめないまでに溶けたのを確認すると、やがて実験するかのような慎重な手さばきで、それぞれの液体を順に混ぜ合わせていった。
赤い液に黒の液体を混ぜ、さらに、黄色の液を混ぜると、銀色に光る液体が出来た。
残りの青と緑の液体もそれぞれ混ぜ合わせると、真っ白なブクブクとあわ立つ液体が出来る。
マーサは、どこからか真新しい透明のグラスを出してきて、最後に銀色と白く泡立つ液体を注ぎ込んだ。
最初、二つの液体が合わさった瞬間、一気に朱色に変化したが、しだいに赤みが増し、血のように真っ赤な赤に、さらに、赤銅色に変わっていき、ゆっくりとゼリー状に固まり始めた。
その状態を満足そうに確認し、ひとつうなずくと、マーサはそそくさと隣の書斎へ入っていった。たぶん、今作っている薬剤に関する文献を確認するのだろうか？
そのとき、ふっと小屋の窓から風が入り込んできた。
箒の毛をなでるように風が吹きぬける。まるで生きてでもいるかのように。
風もマーサの実験がなんなのか、興味津々なのだろうか？
と、箒の見ている前で、ゼリーがボコリと泡をひとつ吐き出した。
もし、箒が人間と同じような好奇心をもっているのであれば、まじまじと凝視し、これから何が起こるのか観察しているところなのだろうが、所詮は魔法生物。ただ、ボーっと部屋の隅に立っているだけ。
一方、件のグラスの方はというと、さっきの泡などなかったかのように、静まり返ったまま。でも、しばらくして、また、ボコリと泡立つ。また、静まり返り、しばらくして、またボコリ。
ボコリ・・・・・・ボコリ・・・・・・

ボコリ・・・・ボコリ・・・・・・

泡が立つ間隔がしだいに短くなり、テーブルの上に、ゼリーから飛び出した飛沫が点々とつき始めた。

ボコリ、ボコリ、ボコリ、ボコリ・・・・・・

ボコボコボコボコ・・・・・・

グラスのあわ立ちはまずます激しくなり、それにつられてグラス自体がピョンピョン飛び跳ねだす。

グラスが跳ねるたびに中身の色が七色に変化して、最初に赤色だった液が、今や金色になってきている。

それを箒は相変わらずボーっと見ている。

グラスは、テーブルの上を跳ね回ったせいで、もう少しで、テーブルの端から今にも落ちそう。

ようやく箒はテーブルの隅に移動して、グラスが落ちないように抑える。

激しくあわ立つグラスが、今や箒の目の前で、暴れまわっていた。

と、突然、グラスの泡立ちが納まった。そのため、もうグラスが飛び跳ねることもない。

この機会に、箒は、テーブルの上に乗り、グラスをテーブルの中心へ運びなおす。

テーブル中央に据えなおされたグラス、なんだか全体がうすく光を発しているようにも見える。

まるで、神秘のオーラをまとっているかのよう。

なんの感動もなく、その光るグラスを箒は眺めていたのだが、不意に、その光が急激に明るさを増しはじめてきた。

最初、かすかに光って見えるかどうかだったオーラの光が、あっという間に、月よりも明るく、ランプよりも輝き、太陽すらも凌駕した。

もし、普通の人間がこの場にいれば、この光の洪水で、確実に失明していたことだろう。

でも、その場にいたのは魔法生物の箒だけ。その魔法の目が失明

するなんてことはない。
と、そうこうしているうちに・・・・・・
ボオォォーンンッ！

はじまりの実験　3

小屋中にモクモクと金色の煙が立ちこめ、目と鼻の先のものですら見分けるのが困難な状況になった。
箒の見ている目の前で、マーサが調合した薬の入ったグラスが爆発したのだ。
箒は至近距離で爆発に巻き込まれたはずなのだが、吹き飛ばされることもなく、しかも、幸運なことに、無傷だった。
ま、もっとも、所詮、箒なので、吹き飛ばされていても、大して被害もなかっただろうけど。
やがて、全開になっていた窓から、もうもうと立ち込める金色の煙をともなって、風が出て行った。代わりに、外の新鮮な空気と入れ替わる。
そのおかげで、しだいに煙が薄まり、部屋の様子が見通せるようになってきた。
グラスの爆発で、テーブルの上には大きなくぼみが出来ており、そのくぼみの底に、金色に光るゼリー状の物質がたまっている。よく見ると、箒の体のあちこちにも、飛び散ったゼリーが付着していた。
また、くぼみを中心にテーブルの上一面には、きらきらと光を反射する粉状の物体が・・・・・・
粉々になったさっきのグラスの欠片。
このとき、箒は思った。
グラスが爆発したということは、マーサの今回の実験失敗だったということだろう。
マーサがこの実験のための材料を集めに、ここ数日、数週間、体がくたくたになるまで一日中出歩いていたというのに・・・・・・
今までの努力が今の一瞬のうちに、まったくのムダになってしまった。

主人のマーサがこの結果を知ったら、どんなに落胆するだろうか？
箒は、マーサが悲しむ顔を想像し、痛ましく感じた。
ともあれ、箒は、本来の自分の製造目的に従い、失敗した実験の後始末を始める。
まずは、棚から新しいグラスをとりだして、くぼみの中のゼリーを移しておく。
おそらく、このゼリーは、何かもっと別のモノになるはずだったモノだろう。マーサが実験の失敗の痛手から立ち直り、気を取り直した後、分析してみて、なぜ実験が失敗終わったのか、確かめようとするはずだ。
そのためには、とりあえず大事に部屋の隅の棚に保管しておいた方がよい。
箒は、自分の機転に言い知れぬ満足を感じていた。

さて、次はテーブルにもどって、飛び散ったグラスの破片を片づけなければ！
箒は、再び、テーブルにもどり、どこから掃き始めればいいかと考えようとした。
だが、そのとき、隣の書斎から突進してくる人影が・・・・・・
「箒、なにしてるの！　そこをおどき！」
叱声が飛んでくるよりも早く、突進してきたマーサの容赦ない腕の一振りで、箒は弾き飛ばされ、気がついたときには、すでに部屋の壁にたたきつけられていた。
くっ！　い、痛い～！
――一体、なんなのだ？　なぜ、ご主人は、オイラを乱暴に押しのけたりするんだ！
箒は抗議の思いをこめて、テーブルにかぶりつくようにしているマーサをにらんだ。
もっとも、箒ににらまれていることなど、マーサは気づいてなんかいないが。いや、自分が、箒を弾き飛ばしたことすら、すでに念

頭にない。
ただただ両手をいっぱいにつかって、テーブルの上に散らばる粉状のグラスの破片を集めるのに夢中だった。
一心不乱に、丁寧に、慎重に・・・・・・
一粒たりとも、破片を残したりしないという強い意思が、オーラとなって、マーサの老いた体を包み込んでいる。
箒は、その姿に圧倒されていた。身動きひとつすらできなかった。
マーサを手伝うことも忘れて、呆然と見守ることしかできなかった。

はじまりの実験　4

グラスの破片は、やがて一ヶ所に集められ、すべてご主人の手のひらに掬い取られた。
戸棚にしまい忘れたチーズを見つけたネズミのように、ニンマリと笑う。
そして、不意の風でその手のひらの粉状の破片が吹き飛ばされたりしないように気をつけつつ、ご主人は慎重な足取りで、出てきた書斎へ、いそいそともどっていく。
へっ？　あ、あの～？　ゼリーは？
オイラは棚に移したゼリーのグラスとご主人の後姿を忙しく交互に見た。
でも、ご主人はまったくゼリーのことなど気にする様子もない。
なんだったんだ、さっきの実験は！！
オイラの気配りは、ムダだったのか・・・・・・
そう、まったく無駄だった。

ところで、オイラは、ご主人が書斎へと消えていくのを、呆然と見送りながら、妙な違和感を感じていた。
さっきから、なんだかヘンだ。
今のご主人の一心不乱な行動を見ていて、ずっと体がすくむような感じを味わっていた。毛が縮れたような気分。
あの瞬間、一歩でも、その場を動いていたら、ご主人の集中を途切れさせた罪で、消されていたかもしれない！
オイラの一生が、今の一瞬で、終わっていたかもしれない！
火のついた暖炉に放り込まれ、いやらしく舌なめずりするサラマンダーのエサにされていたかもしれない。
頭の中では、さまざまな不吉な終末の光景が激しく渦巻いていた。
そして、なぜかあのときには、体がいうことをきかず、一歩たりと

もその場を動くことが出来なかった。
一体、これはなんなのだろうか？
どうして、オイラ、体を動かすことが出来なかったのだろうか？
オイラは一人混乱して、いつまでも、その場に立ち尽くしていた。
そう、このときオイラは初めて恐怖というものを味わったのである。オイラは感情というものを持ったのである。
本来、感情なんてものを持っているはずがない魔法生物であるというのに・・・・・・

しばらくして、ご主人が消えていった隣の書斎から、妙な声が聞こえてくるのに、オイラは気づいた。
「オホホホ・・・・・・・　ついに、ついにやったわ！　若返りの粉を手に入れたわ！」
ご主人の声だ。
「この粉を獣脂に溶かし込んで・・・・・・・」
なにやら、ゴソゴソという音が聞こえる。
「さあ、塗るわよ！　まずは腕から！」
沈黙。
しばらくして、
「オォォォ～～～～！！！　シワが！　シミが！　たるみが！」
ご主人の喜びに満ちた声が聞こえてくる。
「そうよ！　そう！　そう！　最高！　最高だわ！　なんてこと！　こんなに素敵なことがあるなんて！　何年も前から準備して、材料を集めて、がんばった甲斐があったってものだわ！　最高よ！　最高なのよ！」
興奮しているようだ。
「とにかく、顔にも、体にも、腕以外の私のすべての部位、待っていないさい！　今すぐに、体中、どこもかしこも、塗ってあげるわ！　若返らせてあげる！　あなたたちも、最高の気分を味わわせてあげるわ！」

って、ご主人の声の調子も、なんだか若返ってきたみたいで。
「そう、最高よ！　これこそ、本当の魔法なのよ！　若返りの魔法！　どこのどんな魔女が夢に描いていても、ついに実現しなかった奇跡の魔法！」
　でも、あれ？　隣の書斎から、ご主人の聞きなれたしわがれ声ではなく、聞いたこともない中年女性のしっとりとハリのある声が聞こえてくる。
「ああ！　すばらしいわ！　なんて、素敵なのかしら！　シワが消えていくわ！　お肌のハリが復活するわ！　素敵！　とても素敵！　私、最高に幸せ！」
　次は、若い女の声。
「すごいわ！　なんてこと！　信じられなーい！　私の腕がプルプルに！　もっちりしちゃって、キャハ！」
　少女の声。
「え！？　な、なんで・・・・・・・」
　長い沈黙。
・・・・・・
　やがて
「ちょっ！　ちょっと！　どういうこと！　もう、いいの！　もう若返らなくても！」
　甲高い悲鳴に近い声が・・・・・・・
「な、なんてこと！　どうしてにゃの！　どうして、わかにゃえり、とまんにゃいの！」
　さらに甲高い声。
「キャーーーー！　ギャーーーー！　ど、どうしてにゃにょ！」
・・・・・・
　そして、とうとう、
「オギャーーー！！！　オギャーーー！！！」
　それが聞こえてきた。

はじまりの実験　5

い、一体、これは・・・・・・・
書斎で、なにか重大な異変が起きているのは確か。
どうやらオイラ、新しい自分自身についての混乱にかまけている場合ではなさそうだ。
オイラは、おそるおそる隣の書斎へ移動していった。
書斎の扉を開け、中をのぞいてみる。
中には、先ほどまでご主人が着ていたボロボロの服が床に落ちており、その服を押しのけるようにして、なにかが暴れている。
モゾモゾ・・・・・・
やがて、服の端から顔を出したのは・・・・・・
「ババブ～～～～！！」
毛のない裸の小さな生物だった。そいつは自分を包み込んで、動きを拘束していたご主人の服から、ようやく抜け出した。それから、座り込んで、自分のちいさな手足を、目を丸くして見つめている。
「バ、ブ～～！！！！　ババブババブ～！　バ～ブ～！」
やがて、部屋の隅の姿見の前まで這っていくと、鏡面を伝うようにして、立ち上がり、自分自身の姿を映した。
「ババブ～～～～！！！！」
途端に、悲鳴のような声を上げ、倒れた。
よほどショックだったのだろう？
両手両足を床について、凹んでいるし。

今、オイラの目の前には、珍妙な生物がうずくまっている。
その生物、オイラよりも小さく、やわらかい。
ええ～っと・・・・・・・
な、なんなのだ？　このちんちくりんな生物は？
そいつは、隣に立ち尽くしているオイラの方を見た。

そして、
「ババブ〜　ババブ〜　ババブ〜　ババブッ！」
まったく言葉になっていない。
オイラには理解できなかった。
なにはともあれ、さっきまで声が聞こえていたご主人がどこかへ消えうせ、代わりにこのまともに言葉すらも話せない小さな生物が存在しているということは、どういうことなのだろうか？
ご主人がどこかへ去ってしまったのだろうか？
それとも、この小さな生物が、ご主人を食い殺してしまったのだろうか？
どちらにせよ、オイラは、これで仕えるべき主人をなくしたのだろうか？
もしかして、この小さな生物の世話をすることが、オイラに課せられた新たな使命なのだろうか？
オイラは、脳みそがないにも関わらず、考えた。
もちろん、答えなんて出なかった。
と・・・・・・
「ふふふ・・・・・・　うふふふ・・・・・・」
どこからともなく、笑い声が聞こえてくる。
オイラは、慌てて周囲を見回した。もちろん、笑い声の主は目の前の小生物でないことはたしか。
どこか、虚空の方から、聞こえてくるようだ。
オイラは、心の中で思った。
「だれ？　いま笑ったの、だれ？」
と、オイラの毛をそよがして、風が通り抜ける。
「え？」
「ふふふ・・・・・・　私は、ここよ・・・・・・」
「え？　どこ？」
書斎のあちこちから聞こえてくるみたいだ。女性的な声。
今度は、風がオイラのまわりをグルグル回るように、吹き上がっ

ていった。
一瞬、風に巻き込まれ、回転しそうに。
つむじ風？
「ふふふ・・・・・・　あなたはだーれ？」
「え？　オイラ？　オイラは箒、君は？」
「ふふふ・・・・・・　さあ？　私はだれでしょう？」
今度は、風が柄をなでるように吹きすぎていく。
オイラにも、だんだん分かってきた。
「も、もしかして、風さん？　風の精霊さん？」
とたんに、落胆の声。
「あら！　もう分かっちゃったの！　つまんない！」
正解だったようだ。
ん、でも・・・・・・！？
風の精霊といえばシルフ。精霊といえば、普通、こんな風に会話をしたり出来ないはずなのだけど・・・・・・
精霊使いだとかで、高度な訓練を積まなければ、会話どころか、存在自体も感じ取れないはず。
どうして、魔法生物のオイラごときと会話することができるのだろうか？
大体、オイラには発声器官なんていう高尚なものがついていないので、さっきから音声を発していなかったはず。なぜ、さっきシルフと会話が成り立ったのだろうか？
「どうしてかしら？　不思議ねぇ～　さっき、ヘンなゼリーみたいなものを浴びて、金色の煙まみれになっちゃったりしたから、そのせいかしら？」
オイラの疑問に、シルフはそう答えた。

はじまりの実験　6

「それより、シルフさん、うちのご主人どこへいったか知らない？
それと、この小さいヤツは、一体なにもの？」
いつのまにか、リズミカルな寝息を立てて、隣でそいつは眠っていた。
「あなたのご主人のことは知らないけど、その小さいのは、私、見たことあるわ」
「え？」
「人間の赤ん坊よ。その小さいのが大きくなって、人間になるの」
そ、そうなのか？
人間というのは、この世に誕生したときから、オイラの倍以上も背丈のある生物ではなかったのか？
いままでオイラが見たことのある人間といえば、ご主人の仲間の魔女や魔法使いぐらい。
子供の魔女や魔法使いなんて、まずいないだろうし。オイラが驚いたのも無理はないのかもしれない。
どうしたものだろうか？
ご主人がいなくなって、代わりに人間の赤ん坊とかいうものが出現した。
魔法で生み出された擬似的な生物でしかないオイラの勝手な判断で、この赤ん坊を客人として遇した方がいいのだろうか？　そんなことをして、人間嫌いのご主人の機嫌を損ねることはないだろうか？　ご主人が小屋にもどってきたときに、この赤ん坊を見つけて、オイラをいじめるなんてことはないのだろうか？
やっぱり、この赤ん坊を小屋の外へほうり捨てる方がいいのでは？
オイラは散々に悩みぬいていた。
クシュン！！
と、横で、裸で眠っていたはずの赤ん坊が、くしゃみひとつ。

赤ん坊は起きだして、キョロキョロとあたりを見回す。
やがて、何かを見つけたかして、すごい勢いで、這い始めた。
さっき、この赤ん坊が出現した場所へ。ご主人の服があったところへ。
赤ん坊はご主人の服のところまで這っていくと、その服の中へもぐりこんだ。そして、大きな頭を服の間から出して、オイラを見つめる。
「バブー　ババブ。ババ、ババブブ、ババブー」
相変わらず、理解できない言葉を口にした。
んん・・・・・・
この人間は、何が言いたいのだろうか？
まったく分からない！
オイラには、理解できないけど、そういえば、この場には、もう一人いる。この奇妙な生物を人間の赤ん坊と教えてくれたぐらいだ、もしかすれば、もしかするかも！
「シルフさん、これ、なに言ってるか分かる？」
オイラはシルフさんに助けをもとめた。
「ふふふ。いいわ、なにしゃべったか、教えてあげるわ」
お！？　ちょうどいい、シルフさんは、赤ん坊の言いたいことが理解できるようだ！
「ぜひ教えて、おねがいします」
「ふふふ、いい？　耳の穴をかっぽじって、よーくお聞きなさい！」
シルフさんは自信満々の声だった。
「いい、そいつは、今、『バブー　ババブ。ババ、ババブブ、ババブー』って言ったのよ！」
結局、オイラにもシルフさんにも、赤ん坊が、何を言いたかったのか、分からなかった。
赤ん坊は、その後も、何度も、何度も話しかけてきたけど、最終的に、オイラが自分の言いたいことを理解できないと、渋々ながら

納得したようだった。
やがて、話しかけるのを止めて、勝手に行動するようになった。
まずは、ご主人の残していった服を自分の体に巻きつけ、台所へ向かって、這い始めた。
もちろん、その後をオイラとシルフさんが興味津々でついていく。
赤ん坊が目指した台所は、普段から綺麗に使ってなんかいなくて、流しには、洗い物の皿が山になっている。
流しのまわりには、滅多に食器が収納されているところを見かけない食器棚や、ご主人が作った魔法の箱が置かれている。
どうやら、赤ん坊が目指していたのは、その魔法の箱だった。
ご主人がかつて作り、魔力をこめた箱。
赤ん坊は、魔法の箱の前まで這っていくと、箱の側面に手をかけて、立ち上がった。
そして、小さな手で箱の蓋を開けようとしたが、蓋をあけるのに十分な力を発揮できなかったようだ。
箱の蓋はビクともしない。
赤ん坊は、助けを求めるように、背後を振り返った。もちろん、背後にはオイラしかいない。いや、もう一人いるはずだけど、オイラと同じように、赤ん坊には見えてはいないみたいだ。
「そいつ、その箱を開けてほしいのじゃない？」
「ああ、みたいだな。なにするつもりなんだろうな？」
「さあ？　とりあえず、開けてあげれば、何したいのか、分かるんじゃないかしら？」
「まあ、そうだね」
というわけで、オイラが自分の長い柄を使って、魔法の箱の蓋を動かした。
途端に、箱の中から冷気が・・・・・・
ブルッ！！！
赤ん坊が、その冷気をまともに浴びて、震えた。でも、そんなことにひるみもせず、開いた蓋から、箱の中を覗き込み、小さな指で、

中に収納されているビンを指差した。
白いどろりとした液体の入ったビン。
「ん？　ミルクがほしいの？」
オイラがそのビンに毛をかけると、赤ん坊は盛んに首を上下に振る。
ミルクビンを取り出し、赤ん坊の前におく。赤ん坊、途端に、むしゃぶりついた。
のどを鳴らして、満足げに、ごくごく飲みだしたのはいいのだけど、赤ん坊の力では、ミルクビンを支え、持ち上げるなんて出来ない。
たちまち、ミルクがビンの外へ流れ出し、赤ん坊の体を汚した。
「っ！　汚いなぁ～　こんなところをご主人に見つかったら、オイラ、命がいくつあってもたりないよ！」
やがて、赤ん坊は満足したのか、軽くひとつゲップをすると、寝室へ向かった。
台所の床を慌てて掃除し始めたオイラを残して・・・・・・

こぼれたミルクを綺麗にふき取り、ついでに流しに山とつまれた汚れ物の皿を洗って、ご主人の寝室の様子を見にいった。
ご主人の寝室には、ベッドと着替えの入った籠が置かれており、どうやって上ったのか、赤ん坊が、ベッドで毛布にくるまって、小さな寝息を立てていた。
「一体、なんなんだ？　こいつ！　台所で、勝手にミルクを飲んだり、ご主人のベッドを勝手に使ったり！」
不満げな声を上げるオイラの横から、シルフさんの冷静な分析が聞こえてきた。
「まあ、せめて、こいつと話が出来ると、どういう事情か理解できそうだけどね」
「そうだな。でも、どうやったら、こいつと話せるんだろう？」
「さあ？　この家は魔女の家なんだから、なにか、そういう魔法を

書いた本とか、ないのかしら？」
「う～ん、どうだろ？　でも、あったとしても、オイラ、字が読めないし・・・・・・　シルフさんは？」
「あら。奇遇ね。実は私も・・・・・・」
まったく頼りにならないもの同士だった。

はじまりの実験　7

ともあれ、そのときから、オイラと風の精霊シルフさん、それにナゾの赤ん坊との共同生活が始まったのだった。
赤ん坊は、言葉を話せないし、シルフさんのように、オイラの心の声を読み取ることもできない。その上、シルフさんの声は、まったく聞こえていないみたいだった。結局のところ、精霊使いの素養がないのだろう。
まったく意思疎通が出来ない困ったヤツだ！
その上、夜中に何度も目を覚まして、オギャーオギャーと泣き喚いてくれるし。
そのたびに、オイラがベッドの中を覗くのだけど、結局、なにしてほしいのか、なんで泣いているのか理解できず、途方にくれるばかりだった。
そんな風に、途方にくれるばかりで、何もしないオイラに不満げな視線を投げかけつつも、赤ん坊は、やがて泣きつかれて、静かに眠るのだった。

次の日の朝、赤ん坊は目覚めると、ゴソゴソと這い出して、また台所へ向かった。
昨日の魔法の箱の前に座り込むと、じっとオイラを見やる。
「バーブー！」
空腹なので、蓋を開けてほしいのだろう。
蓋を開けてやると、昨日と同じように、ごそごそと中を物色しだした。
やがて、軽くため息を漏らすと、昨日のミルクビンを指差した。
中身は昨日のうちにほとんどこぼれていたので、大して残ってはいないのだが、コレしか口に出来るものがなくて、仕方なくって様子だった。

ビンをとって、渡してやると、ほとんど床にこぼしながらも、空にしてしまった。
確か、このミルクは、ご主人が、肌の手入れ用に麓の村の牧場から、どうやってかもって帰ったもののはず。
これ一本きりのものだし、どうやって新しいものを手に入れればいいのか、オイラには見当もつかない。
ともかく、それでも赤ん坊は満足のゲップをひとつ。
でも、すぐにその場に座り込んで、真剣な表情で盛んに首をひねっている。
その小さな頭で、何かを考えているようだった。

オイラは、そんな赤ん坊をその場に残し、ミルクビンを流しに放り込むと、こぼれたミルクをふき取るために、雑巾を取りに行った。
赤ん坊は、オイラの横で、その様子を眺めていたのだけど、突然、難しい表情を浮かべて、力み始めた。
「んんん・・・・・・・ んん・・・・・・・」
と、やがて、妙に晴れやかな笑顔を浮かべて、オイラを見上げた。同時に・・・・・・・
もわわ〜〜〜ん
お尻の方から異臭が・・・・・・・
すさまじい臭気。まさに殺人的！
「な、なぁに？ なにこの匂い！ こんなの私の体に染み付いたりしたら、一生仲間から笑いものにされちゃうわ！」
そういい残すと、早々とシルフさんは小屋の外へ逃げ出したようだ。風が窓の外へ吹き抜けていったようだし。
赤ん坊も、この異臭には、耐え難いみたいで、盛んに手足をばたつかせて、自分が包まっているご主人の服から抜け出ようとしている。
オイラは、その様子を呆然と眺めながら、こんなのご主人に知られたら、消される！ と青くなるのだった。

もっとも、オイラには青くなるなんて、機能はないはずなのだけど・・・・・・

はじまりの実験　8

汚れた服を裏の谷川で洗濯し、赤ん坊の無言の指示に従い、ご主人の代えの服で赤ん坊を包んでやると、もう、いつものお仕事の時間になった。

いつものお仕事、雑草という名の緑色の怪物退治。

ご主人がいないわけだし、今日は、休んでしまおうかとも思ったが、もし突然ご主人が帰ってきて、畑の魔法植物が枯れているのを発見したときに、どのような折檻がオイラに待っているか・・・・・・

怖くて、休んでなんかいられない！

朝から、雑草を捕まえて、引っこ抜く！　引っこ抜く！

どれぐらい時間が過ぎた頃だろうか、オイラの体を風がやさしくなでた。

「どう？　アイツ、元気にしてる？」

シルフさんだ。

雑草を抜く手（毛？）を休めて、

「うん、たぶん、今、小屋にいるはずだよ。ひどいじゃないか、オイラひとりにアイツの面倒を押し付けて！　あの後、洗濯したり、掃除したり、大変だったんだぞ！」

「ははは、なに言ってるのよ！　アイツの面倒なんて、そもそも私の知ったことじゃないわ！」

「え？」

「大体、私は、たまたま、あのときあそこにいたせいで、こんなことに巻き込まれただけなの！　あの小屋を管理する責任のあるアンタと違って、私にはアイツを気にかけなきゃいけない義理なんてないのよ」

「う、それは・・・・・・」

たしかにそのとおりではあるけど・・・・・・

「面白そうだから、一緒にいてあげてるだけ！　それがいやなら、いいのよ、私。アンタを一人にして、どこへでも飛んでいってあげちゃうんだから。いい？　分かった？」
言い返せない。
こんなわけの分からない生物と、二人きりでこれから過ごすなんて、絶対ヤだ！
役に立たなくても、だれか側にいてほしい。
「わ、分かった」
「そ、いいわ。じゃ、ひとついいこと教えてあげるわ！　ちょっとここで待ってなさい！」
そういうと、風の気配が消えた。
しばらく、ボーとその場で突っ立っていると、林の上を白いものがこちらへ飛んでくる。
白い薄っぺらな布きれが、クネクネと揺れながら、踊るようにして、宙を飛び、近寄ってきた。
やがて、オイラの足元にひらりと・・・・・・
「これ、アイツのお腹に巻いてあげなさい」
「え？」
「麓の人間たちは、これを『おむつ』って呼んでいたわ。これをお腹に巻いて、お尻を包み込むようにしてやると、今朝みたいなことがあっても、それなりの予防策になるみたいよ」
「あ、ああ、なるほど！」
「アイツは、人間の赤ん坊なのだから、アイツのことなら、人間に聞く方がはやいでしょう？」
「た、たしかに・・・・・・」
「それと、アイツは結構体が弱いらしいから、四六時中、誰かが近くについていてやらないと、いけないみたいよ」
「そ、そうなのか。う～む・・・・・・」
オイラには、畑仕事なんていうものがあるし、シルフさんにたのむってわけにも。

「それと、アイツの食べ物だけど、人間の女が胸から出す汁でないといけないらしいわ」
「え？　なにそれ？」
「人間たちは、『おっぱい』とか、なんとか呼んでいたみたいだけど・・・・・・」
「人間の女？　あ、でも、ご主人も元は人間の女だったけど、そんな汁を胸から出したところなんて、見たことないけど・・・・・・？」
「へぇ～？　そうなの？」
「ああ」
「じゃ、魔女になるときにでも、出ないようになったのかもね。おっぱいって人間の女しか出せないらしいし」
「ああ、なるほど・・・・・・」
魔女は普通の人間では到底なれるものではない。魔力を手に入れ、自在に使いこなす。そんなことを生身の人間が実現するなんて、並大抵の努力では成し遂げられるものではないだろう。
ご主人も当然、魔女になるために相当な努力をはらい、大切なものをたくさん犠牲にしてきたに違いない。
もしかすれば、その犠牲にしたものの中に、赤ん坊におっぱいを与える能力も含んでいるかも知れない。オイラはそんな風に考えていた。
とはいえ、シルフさんの情報によれば、今のままでは赤ん坊の面倒をみるなんて到底不可能なことだけは確か・・・・・・
赤ん坊の面倒をみる者も、食事を与える者もいない。
「ど、どうしよう・・・・・・」

はじまりの実験　9

赤ん坊の面倒をみる者も、食事を与える者もいない。
いないなら連れてくればいい！
というわけで、畑仕事を中断して、小屋のまわりを探してみたのだけど・・・・・・
よく考えてみれば、この場所は魔女の森の中。
人間たちは、恐れて近寄ってこない。当然、人間の女を捕まえて、小屋に連れて行くなんて・・・・・・
オイラたちは、畑仕事を中断して、小一時間ほど森をさまよったあげく、そんな当たり前のことに気づいた。
「あはは。そりゃ、一生懸命探し回っても、誰一人見つからないわけだ、はっはっはー」
照れ隠しの馬鹿笑いをしたりして。
とはいえ、馬鹿笑いしたところで、なにか事態が解決するというわけでもなく・・・・・・
オイラたちが小屋へもどってくると、赤ん坊が、入り口のドアを一生懸命開けようと努力していた。
でも、ドア伝いに立ち上がったところで、ノブにまでは手が届かない。
届いたところで、ドアを押したり、引っ張ったりもできない・・・・・・
赤ん坊、顔中を汗だらけにして、悪戦苦闘していた。
オイラがドアを開いて、中へ入ろうとしたときには、ちょうど、伸び上がって、ドアのノブに取り付こうとしていた最中みたいで。
ギィィイイイ〜〜〜バタン！
オイラの目の前を黒い影が横切り、足元に倒れこんだ。かえるが地面に叩きつけられたみたいに。
「お、おい、大丈夫か？」

オイラの声はもちろん聞こえないけど、鼻をスリスリ。
「おぎゃーーー！　おぎゃーー！　おぎゃーーーー！！！」
森中に響き渡る声で、泣き始めた。
誰かを呼んでいるのか？
もしかして、森の中に、コイツの仲間がいて、今の泣き声を聞きつけて、何十匹もの仲間が、這い這いしながら、この小屋を襲ってくるのか？　この小屋を凶暴な目をぎらつかせて、包囲してしまうのか？
一瞬、おびえた。
けど、もちろん、そんなことはなくて。
赤ん坊、打った鼻を押さえて、一通り泣き喚いた後、ピタリと泣き止んだ。
そして、目の端に涙を浮かべたまま、オイラを振り返り、プイと別の方向を向く。
なんのつもりなんだろうか？　オイラ、その場でしばらく考え込んでいたけど、やがて、気がついた。
『ついて来い！』って合図だな。

赤ん坊は、泥だらけになりながら、小屋の横手の納屋に入り、何かを物色し始めた。
やがて、目的のものを見つけたみたいで、オイラにそれを取ってくるように、指差す。
「ハイハイ、アレを取ってくればいいんだな？」
オイラは、納屋の奥に分け入って、ホコリの積もった、木の箱を引っ張り出してきた。次に、赤ん坊は納屋を出、裏手の谷川の小さな河原に降りていった。
「ん？　こんな箱で何するんだ？　水でも汲むのか？」
「何をするつもりなのかしら？　この中に、食べられそうな草だとか、虫だとか、入れろってことかしら？　それとも、この箱いっぱいの魚を捕まえろ？」

シルフさんも不思議がっている。
もちろん、オイラたちの質問に答えは返ってこなかった。
赤ん坊は、オイラたちの声が聞こえているわけでもないし、仮に聞こえていて、答えてくれたとしても、オイラたちには赤ん坊の言葉なんて理解できない。
赤ん坊は、這い這いしながら、水際までやってくると、オイラに箱を水面に投げ入れるように身振りで指示した。
その指示に従うと・・・・・・
驚いた。
木の箱、水面に浮かぶよ！
そう、即席の船の誕生だった。
な、なんでコイツ、箱が水に浮かぶって知っていたんだ？
それより、こんな即席の箱舟をつくって、一体何をするつもりなんだ？
驚いているオイラをよそに、赤ん坊は船のヘリを抑えて、中を覗いたり、外見を確認したり、しばらく仔細に点検していたが、しばらくして、満足そうにうなずいた。
赤ん坊的には合格だったようだ。
それから、やおら、その船の中に乗り込んだ。オイラにも隣へ来るように指示。オイラ、びっくりしていて、何も考えることなく、隣に入る。シルフさんは、オイラの頭上に浮かんでいるみたい。
そして、オイラたち、出航した。

川下り　1

出航したといっても、小屋の裏手を流れる谷川の流れに、流されるだけなんだけど・・・・・・

よどみとかにつかまって流れなくなったときには、シルフさんにたのんで、川の流れの速いところへ、吹き流してもらう。

魔女の森の中を流れる谷川。

うっそうと暗い森の中を蛇行しながら、時に、他の流れと合流し、早瀬あり、緩やかな流れありののんびりとした船旅。

快適とまではいかないけど、オイラにとっては、ご主人に命を吹き込んでもらってから、初めての経験、ご主人のいない初めての遠出。

見るものすべてが、新鮮で、驚きの連続だった。

川の水を飲もうと水辺にやってきていた大人しい目をした鹿がいたり、箱舟の周囲をぐるりと一周して、かわうそが泳ぎさったり。

オイラは、キョロキョロ周囲を見回し、それらの光景を存分に楽しんでいたのだけど、オイラの隣では、赤ん坊がスヤスヤと平和な寝息を立てていた。

まわりの景色には、まったく興味がない様子だった。

と、かすかに・・・・・・・

・・・・・・・ゴ・・・・・・・・

なにかかすかな音が聞こえてきた。

なんの音だろうと、耳を澄ます。とっても、不吉な予感が、オイラの長い柄の中を駆け上がる。

・・・・・・・ゴゴォ・・・・・・・

かすかだった音がしだいに大きく、聞こえてきた。そういえば、船の進むスピードがだんだん速くなってきた気がする。

「なんだろう？　なにがおこっているんだろう？」

不安げにキョロキョロ周囲を見回すオイラ。だんだん大きくなる

音と速くなる船足以外、周囲の景色に特に変化はない。
「さあ？　なにかしら？　見てきてあげるわ」
ゴゴゴォォーーー！！！
はっきりと長い柄に響くような音が、聞こえるようになってきた。
隣で、居眠りしていたはずの赤ん坊も、目を覚まして、不安そうにあたりをキョロキョロ見回している。
すでに、川の流れは、相当速まっていた。
オイラの不安が高まって、柄が張り裂けそう！
と、
「大変！　このさ・・・・・・た・・・・・・・って・・・・・・・！」
「え？　た？　え？　なに？」
ゴゴゴゴォォォオオオーーーー！！！
すでに、シルフさんの声が聞き取れないぐらいの轟音があたりに響き渡っている。
先を見ると、すさまじい音を立てて、川の進む先が宙に途絶えている。しかも箱舟は、すごい勢いで、その流れの途絶えた場所へ突き進む！
突進していく！
な、なんだ？　なんなんだ？
ついに、その場所へ！
一瞬、箱舟が虚空に打ち上げられた。
魔女たちの会合に集まるため、ご主人を乗せて、夜空を飛ぶときのような浮遊感がオイラを包んだ。
でも、すぐに重力に引きずられるようにして・・・・・・
「ギョェェェーーーー！！！」
「オギャァァァーーーー！！！」
オイラと赤ん坊、悲鳴を上げながら、滝つぼへまっさかさま。
「し、しぬぅぅ〜〜〜！！！」
って、オイラは箒。木と藁でできた箒。

滝から落ちたところで、別にどうってことはなかった。
滝から墜落するときに、バランスをくずし、箱の外へ投げ出されたのだけど、そのまま滝壺に落ちて、上から落ちてくる水に巻き込まれ、しばらくぐちゃぐちゃにかき回され続けた。
でも、それもほんの数時間の話、やがて滝壺を離れて、滝の下の流れに再び乗ることが出来た。
水面を漂いながら、流れのまにまに川を下る。
あの箱舟はどうなったのだろうか？
赤ん坊は、今の滝壺で、おぼれ死んだのだろうか？
すこし悲しい気分だった。
オイラは、これから一人でどうすればいいのだろうか？
赤ん坊を死なせたりして、ご主人が戻ってきたときに、オイラを厳しくしかりつけたりしないだろうか？
オイラの存在そのものを消したりしないだろうか？
とにかく、どこかの岸辺に流れ着いて、また、ご主人の小屋へもどらなければ。
あっ！　そういえば、オイラ、畑仕事の途中だった。
いそいで戻って、仕事をしないと、今日のノルマを達成できない。
それどころか、畑の魔法植物たち、枯れてしまうかも・・・・・・
オイラは焦った。
なんとかして、近くの岸辺へたどり着こうと、毛をジタバタさせた。だが、川の流れにのったまま、どちらの岸にもたどり着くことはできなかった。

川下り　2

オイラは、焦る気持ちを抱えたまま、川に流されていた。
両岸の景色はしだいに開けてきている。
川幅がさらに広がり、森は既に途切れ、人間たちが耕す畑が左右の視界いっぱいまで広がっている。
畑の片隅には、ご主人の小屋よりも大きな家が何軒か立ち並んでいる。
そして、ときには、川原に人間たちが集まり、じゃぶじゃぶと洗濯をしていたりする。あの赤ん坊よりも、一回り以上大きそうな子供たちが、何人も駆け回っていた。
よく見ると、何人かの人間は、あの赤ん坊ほどの大きさの赤ん坊を背負ってもいるようだ。
オイラは、そういう人間たちにジッと目を凝らし、背負っている赤ん坊の中に、あの赤ん坊がいないか探してみたのだが、もちろん、いなかった。
しばらくして、川面を渡る風が、オイラの長い柄をなでた。
「あっ！　見つけた！　やっと見つけたわ！」
シルフさんだった。
「やあ！　シルフさん！　ずい分とお久しぶりだね！」
何時間かぶりかの再会。
「ちょっと、なによ、それ？　いきなり皮肉？」
「ん・・・・・・」
赤ん坊を溺れ死にさせてしまったのだ、すこし荒んだ気分になっていたとしても、しかたがないだろう。
「それより、どこいってたの？　心配してたんだからね？」
「ああ、滝つぼの渦に巻き込まれてて、水の中からでられなかった」
「そ？　やっぱり。何度も滝のあたりを探しても見当たらないから、もしかして、そうじゃないのかなって、思ってたの」

「ああ・・・・・・」
「ちょっと、心配してあげてるのよ！　ありがとうぐらい言えないのかしら？　ホント、心配のしがいがないわね！」
　別に、心配してもらいたくはなかった。むしろ、ほっておいてほしかった。
「なに不貞腐れてるのか知らないけど、あんたも無事でホントよかったわ」
　そうだった。オイラの考えていることは、シルフさんには、筒抜けだったのだ。
「参ったな」
「別に参ることはないわ！　みんな無事だったんだし・・・・・・」
・・・・・・！？
「え！？　みんなって、あの赤ん坊も？」
「ええ、もちろん。当たり前じゃない！」
　オイラ、ホッとして体から力が抜けていった。
　みんな無事だったんだ・・・・・・
　でも、さっきの滝から落ちて、赤ん坊も無事？
　ど、どうして・・・・・・
「落ちるのを阻止するまでは、私の力じゃ無理だけど、水面にぶつかって、粉々にならない程度に、転覆しない程度に下から支えてあげることぐらいなら、私にだってできるのよ！」
　ちょっと自慢げなシルフさん。
「あ、ありがとう！　ありがとう！」
　オイラ、もし両手があれば、そして、シルフさんの体が触れれば、抱きしめて、口付けしたかった。
　でも、どちらもないし、不可能な話・・・・・・
「ちょっと、アンタ、気持悪いわよ！　ヘンな想像しないでよ！」
「ま、参ったな！」

川下り　3

シルフさんの話によると、オイラよりも先を流れていった箱舟、あの赤ん坊を乗せて、どんどん川を下っていったらしい。
やがて、川沿いに堤防が築かれて、その堤防の向こうに石造りの尖塔が見える場所までやってきた。
川幅は、ますます大きくなり、流れもゆったりとした感じ。
その尖塔はなんだろうと、気になり、シルフさんが見にいくと、川沿いの小さな町にあるどこかの女神様の神殿。
一通り、神殿の中や外を見て周り、町をあちこち眺めてから、川まで戻ってきてみると、二人の川漁師が乗った小船が、すでにその箱舟を見つけていて、中から赤ん坊を抱き上げていた。
シルフさんは、これはいけないと必死に抵抗したのだけど、所詮は、風の精霊。人間たちにかなうはずもなくて、というより、人間たちシルフさんに全然気づきもしなかった。
赤ん坊にしたところで、キョトンと、自分を抱き上げている人間たちを見上げているばかりで、不満そうに泣きもしない。全然おびえている様子もない。
同じ人間同士だから、警戒心も湧かないのだろうか？
漁師たち、赤ん坊を抱き上げて、話し合っていた。
「おい！　どこの子だべ？　こんな船で流されてよ！」
「捨て子じゃなかんべか？」
「そうかのう？」
「じゃ、なきゃ、なにかの拍子で流されちまったか」
「う～む。捨て子じゃったとして、こんな箱に入れて、川へ流すなんて、ひどい親もあったもんじゃ」
「だのう。ともかく、この赤子、どうすっぺ？　一旦、見つけちまったし、また、船に乗せて流すってわけにもいかんじゃろ？」
「そうじゃのう？　おまんさとこはどうじゃ？」

「おいか？　無理無理。おい夫婦と子が5人、老いぼれが二人もいたんじゃ、いまでも食いつなぐのでカツカツじゃ。そういう、おまんとこは？」
「バカいうでね。独り身だっつうの知ってんでねぇけ」
「ははは、そだの」
「ともかく、岸さへ戻って、フィオーレの神殿の司祭さんに相談した方がよかんべ？」
「んだ、んだ。それがよかんべ」
などと相談しながら、船を岸に戻し、赤ん坊を連れて行ってしまったそうな。
陸に上がった漁師たちが向かったのは、先ほどシルフさんが見物に行った尖塔の神殿。
漁師たちの言葉に従えば、フィオーレの神殿ってことになるのだろうか？
赤ん坊と漁師が、神殿の中に入ったのを確かめて、シルフさん、オイラを探しに戻ってきたってわけらしい。

「そうか・・・・・・」
まあ、漁師たちの話の内容からすると、あの赤ん坊を保護するために、神殿へ連れて行ったのであって、赤ん坊に危害を加えるおそれはないだろう。
もともとオイラたちでは、面倒を見ることができなかった赤ん坊。漁師たちが世話を焼いてくれるのであれば、オイラとしては、願ったりかなったり・・・・・・なのかも？
ともかく、赤ん坊がどのように扱われているのか、キチンと面倒を見てもらえる環境かどうか確認して、それから小屋へ戻ることにしよう。
オイラたちは、さらに、川を流れくだり、尖塔が見える堤防の町までやってきた。
シルフさんに岸辺へ吹き寄せてもらい、上陸した頃には、あたり

は夕闇に包まれていた。

シルフさんの声の案内に従い、物陰伝いに町の中を神殿へ向かう。

さすがに、夜とはいえ、道の真ん中をオイラが堂々と歩き回るというわけにも・・・・・・

人間に見つかったら、すぐ化け物がいるなんて、追い回されちゃうよ。

なんとか、神殿の前まで、人間に見つからずにやってこれはしたのだけど、あいにく、神殿の入り口は、しっかりと閉じられていた。

オイラは途方にくれていた。だけど、シルフさんがあたりを見て回り、神殿の裏窓から、明かりがもれているのを発見した。

オイラも、細い路地を抜けて、裏手へ。

途中、ゴミ箱の上で寝ていた猫が、オイラの姿に驚いて、毛を逆立てて牙を向く。そして・・・・・・

「ウーウーウー！！！」

爪をギラリと光らせながら、低音でうなりだす。

オイラ、構わずその場所を通り抜けても良かったのだけど、ちょうど、オイラの右手、神殿横の部屋に明かりがともり、窓が開いた。

「こら！　ペーター、なに騒いでるの！　そんなところで、騒いでないで、おうちへ入りなさい！」

そのペーターと呼ばれた猫、神殿の飼い猫だったみたい。しばらく、オイラを油断なくにらみつつ、　ひらりと開いた窓枠に飛び乗り、部屋の中へと消えていった。一方、神殿から猫を呼んだのは、少年だった。その少年、窓から差す明かりに照らしだされたオイラの姿を見、不思議そうに首をひねっている。

「あれ？　おかしいなぁ～？　箒は全部片付けたはずなのに・・・・・・」

慌てて、窓から首をひっこめ、すぐに、オイラのいる路地に面した戸口から、出てきた。

貫頭衣というのだろうか、トーガ風の衣服を着た、モジャモジャ

赤毛の少年。
「司祭様に見つからなくてよかった。また、ちゃんと片づけしてなかったって、叱られちゃうところだったな。あぶない。あぶない」
その少年、独り言をつぶやきながら、オイラの柄をぐいとつかむと、乱暴に肩に担ぎ、出てきた扉から、中へ戻り、小さな庭を横切って、廊下脇の小さなロッカーにオイラを突っ込んだ。
かび臭いジメジメとした空間。オイラの隣にはホコリぽいモップや箒が。足元にはちりとりが。奥の方には雑巾が転がっている。
ここは・・・・・・
掃除道具入れ。
く、屈辱だ!!
「あはは。やっと一番お似合いの場所に入れてもらえたのね。良かったね」
シルフさんの愉快そうな声が。
「良くない! 全然、よくない!」
「あら? どうして?」
「オイラは、ここにいるやつらとは違うんだ! ちゃんと生きている魔法の箒なんだぞ! こんなやつらと一緒にするなんて、あのガキ、なに考えてるんだ! いつか、痛い目見せてやる! 覚えてろよ!」
「あらあら。まあ、大変ね」
シルフさんの馬鹿にしたような声が、オイラの頭の中に響いていた。

川下り　4

掃除道具入れの隙間から外へでて、周囲を見てきたシルフさんによると、この神殿、あの赤ん坊の他は、司祭とさっきの司祭見習いの少年の二人しかいないみたいだった。

司祭は、奥の部屋で、なにかの書類を書いており、少年は、台所で料理をしていた。

道具入れにまで漂ってくる匂いからすると、今晩はシチューなのだろう。

で、肝心の赤ん坊はというと、司祭のいる部屋にしつらえられたベッド代わりのソファーの上で、スヤスヤ寝息を立てているらしい。

やがて、台所の方から、

「司祭さま、晩ご飯の用意ができました」

奥の部屋から、

「はーい。今行きます」

すぐに扉が開く音がし、人間が歩く足音が聞こえてきた。

チャンスだ！

今なら、人間たちに見つからずに、道具入れを抜け出し、赤ん坊の無事を確認できる。

オイラは、そっと道具入れを抜け出して、足音を忍ばせて、奥の部屋へ向かった。

明かりが消えた薄暗い部屋の中では、窓から差し込む星々の光で、薄ぼんやりと、ものの輪郭をとらえることが出来る。

部屋の奥には書き物机があり、壁際にはくたびれたソファー。シルフさんが言うには、さっきは、このソファーの上に赤ん坊がいたらしいが、今は全然姿が見えない。

「あの人間、あいつを一緒に連れて行ったみたいだな」

「そうみたいね」

「ちゃんと面倒をみていてくれるといいのだけど・・・・・」

オイラたちは、引き返そうとした。だが、ちょうどそこへ、台所の方から声が聞こえてきた。
「トマス、部屋におしめ置いてきちゃったから、とってきて」
「はい、お師匠様」
誰かが駆けてくる足音が。オイラは、とっさに近くの物陰に隠れた。
やがて、ランプを片手に部屋へ入ってきたのは、さっきの少年。
少年、部屋のあちこちを照らし、やがて、目的のものを見つけたのか、中央のテーブルに近づいて、何かを持って戻っていった。
やがて、台所の方から、
「オギャーオギャーオギャー！」
あの赤ん坊の泣き声がする。そして、その声と一緒に。
「ほらほら、いい子でちゅね。泣かないの。今すぐ、おしめを替えて、きれいきれいにしまちょうね。いい子、いい子」
ここの人間、頭がおかしいのだろうか？
口調が、ヘン！　気持ち悪い！
うへっ！！
「あらあら。小さな赤ん坊に話しかけるとき、人間はいつもああなるのよ」
シルフさんは、そういうけれど、ホント、人間って、ヘンな生き物だ！

オイラたちは、一旦部屋の外へでて、慎重な足取りで、台所の入り口に近づき、中を覗き込んだ。
テーブルを挟んで、司祭と少年が食事を摂っていた。
「トマス、そこのコショウとって」
「はい、お師匠様」
「今日は、ちょっと塩が利きすぎだね」
「そうですか？　ボクには、ちょうどいいのですけど・・・・・・」
「私には、ピリリッとしすぎてる」

「そうですか・・・・・・　今度から気をつけます」
どこでも、家の主というのは、口ばかりで、ぐーたらなようだ。
召使いをやたらとこき使うくせに、文句ばかりをいう！
文句をいいつつも、お代わりをする司祭のために、台所のかまどの脇に立ち、シチューをよそう少年がボソリとつぶやくのが聞こえた。
「ったく！　昨日と言ってること逆じゃん！　なにが、塩が利きすぎてるだよ！　昨日は、塩が足りないとか言っていたくせに！」
「ん？　トマスなにか言った？」
「いいえ、別に、何も」
司祭たちが食事を摂っている間、赤ん坊は、テーブルの隅にのって、じっと二人の様子を観察していた。新しいおしめをして、あたたかそうな布にくるまっている。
「さて、ご馳走様。トマス、皿の片付け、よろしく」
「はーい、お師匠様」
「それと、塩の量は、汗をかいたか、運動したかどうかによって、変えるべきものよ」
「え？」
「昨日みたいに、神殿学校や裏の畑でよく働き、汗をかいた時は多めが、今日みたいに、先代の領主様の命日で神殿での祭祀ばかりやってて、あまり動かなかったときは、少なめにするのが、コツ。いつも同じ量にしていちゃいけない。食べる人の体調なんかを考えて料理する。それも見習い修行のひとつだから、よく覚えておきなさい」
「な、なるほど・・・・・・」
「さて、部屋にもどるわ」
少年が食器を片付ける間に、司祭は赤ん坊を抱いて、部屋へと引き返していった。
先ほどの司祭の部屋に入ると、赤ん坊を抱いたままソファーに腰掛ける。

そして、ちらりと窓の外に物憂げな様子で視線を向けた。
「もう、あれから1年になるのね・・・・・・」
口の中で、人の名前を続けたようだが、オイラには聞き取れなかった。
それから、気を取り直したみたいで、元気な笑顔を浮かべて振り返った。
「お待ちどうさま。ほら、ご飯の時間でちゅよ」
など、赤ん坊に話かける。
え？　ご飯？　晩ご飯なら、さっき食べてきたはずじゃ？
また、なにか食べるつもりなんだろうか？
司祭、突然、襟を広げ、片肌を脱いだ。襟元から覗いたものは・・・・・・
たわわな乳房。
赤ん坊、その乳房にむしゃぶりつく。
「きゃは、くすぐったい！　もう、この子ったら」
その司祭、女だった。

川下り　5

どうやら、この司祭に任せておけば、赤ん坊の食事は大丈夫なようだ。後は、キチンと世話を焼いてくれるかどうか・・・・・・

そんなことを思いながら、ぼーっと司祭の部屋の中を覗いていると。

「ニャァア！！！」

オイラの足元から、ものすごい鳴き声が。

「フシューーーッ！！！」

すぐ近くに背中の毛をそばだてて、オイラに向かってうなり声を上げているヤツが。

さっきの猫だ。

いつの間に近くに来ていたのだろうか？　足音が聞こえなかったので、気がつかなかった。

ペーターは今にも飛び掛らんばかりに身構えている。ヘタに動いたりしたら、飛び掛ってくるだろう。

と、部屋の中で司祭の足音が、

「ペーター、どうしたの？　ネズミでもいるのかしら？」

入り口から顔を出した。オイラの全身は、部屋の中からの明かりに照らされている。

や、やばい！　見つかった！

でも、その女司祭、オイラの柄をつかむと、ヒョイと持ち上げ、オイラの足元の方ばかりを見ていた。

「ん？　どうしたのかしら？　なにもいないけど？」

ペーターは、相変わらず、シッポを膨らませ、オイラにうなりかけている。

「ほら、ペーター、なにもいないわよ？　どうしたの？　なにかいるの？」

もう一度、念入りに、床の上を確認。でも、なにも見つからず。

肩をすくめ、しゃがみこんで、空いている方の手でペーターの頭をなでようとする。その途端、ペーター、爪を全開にして、その手を引っ掻いて、走り去った。
「いたっ！　こら、ペーター！」
抗議の声を上げつつ、司祭はペーターが逃げていった方を呆然と見送っていた。
「なんなのかしら？　あの子」
と、オイラをじろりと見下ろした。
オイラの背筋に冷たいものが走る。
ば、ばれたか！？
でも、
「ったく、トマス、また、箒を片付け忘れて、なんど注意したら分かるのかしら。まあ、いいわ。今日はかわいい赤ちゃんがやってきたことだし、今回は、大目に見てあげる」
などとつぶやきながら、オイラを再び掃除道具入れへ。
く、屈辱だぁ～！！！
どこからか、笑い声が聞こえた気がした。

屈辱的な夜。
こんなホコリっぽいところで一夜を明かす羽目になるとは・・・・・・
掃除道具入れからは、自由に出られるので、別に外へ出ていてもいいのだけど、神殿の中をあのペーターがうろついている。また、見つかって騒ぎがおきたりしたら、面倒。オイラは、中でジッとしていることにした。
シルフさんは、オイラと違って、誰かに見られるってわけでもないので、一晩中、神殿の中をあちこち飛び回っていたみたい。
ときどき、オイラのところへやってきては、外の様子を聞かせてくれた。
といっても、人間たちはみな寝床についているので、大した報告

なんて、なかったのだけど・・・・・・・
あの赤ん坊も、昨晩のような夜泣きをすることもなく、平穏に一晩が過ぎた。
やがて、
チュン、チュン、チュン、チュチュン・・・・・・・
「お師匠様、おはようございます」
「ああ、おはよう。今日も朝は冷えるわね」
家の中から、声が聞こえだしてきた。
まだ、外は薄暗かったが、人間たちは起きだしたようだ。
井戸から水を汲む音が聞こえ、バシャバシャと顔を洗う水音がする。
「ほら、トマス、タオル」
「あ、ありがとうございます、お師匠様」
「今朝は、ハムエッグが食べたい気分だわ」
「あ、はい。分かりました。他にご注文は？」
「あとは、いつものようにカリカリに焼いたトーストにバターをたっぷりつけて。あ、そうそう、昨日、ホーンさんとこのおかみさんが持ってきてくれた、リンゴのジャムあったでしょ？　あれも、おねがい」
「はい、用意しておきます」
「さて、朝の礼拝いってくるか」
「お勤めご苦労様です」
「あい」
などと聞こえてくる。
そういえば、掃除道具入れの隣に窓があって、月明かりに照らされた井戸が見えていたっけ？
やがて、パンを焼く香ばしい匂いが台所の方から漂ってきた。
一方、神殿の表の方からは、低くさざめくような単調な祈りの声が聞こえてきている。
そして、あたりがしだいに明るくなってきた。

ようやく、日が昇ってきた。

川下り　6

朝の祈りがすみ、人間たちが朝食をとっている間に、オイラは、明るくなった建物の内部をあちこち探検してみることにした。
シルフさんの報告では、ペーターも人間たちの足元で食事をしているようだし。
昨日は、真っ暗な中で到着して、2度も掃除道具入れに放り込まれたりしたので、キチンと神殿内部を見ていなかった。今はその絶好のチャンス！
オイラは、そっと掃除道具入れを抜け出した。
まずは、掃除道具入れの近くにある扉を明ける。
扉の向こうは、広い部屋だった。
扉の近くに、水がめを抱えた女神像を中心に祭壇がしつらえられて、その祭壇に向かい合うように、長ベンチが、何列も並んでいる。
つまり、礼拝所だ。
礼拝所の奥には、大きな両開きの扉があり、今は閉められている。
表通りに面した側だから、町の人たちが礼拝に来たときに、出入りする扉なのだろう。
オイラは、礼拝所への扉を閉め、反対方向、つまり、昨日、赤ん坊を探しに行った方向へ歩いていった。
すぐに台所と司祭の部屋とを結ぶ廊下にでた。
台所の方からは、食器がカチャカチャぶつかる音が聞こえてくる。
オイラは、昨日と同じように、司祭の部屋をのぞいてみた。
やっぱり、赤ん坊はいなかった。
どうやら、司祭が台所へ抱えていったみたい。
少なくとも、四六時中、一緒にいて、面倒をみてくれる気はあるようだ。オイラは少し安心した。
後は、いくつか廊下に沿って、トマスの部屋や、物置・トイレなどの小部屋がいくつかある程度の小さな神殿。

後は、今人間たちが食事をしている台所ぐらいしか、調べるところはなさそうだが、まあ、いいだろう。わざわざ人間たちに見つかるような危険を冒してまで探検する必要はない。
司祭は、あの赤ん坊を可愛く思っていてくれるみたいだし、ここでなら大事に育ててもらえそうだ。
オイラはそう確信した。
もうそうなると、オイラがここで出来ることなんて何もない。
小屋に戻って、また雑草を退治しなくちゃ。
昨日の午後から休んだ分を取り戻さないと。
とはいえ、こんな日が出ているうちから、外を歩き回ったのでは、人間たちに見咎められて、どんな目にあうか分からない。
とりあえず、今日は屈辱であっても、掃除道具入れにこもって、日が沈んでから、小屋へもどった方がよさそう。
オイラは、大人しく、道具入れにもどった。

やがて、食事を終えた司祭が、昨晩のような気持悪い声を上げながら、赤ん坊に乳を与えはじめた。
一方、トマスは、オイラのいる掃除道具入れの前を通って、礼拝所へ入っていった。
壁越しの気配からすると、しばらく中でゴソゴソしていたみたいだが、しばらくして。
ガラン、ゴロン♪
ガラン、ゴロン♪
ガラン、ゴロン♪
天井の方から、くぐもったような、奇妙な金属がぶつかるような音が聞こえてきた。
やがて、扉が開けられる音がした後、礼拝所の方から甲高い声が聞こえてきた。
「トマスお兄ちゃん、おはようございます」
「はい、おはよう。サイモン今日もはやいね」

「うん！」
さらに、しばらくして、
「トマスお兄ちゃん、おはよう！　あっ、サイモン、もう来てるんだぁ～」
「はい、おはよう。サリーちゃん、その服、おニュー？　かわいいねぇ～　すごく似あってるよ」
「えへ、ありがとう」
また、別の声で、
「サリー、おはよう」
「おはよう」
次から次へと、『おはよう』の挨拶が沸きあがり、いくつものおしゃべりが聞こえてくる。
な、なんだ？　なにがはじまったんだ？
オイラがビックリしていると、
「なんか、隣の祭壇のある部屋に、人間の子供たちが集まって来てるわ？　なんなのかしら？」
シルフさんの声。
「なにが始まるんだろうね？」
「さあ？　なんでしょうね？」
などと不思議がっていると、トマスが部屋から出てきて、司祭に声をかけるのが聞こえた。
「お師匠様、みんな集まりました。授業おねがいします」
「あい、ちょっと待っててて、トマス、あそこのアルファベット表の紙をもってきて」
「はい」
そうして、司祭とトマスが続けて、礼拝所へ入っていった。
子供たちの声でざわざわしていた部屋が、一瞬で静かになった。
やがて、
「みなさん、おはよう。今日もしっかりお勉強しましょうね」

オイラは、ついつい好奇心に負けてしまった。
掃除道具入れから抜け出すと、井戸側のバルコニーから中庭に抜け、中庭に面した窓から、礼拝所の様子をのぞいてみた。
祭壇の前では、司祭が立ち、どこからか引っ張り出してきた黒板に向かって、『A』の字を書いていた。
「いいですか、これは『A』です。ABCの最初の文字で『A』です。みんなノートにAって書いて見ましょう」
部屋にいっぱいに詰め掛けた小さな人間たち、一斉に手元のノートに『A』って書き出した。通路を通って、一人ずつの手元を覗き込み、司祭とトマスが指導していく。
全員が書き終わったところで、
「Aは『ア』という発音を表します。みんな声に出してみましょう！　せいの！　ア！　ア！　ア！」
「ア！　ア！　ア！」
司祭につづいて、一斉に発音する。
次に、司祭が取り上げたのは、『エ』と発音する『E』、『イ』の『I』、『オ』の『O』、『ウ』の『U』だった。
もちろん、A，E，I，O，Uの文字は、便宜上の文字で、こちらの世界で同じ文字を使っているわけではないけど。
こちらの文法は、子音と母音を表すアルファベットを組み合わせて使うローマ字のようなもの。
母音の五文字、子音の20文字ほどを覚えてしまえば、オイラでも、文章を読むことは簡単だった。
だから、オイラ、その日、全部のアルファベットとその使い方を覚えてしまった。
オイラ、いつしか夢中になって、その授業を見て聴いていた。
初めての知識。初めての文字。そして、物事を知るというのが、こんなにも楽しいものだったとは・・・・・・
あっという間に、時間が過ぎ、気がついたら、もうお昼になっていた。

「はい、では、今日はここまで。みんな午後からもしっかりお父さん、お母さんの言いつけをきいて、いい子で、元気にすごしてね」
「はーい」
返事と同時に、小さな人間たちは、一斉に立ち上がり、出口へ殺到していく。
でも、何人かの人間たち、その出口へ向かう人の流れを無視して、祭壇脇、トマスがいる場所へ集まってきた。
「わぁ〜　かわいい」
「ちっちゃーい。トマスお兄ちゃん、抱かせてぇ〜」
「あ、私も、私も！」
「ずるーい、私が先！」
授業の間じゅう、トマスに抱かれていた赤ん坊を小さな人間たちが奪い合うのだった。
その様子を見ながら、司祭。
「ほんと、大人しい赤ちゃんね？　これだけ長時間、むずがらないなんて、珍しいわ」
感心して、つぶやいているのだった。

川下り　7

日が暮れた。
オイラは、こっそりと掃除道具入れから抜け出して、夜の道へ出た。
小さな人間たちへの授業が、一日二回、午前と午後の一回ずつあり、まったく同じ内容の授業を繰り返していた。
もちろん、午前と午後とでは、メンバーが違って、午後からの人間たちの方が、すこし体格が大きかったようだ。
オイラは、飽きもせず、同じ授業を聴き、すっかりアルファベットというものを覚えてしまった。
もともと言葉は理解することができるし、さらに、文字とその発音まで覚えたならば、ご主人の小屋にある書物を読み解くことが出来るに違いない！
オイラはそう考えて、ワクワクしていた。
思わず、石畳の道をスキップしてしまう。
箒のスキップ。
まるで、道を掃き清めているかのようだ。
けれど、なかなか進んでいけない。行けども行けども、まだまだ先の道のりがある。
村を抜け、道を離れて、川沿いをすすみ、星明りを頼りに河原を歩いていく。
オイラたちは、川をずっと流れ下って、村までやってきた。
ということは、この川に沿って、上流へ上っていけば、ご主人の小屋まで戻れるはず。
だから、河原伝いに行くのがよいのだろうが、石がゴロゴロしていて、歩きにくい。
時間がかかるわりに、距離がかせげなかった。
ともかく、早く小屋まで戻らないといけないし、早く小屋に戻り

たい！
気ばかり、急く。
急がなきゃ！
しだいに疲れで足が重くなり、なかなか次の一歩が踏み出せなくなる。
川を吹き渡る夜風は気持ちいいが、今はそれどころではない。
やがて、疲れがピークに達し、オイラは、近くの岩かげに座り込んだ。
かなりの時間を歩いてきたわけだし、相当な距離をこなしたはず！
でも、振り返ると、月明かりに照らされて、遠く小さくフィオーレ神殿の尖塔の影が見分けられた。
「う～ん・・・・・・」
「あら？　どうしたの？　なにか考え事？」
シルフさんの声が聞こえる。
「なんか、河原を歩くのって、時間かかるというか、疲れるのだけど・・・・・・」
「それは、そうでしょうねぇ～　こんなに、大きな石がゴロゴロしているのだし」
「うん、もっとこう、早く歩いていく方法ってないのだろうか？」
「ん？　それなら、人間が作った道を使えばいいじゃない？」
「ああ、でも、それだと、川と別の方向へ道が伸びているから、ご主人様の小屋へどういけばいいか分からなくなっちゃいそうで・・・・・・」
「それも、そうね」
「だから、考えているんだ」
「ふーん、飛べないって、不便ねぇ～」
ちょっぴり、困惑気味の声。
「ああ・・・・・・」
「私なら、ビューンって飛び上がって、一気にあの小屋まで行っち

ゃえるのだけど・・・・・・」
「いいなぁ～　シルフさんは」
「ふふ、いいでしょう？」
「ああ、いいなぁ～　もっとも、ご主人がいれば、オイラだって、空を飛べるんだけどな」
「あら？　そうなの？」
「うん、なんてたって、オイラ、魔女の箒なんだし。ご主人に魔力を込められているからね」
「へぇ～　そうなんだぁ～」
「ご主人が、オイラに呪文をとなえれば、オイラの体が勝手に浮き上がって、とんでいけるのだけど・・・・・・　ご主人がいればなぁ～」
　シルフさん、なにか気づいたみたい。
「ん？　呪文？　呪文を唱えさえすればいいの？　飛べるの？」
「ああ、飛べるよ」
「どんな呪文？　アンタ、魔女の呪文、覚えてないの？」
「ん？　空を飛ぶたびに、何度も聞かされたから、全部とっくに覚えちゃってるよ」
　オイラ、魔女が唱えていた呪文の前半分をつぶやいてみせた。
「ねぇ？　なら、アンタ、自分で呪文を唱えてみたらどうなの？」
「え！？」
「自分で呪文を唱えれば、飛べるんでないの？」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
　かなり長い間、沈黙が続いたと思う。
　考えたことすらなかった。オイラが魔法を使ってみる、魔法の呪文で空を飛ぶ、なんて。
「で、どうなの？　やれそう？」
「そ、それは・・・・・・・」
　オイラ、戸惑っていた。

も、もし、オイラが魔法を使ったりしたら、使ったことが知れたりしたら、ご主人様を不愉快にさせたりすることはないのだろうか？
きつく当たって、オイラを折檻したり、消したりすることはないのだろうか？
オイラ、折角、魔法でとはいえ、命を得たのだから、ぜひとも長生きしたい。
つまらないことで、この命を失ったりしたくない。
今、疲れたというだけで、なかなか小屋へ戻れないっていうだけで、魔法生物の分際で、魔法など使っても大丈夫なのだろうか？
すごく、すごく心配になった。
あ、いや、それでも、このペースで河原を歩き続けるのであれば、今日・明日中に小屋にたどり着くなんて、不可能かも知れない。
大体、途中、あの滝があったわけだし。オイラ、あの滝のあった崖なんて、登れる自信ないし。
そのとき、ハッと気がついた。
そういえば、もし、今晩のうちに小屋に戻れなければ、畑の魔法植物たち、本当にピンチになるに違いない。
雑草たちに栄養や魔力を全部吸い取られ、枯れてしまうに違いない。
そうなれば、ご主人が戻ってきたときに、確実に、オイラ消される！
役立たずのただの箒に戻される！
柄を寒気が駆け上がった。
是が非でも、今晩中にもどらなければ・・・・・・
「で、どうなの？　空をとべるの？」
「わ、わからない。や、やってみる」
そういえば、オイラ、魔法を使った後のことばかり心配していたけど、そもそも、オイラの呪文で、空を飛べるかどうかなんて、わからないんだよねぇ～
それが今、一番の問題だというのに！

なんで、そのことを心配しないのだろう？
オイラ自身、すごく不思議に感じた。

川下り　8

意識を集中させ、心の片隅で飛べ！　飛べ！　と念じながら、オイラは、ご主人が毎度詠唱する呪文を唱え始めた。

――――クカタラソ、ベート、キウホ・・・・・・

呪文を唱えている間に、足もとで、風が渦を巻いたりしなかったし、小石が振動したりもしない。

ただ、平和に川の水がさらさらと流れる音が聞こえるだけ。

やがて、呪文の終盤に差し掛かり、

――――ベート！

最後の言葉を唱えた。

その瞬間、オイラの足が地面を離れ、体が空高く舞い上がる・・・・・・

なんてこともなく。

「あ、あれ？」

相変わらず、河原で立ち尽くしているオイラ。

「あら、なーんだ。飛べないのね」

シルフさんの失望の声。

「そ、そうみたい。オイラじゃ空飛ぶ魔法つかえないみたい・・・・・・」

オイラ泣きそうな気分だった。

飛べないとなると、今晩中に小屋に戻れないし、畑の魔法植物が全滅しているかもしれない。

ど、どうしよう・・・・・・

途方にくれていた。

「ほら、しっかりしなさい。ここで嘆いていても、あの小屋に戻れるわけでもないのよ！」

そういいながら、シルフさん、オイラを慰めるように、柄をなで上げたみたい。

その途端、
オイラの足（毛）が地面を離れた。
「え？　えっ！？　ええ！？」
足（毛）をバタバタさせるけど、全然地面をとらえることができない。完全に空中に浮いている。
「まあ、アンタ、浮かんでいるじゃない！」
「え？　ええ！？」
シルフさんがオイラのまわりをくるりと回った。まるで、舞踏会のダンスをしているかのように。
そして、オイラの体も、空中で一回転。でも、その回転の動き、止まることなく、さらに、もう一回転、さらにさらに、もう一回転・・・・・・
結局、シルフさんが止めてくれるまで、延々とまわりつづける羽目に。
おかげで目が回ってしまった。
「オ、オエエエエェェェ～～～」
き、気分が悪い！
なんにせよ、オイラ呪文で浮き上がることは出来たけど、その運動を制御することはできない。
う～ん・・・・・・
「まあ、いいわ。私が、あの小屋まで連れて行ってあげる。感謝しないさいよ！」
シルフさんが、あきれてそういった。

オイラたちは、その夜のうちに、なんとか小屋に戻ってくることが出来た。
夜、上空から見る森は薄気味悪く、フクロウがホーホー鳴いているのも、恐ろしげ。
オイラが上空を飛んでいると、獲物か何かと勘違いした猛禽たちが、何度か襲い掛かってきたが、そのたびに、シルフさんが突風に

なって、鳥たちを撃退してくれた。
ここ数日の手助け、シルフさんには、感謝してもしたりないぐらいだ。
ただ、少々、口が悪いのが玉に瑕だけど・・・・・・
「ちょっと、なによそれ！　そんなこと考えるのだったら、守ってあげないよ！」
あちゃ、シルフさんには、オイラの考えていること、筒抜けだったのだ。
「う、うそ、うそ！　シルフさんには、感謝しかありません！　どうもありがとう！」
「そ、分かればよろし！　感謝の気持ちは素直につたえるものよ！　余計な但し書きはつけないで！」
「は、はーい・・・・・・・」
ともあれ、小屋で一服すると、日が昇る前から、オイラは畑に出て、畑仕事に精を出した。
おかげで、なんとか雑草モンスターたちを撃退することができ、枯れさせることもなく魔法植物たちを守ることが出来た。
その晩、オイラは、ご主人の書斎に入ってみた。
本棚に並んだ本の背表紙の文字を眺めてみる。
・・・・・・！？
オイラ発見した！　全部の本のタイトルを読み上げることが出来る！
ということは、大体の本の内容に予想をつけることができるってこと。
オイラの中で喜びが爆発した！
もし、この爆発が本当のものだったら、その瞬間にオイラの体が、あのご主人の実験に使われたグラスのように、粉々になっていたに違いない。
「や、やったー！　やったぞー！！」
心の底からの無音の叫びが、小屋中に響き渡った。

神の娘、光の少女　1

「フィオーリア　フィオーリア」
閉ざした扉越しにくぐもった少年の声が聞こえてきている。
すべての窓も入り口の扉も閉ざした薄暗い礼拝所の中。
祭壇前の祈祷台の影にまぎれるようにして、ずいぶん小さな人影がたたずんでいる。
背中までの長さの髪、ほっそりとした白い手足。胡坐を組み、両手で印を結んでいる。
その人物、眼を半開きにし、静かにゆっくりと息を吸い、吐き出す。
清潔で質素な麻のワンピースを着ており、その姿は、明らかに少女のものだ。7，8歳ぐらいの少女。
「フィオーリア　フィオーリア」
礼拝所の奥の扉の近くにまで呼び声の主がやってきた。
やがて、ドアノブがカチリと回り、ギィーと扉が開く。
「フィオーリア、いる？　いたら、返事をしろ！」
だが、祈祷台の影の少女、その声にまったく反応することもなく座り続けたまま。
扉から礼拝所に入り込んだ18，9ぐらいの少年、ようやく祈祷台の影にいる少女に気づいたようで、軽くため息を吐いて、祭壇へ近づいてきた。
そして、祈祷台の脇に立った。
「こら、フィオーリア！　目上の俺が呼んでるのだから、返事ぐらいしなさい！」
それでも、フィオーリアと呼ばれた少女は身動きひとつしない。ただ、静かに息を吸い、吐き出すばかり。
「ったく！　このガキは・・・・・・」
少年はしゃがみこんで、フィオーリアの顔を覗き込んだ。そして、

印を結んでいる腕をとり、無理やりに引っ張る。
「いたっ！　トマス、痛い！　乱暴に引っ張らないでよ！」
鈴が鳴るような澄んだ声。少女が初めて声をあげた。
「ほらっ、フィオーリア。いつも言っているように、こんな暗いところに隠れていたら体に毒だぞ！　外は折角晴れているのだから、みんなと一緒に遊んできたらどうだ？」
フィオーリアは、トマスに無理やり祈祷台の影から引きずりだされ、力いっぱいつかまれ手の形に赤くなった二の腕をさすっている。祈祷台の影から引きずりだされたおかげで、ちょうどオイラのいる祭壇脇の位置から全身がみえるようになった。
開けっ放しの入り口から差仕込む光に照らされた少女は、星の光を凝縮したかのような輝く肌をもち、繊細だが、優美な顔立ちをしている。そして、その顔を縁取って漆黒の髪が暗黒の川のように流れている。まだ、少女というにふさわしい年恰好だが、あと１０何年かのちの将来には、男たちを狂気の渦に突き落とすだろうと十分に予感させるものがあった。
だが、今は、その美しい顔をゆがめ、まがまがしい眼をトマスに向けている。
「フンッ！　こんな日中に外へなんか出たら、日焼けしちゃうじゃない！　知らないの？太陽の光は、女の肌の敵なのよ！　まったく！」
「って、なにが女の敵だよ。まだ、ガキのくせに！」
「女の肌の敵よ！」
甲高い声で言い直し、フィオーリアはトマスをにらんだ。
トマスも、怒りを押し殺しているのが分かる表情をして、睨み返していた。
「フィオーリア、お前、まだ子供なんだから、こんなところに閉じこもってばかりいたら、体壊すぞ」
「大きなお世話だわ！」

フィオーリアは、腕を組んで、プイッとよそをむく。
「子供のときは、精一杯みんなと遊んで体を動かさないと、健康で丈夫に育たないし、大人になっても病気がちのひ弱な人間になってしまうぞ！」
「それは、そこらの下賤な人間どもが好んで口にする言葉ね。真実ではないわ！」
ため息ひとつ。トマスは、自分のこめかみを押さえた
「そんなんじゃ、運動が足りなくて、背が高くならずに、いつまでもみんなからチビチビってバカにされるぞ！」
「フンッ！　今はレオナルドたち、あたしの背の高さをバカにしてても、あと数年もすれば、あたしの靴を自分から舐めるようになるわよ。心配いらないわ！」
「・・・・・・」
嫌味なほど自信満々の一言。でも、公平にいって、確かにその通りだとは思う。トマスももちろんそう思ったようで、何も反論できなかった。
「わかった？　わかったなら、あたしの邪魔をしないで！　小さくなったせいで、失った魔力を取り戻すのでいそがしいのだから」
そういって、また祈祷台の影へ入ろうと・・・・・・
「それと、トマス、戻るときは、入り口の扉、ちゃんと閉めていってよ」
「・・・・・・運動しないと、胸も大きくならないぞ・・・・・・」
ボソッとつぶやいた一言、本人の意図よりも大きく、礼拝所全体に反響して響いた。
しゃがみこもうとしていたフィオーリアの体がピタリと止まる。そして、まるで油を差し忘れている機械かなにかのように、ギクシャクと体ごと振り向いた。
「な、な、なんですってぇ～～～！！！」
トマスはついとんでもない地雷を踏んでしまったようだ。
「言ってはならない一言を言ったわね！　トマスなんか、地獄に落

ちて鬼に食われちまえ！　いいえ、なんどでもゴキブリに生まれ変わって、下等な人間どもに追い回されて、つぶされまくればいいのだわ！　トマス、アンタ一生呪われた人生を送りなさい！　それから、あたしが魔力を取り戻したら、一番最初に、アンタをネズミに変えてやるんだから！　覚悟しときなさい！」

「ハッ？　なに言ってんの、こいつ？」

「大体、なにが、『神は人を完璧に作り上げたりはしない』よ！『人には何かしら欠陥があるものだ』よ！　『哀れな胸もまた愛嬌』よ！　みんなみんな、人の胸を見て、笑いものにして！　フンッ、なにが、『胸がなくても、君は素敵だ』よ！　調子いいこと言って、あたしを捨てて、あの胸ばかりが大きくて、頭が空っぽのロザリーにホイホイついていったくせに！　バカ、ウィリアムめ！」

フィオーリア、目にうっすらと涙まで浮かべている。

「え～と、え～と・・・・・・？」

「『胸が大きくならない』ですって？　あたしの一番気にしていることを！　あたしだって、あたしだって、いろいろ手を尽くしてみたのよ！　牛乳だって毎日飲んでたし、胸に利くってマッサージ法をいろいろ試してみたし、薬草だって自分で煎じて飲んでみたりしたわ。あげくにくそいまいましい神にまですがって・・・・・・」

フィオーリア、頭から湯気を立ち上らせて、トマスに詰め寄った。

「でも、あたしの場合、遺伝だったのよ！　仕方がなかったのよ！　母も姉も妹も、おばたちだって、大きくなかったんだから。何をやってもうまくいかなくて、どうしようもなくて、だから、だから、あたし、最後の手段で、呪われた山の魔女に弟子入りして、魔術で胸を・・・・・・」

「な、なんのことだ・・・・・・？」

突然の爆発にトマスもうろたえるばかり・・・・・・

そんなトマスに構うこともなく、

「いいわ！　見てらっしゃい！　絶対、絶対、今度こそは大きくなってやるんだから！　今に見てらっしゃい！」

なぜか、決然とこぶしを固めて凛と立つ少女フィオーリアだった。

神の娘、光の少女　2

「トマス、アンタ、東の野原のレグフォーン牧場へ行って、搾りたての牛乳をもらってきなさい！」
「な、なんで、俺が！？　牛乳がほしいなら、自分でもらってくればいいだろ？　ちょうどいい運動になるだろうし・・・・・・」
「ああん？　アンタ、こんなかわいらしい美少女を、一人であんな人気のないとこへおつかいにやるつもり？」
　確かに、村の近くだとはいえ危険すぎる。
「ああ、分かったよ。一緒についていってやるよ。ならいいだろ？」
　でも、それではフィオーリアには気に入らないことだったみたいで。
「なに言ってるのよ！　今日みたいな晴れてる外の光は、女の肌の敵だって言ってるでしょ！　どうして、こんな陽射しの強い日に、あたしが外を出歩かなくちゃいけないのよ！」
「お、お前なぁ～」
「今、外でキャッキャ言って走り回ってるジェシカを見てなさい。あんなに真っ黒に日焼けしちゃって。フンッ！　あと３０年もしたら、顔中シミだらけになって、とても見られた顔になってないから」
「・・・・・・」
「こういうのは、ほんのちょっとでも油断してはいけないの。ちょっとの油断が取り返しのつかない悲劇を生み出したりするものなのよ」
「って、なにがこういうのだよ」
　トマスのまぜっかえしを無視して、
「アンタ、エリオットの素顔を見てみなさいよ。アンタの百年の恋も、エリオットの化粧していないすっぴんの顔をみれば、いっぺんにどこかへふっ飛んでしまうわよ」
「な、な、なんのことだ！？　どうして、お、俺がお師匠様を・

・・・・・」
うろたえているトマスをジト目で眺めまわし、馬鹿にしたようにフンッと鼻をならした。
それから、ナニを思ったのか、小さな桃色の唇を軽く舌なめずり。
祭壇脇の壁に立てかけているオイラから見ても、実に邪悪な目つき。
「アンタ、バレてないとでも思ってたの？　いつも、あんなに熱心にエリオットのこと見つめてるくせに。アンタを見てると、いつかバカなことをしでかすんじゃないかって、毎度ハラハラしてるのよ」
「う、うううう・・・・・・」
「そうね、エリオットは、アンタのことは、ただの司祭見習いとしてしか、見ていないみたいだし、正直、全然眼中にないって感じだものね。かわいそうにね。うふふ」
トマスの目尻に光るものが・・・・・・
「エリオットにすれば、１０以上も年下のアンタなんか、圏外同然だもんね。それに、今は、ちゃんと夢中になっている相手がいるしね」
「・・・・・・」
トマス、顔色が青い。
「アンタだって、気がついてるんでしょ？　新月になったら、どこからか訪ねてくる黒マントの男」
「お、お師匠様・・・・・・」
「こないだの新月の晩、あたし、エリオットの部屋で眠ったフリして、あいつが黒マントとマスクをとるのを見てたのだけど、あの黒マント、３０ぐらいの細身で浅黒い肌の結構いい男よ。アンタの何十倍もダンディだったわ。エリオットも案外見る目あったのね。あたし、ビックリしちゃった」
「・・・・・・」
「で、そのあと、あの二人、部屋にこもって、なにしてたと思う？」
実に悪魔的な微笑。見るものの背筋を凍らせる。

「あの二人ね・・・・・・・」
「わ、わぁー！　わぁー！　わぁー！」
両耳をふさぎ、トマスが突然叫び始めた。
「わぁー！　わぁー！　やめてくれ！　絶対聞かない、聞きたくない！　わぁー！！」
「あの二人ね・・・・・・・」
「わぁー！　わぁー！　わぁー！」
「・・・・・・」
「わぁー！　わぁー！　わぁー！」
「・・・・・・（ピキッ）」
「わぁー！　わぁー！　わぁー！」
「・・・・・・（ピキピキッ）」
「わぁー！　わぁー！　わぁー！」
とうとう、フィオーリアの堪忍袋の緒が・・・・・・・
「う・る・さ・い・っ・！！」
でも、その声に答えたのは、
「わぁー！　わぁー！　わぁー！」
両耳を押さえたトマスの叫びだった。

神の娘、光の少女　3

「ホント、エリオットったら、いい玉だわ。かわいい顔して、男を部屋に連れ込むんだから」
トマス、頭にたんこぶを作って、祭壇の隅で膝を抱えて丸くなっている。
そして、オイラは祈祷台の横に乱暴に投げ捨てられていた。
ったく！　いくらトマスがうるさいからといって、オイラでトマスを殴らなくてもいいだろうに！
一瞬、オイラの柄が折れたんじゃないかって、本気で心配したじゃないか！
幸いなんともなかったけど。
「お師匠様は、そんな人じゃない・・・・・・・　お師匠様は、そんな人じゃない・・・・・・・」
祭壇の隅から、なにかブツブツＢＧＭのように聞こえてきているけど、フィオーリアの独白は、つづく。
「大体、トマス、アンタだって、気がついてたんでしょ？　エリオットって、子供を産んだことがあるって。することはしている女だって。大体、あたしが来たときに、エリオットがおっぱいくれたんだもの」
「お師匠様は、そんな人じゃ・・・・・・・！？」
言葉の途中で、なぜか息を飲む。驚いたような気配が・・・・・・・
その様子に目を丸くして、
「え！？　トマス、もしかして、全然気がついてなかったの？」
トマスが首を縦にひとつふった。
「ったく！　なんて、バカなの。普通なら気がつくでしょ？　女がおっぱいを出せるんなら」
「う、うううう・・・・・・」
「エリオットは、あたしが来る直前に、どこかで子供を産んでいた

のよ！」
　トマスは完全に石化した。そして、粉々に崩壊。
「でなきゃ、おっぱいなんてあげられるわけないでしょ？」
「お、お師匠様は、神に仕える身、きっと奇跡をおこして・・・・・・」
　弱々しい抵抗の声。
「フンッ！　どこの世界にそんな都合よく奇跡なんておきるのよ！　っていうか、もしあれが奇跡なら、あたしこそが神の子ってことよ！　神の子！　あたしは東の山の魔女だっての。ケッ、胸くそ悪い！」
　女神フィオーレの娘という意味の名をいただく少女の瞳が妖しく光っている。
「ホント、ゾッとするわ！　あたしが神の子だって！　なんで、神の娘でなくちゃいけないわけ？　まして、フィオーレなんて、元々ど田舎の緑色の藻がわき、汚らしい虫どもがうじゃうじゃ這いずりまわってる沼の名前じゃない！　汚らしい！　おぞましい！」
　フィオーリアは、心底いやそうにブルブル体を震わせ、悪態をつき続ける。女神フィオーレへの侮辱の言葉からはじまって、この世界の大地の神をののしり、世界の平和と安定を司る秩序の神をあざけり、やがて、この世のありとあらゆる神々に向かって、バチ当たりな罵詈雑言を並べ立て、罵倒し続けた。
　たっぷりと5分間。
　ゼェーゼェーハーハー
　フィオーリアは肩で息をしている。
「と、とにかく、トマスいい？」
「・・・・・・」
「女なんてね、子供を産まなきゃ、おっぱいはあげられないの。常識だから覚えておきなさい！」
　トマスますます小さく、小さく・・・・・・
「それによく考えてみなさい。フィオーレの教団がいくら弱小だか

らといって、どこの世界に３０にもならない小娘に神殿をひとつポンと任せる教団があるっていうの？　エリオットがどこぞの大貴族の娘だっていうのなら、それもありえるかもしれないけど、エリオットは、この町の商人の娘でしょ？」

コクリとうなずく。

「ならありえないことだわ」

フィオーリアは形の良い頭をひねっている。

「そういえば、この町は、ガスペール大公の領地内にあるんでしょう？　それに、エリオットのお父さんのやってるガシュー商会も、ガスペール大公家に出入りしているんでしょ？」

二度つづけて、コクリ。

「なら、おそらく決まりね。ガスペール大公なら、国王のいとこで、国の中でも一、二を争う大貴族だから、フィオーレの教団にあれこれ指図して、小娘に神殿のひとつや二つ寄付するぐらい、簡単なことだろうしね。きっとエリオットはどこかでガスペール大公か、それに近い人間と出あって、子供を産んだのよ。それもおそらく跡継ぎになる男の子」

ギュッと眉根を寄せている。

「だってそうでしょ？　女の子を産んだのだったら、エリオットをお払い箱にするときに、金握らせて、子供ごと厄介払いしただろうから、きっと男の子だったのね。でないと、後々の面倒までこんなにキチンと見るはずないだろうし」

「・・・・・・」

「ってことは、あの黒マント、もしかして、そのときのエリオットの相手？　そう考えると、なんだか、つじつまが合うわね。あの黒マント、絹製の結構いい仕立てのモノを身にまとっていたみたいだし」

フィオーリアが盛んに首をふって考えている間に、トマスは目立たないように、這うようにして、じりじりと入り口へ移動していた。

そして、入り口についた途端、転びながら出て、走り去っていっ

た。
「うわ〜ん！！　みんな、みんな、嫌いだぁ〜！！　ウソつきの大人もバチ当たりなクソガキも、みんなみんな大ッ嫌いだぁ〜！！！」
少年の心からの叫びが、神殿の廊下にいつまでもこだましつづけるのだった。

神の娘、光の少女　4

「あーら？　なに、あれ？」
突然、オイラの頭の中に声が響いた。
フィオーリアの方は、また再び祈祷台の影で座り込み、印を結びなおしている。本人が言っているように、魔力を鍛えているのだろうか？
でも、今オイラの頭の中で聞こえてきた声に対しての反応はなにもない。フィオーリアには聞こえていないのだ。
「あ、シルフさん、もどってきたんだ。ついさっきまでフィオーリアがトマスをいじめて遊んでいたんだよ」
「あら、相変わらず、おいたさんね、かわいい顔して、ふふふ」
おいたさん・・・・・・
まあ、いたずら小僧（小娘？）であるのは確かだけど・・・・・・
でも、相当根性がひん曲がっている。
「で、向こうはどうだった？　なにか面白い話、聞けた？」
「ううん、特にこれといってなかったわね。エリオットの部屋でガシューと二人でお茶のみながら、いろんなこと話していたけど。お互いの健康の話とか、商売の話とか、町の噂だとか、そんなのばかり」
「そう」
「あっ、そうそう、今度、どこかの家からガシューのところで小さな子供を預かることになったから、勉強を教えてほしいとか、なんとか言っていたわよ」
「ん？　そう。じゃ、フィオーリアに新しい仲間ができるんだね」
「うん、そうみたい」
「どんな子だろうね？　男の子？　女の子？」
「う～ん・・・・・・　話からすると、女の子みたいだけど」
「そ、ならよかった。レオナルドみたいな乱暴な子は、もうこりご

りだから」
「ふふふ、そうね。あんたも保護者の役回り大変ね」
「うん、そうだね。ハァ～。もし、ご主人が戻ってこられたときに、フィオーリアが怪我でもしてたら、オイラの命がいくつあっても足りないだろうな」
「ふふふ」
愉快そうな声をのこして、オイラの毛のまわりをそよ風が吹きすぎていった。

オイラは周りに人目がないことを確認してから立ち上がり、トコトコとトマスが開け放していった入り口の方へと移動していく。
入り口の扉の陰から、神殿の居住部へと続く廊下に人影がないことを確認して、外へでる。
ずっとフィオーリアの近くにいたので、薄暗い礼拝所に慣れた目には、中庭の窓から差し込む明るい光に照らされた廊下は、痛いほど輝いて見えた。
「うわっ、まぶしっ！」
思わず、掃除道具入れの方へ2，3歩よろける。
その途端。
フギィーー！！！
足元から、ものすごいうなり声が聞こえてきた。
この声は・・・・・・ペーター・・・・・・・
初めて出会ったあの日以来、オイラのことを警戒しまくりで、見かけるたびに、大きなうなり声をあげて威嚇してくる。
あれ以来、何年も経っているのだから、いい加減、慣れればいいのに、このバカ猫は！
オイラは身動きせず、ジッとその場に立ったままでいた。いつもならジッとしていると、すぐにペーターはシッポ巻いて逃げて行っちゃう。
でも、オイラと一緒に外へ出てきた者は、そういう穏健な考えを

持たないみたいで・・・・・・・

突然、ペーターの周りで空気が渦を巻き始めた。

ペーターのひげが、風に吹かれて、大きくしなり、急に、耳から首筋、背中、尻、シッポへと強い風が吹きぬける。

ペーター、オイラの姿が目の前にあってギョッとしていたのに、風が自分の体をいたずらしたものだから、たちまちパニックになった。

ギャッ！！　と短い悲鳴を上げて、1メートル以上垂直ジャンプ、着地と同時に、4つ脚を踏ん張り、毛を逆立てて、オイラを鋭い目でにらんできた。

こういうときは、ヘタに動いたりしたら、鋭い爪が一閃してくるんだよねぇ～　経験では。

そこへ、騒ぎを聞きつけた哀れな犠牲者が一人。

「こらっ！　ペーターなにやってるの？　さっきのトマスをいい、ペーターといい、一体なんなの？」

エリオットが廊下を曲がって、近づいてくる。そして、しゃがんでペーターの背中を・・・・・・・

「痛ッ！　ペーターなにするの！」

手の甲に赤い血の線を二本走らせたエリオットは、一目散に逃げていくペーターに抗議の声をあげた。

その抗議の声に構わず、ペーターは一刻も早くその場を去りたい一心で、逃げていくのだった。

「ったく、一体なんなのかしら？」

やがて、エリオットは、手の甲を押さえたまま、オイラのいる方へ近づいてきた。

いつもながら、オイラは正体がばれるのではないかと、ヒヤヒヤしながら、身を硬くしているのだけど、エリオットは、オイラをつかみ、持ち上げて、下になにもないことを確認して、首を振るのだった。

「なにもないじゃない。ホント、ヘンな子」

それから、オイラを使って、廊下の隅を軽く掃いたあと、掃除道具入れへしまった。

く、屈辱だぁ〜！！！

どこかで、誰かがクスクス笑っている声がずっと聞こえていた。

神の娘、光の少女　5

「じゃ、エリオット、私は、これで帰るから、ジョゼフィーヌの件、よろしく頼むな」
「うん、分かった、パパ」
「おや、エリオット、その手は？」
「ああ、さっきペーターが・・・・・・」
「そっか、気をつけるんだぞ」
「うん、パパも帰り道、気をつけてね」
「ああ、そうする」
掃除道具入れの近くの窓から、中庭で別れの挨拶をしている男女の声が聞こえてきていた。
エリオットとその父親のガシューの声。
おそらく、ガシューが中庭の井戸の横の裏木戸から出て行くところなのだろう。
ってことは、今度くる女生徒というのは、ジョゼフィーヌという名前なのだろう。
なんだか、上品な名前。
「あら、アンタ、そういう名前がすきなの？」
さっそく、オイラの思考を読んだシルフさんの声が・・・・・・
「い、いや、そういうわけでは」
「ふふふ、隠さなくてもいいのよ。どうせ、私には隠せやしないのだから」
「・・・・・・」
ジョゼフィーヌ。なんだか、高貴な女性の名前のようだ。
オイラがご主人の小屋で呼んだ書物の中にも、ジョゼフィーヌという名前が何度も出てきた。もちろん、魔法についての書物ではなく、歴史や物語の本の中で。
あるジョゼフィーヌは、国民からの信望の厚い良い王に、自分の

父である宰相を汚職の罪で殺された。その復讐のために、フィアンセの暗黒騎士の力を借りて、王を暗殺した。
また、あるジョゼフィーヌは、貧しい職人の娘として生まれたが、生来の美貌と権謀術策を駆使して、ライバルたちを次々に蹴落として、王妃の地位にまで上り詰めた。
そして、あるジョゼフィーヌは、周りの人間を次々と毒殺し、最後には、町の広場で火刑にされたという。
ご主人の家にあった物語の中のどのジョゼフィーヌも、ろくな女ではなかった。
「あら？　そうなの？」
「そう！　ジョゼフィーヌといえば性悪女なんだよ！」
そう、一人を除いては・・・・・・
そのジョゼフィーヌは、すばらしい美女で、あるとき、大地の神の娘と美しさで勝負することになった。そして、勝ったのはジョゼフィーヌ。色仕掛けの誘惑が審査をする他の神々の心をとらえてしまったのだ。その結果、当然、大地の神の怒りを買って、暗い森のねじれた樹に姿を変えられたという。
「って、そんな女のどこがいいのよ！」
シルフさんのツッコミが頭の隅に聞こえている。
でも、オイラはこう思うのだ。
木製のヤツには、悪いやつなんていない！
ジョゼフィーヌ、本当にいい名前だ！
「ふん！　木なんかより、空気で出来た存在の方が、何百倍もマシだわ！」

5日後の朝。
礼拝所は、少年と少女たちでいっぱいに混みあっていた。
今日はフィオーレ神殿での学校の日。
神殿では、一日ごとに学校が開かれる。授業料は無料だから、町に住む少年や少女たちだけでなく、近郊の農場・牧場の子供たちも、

学校のある日は、フィオーレ神殿に集まってきていた。
今日も、オイラは中庭で窓のそばの壁にもたれながら、子供たちと同じように授業を受ける。
毎年同じような内容の授業なので、オイラにはちょっと退屈だが、フィオーリアも出席しているので、見守るためにも、そこにいる必要がある。
実に面倒くさい話だ。
学校がなければ、ご主人の小屋に閉じこもって、ご主人の蔵書を読みふけったり、畑仕事をしていたりしたいのだが・・・・・・
そうこうするうちに、フィオーリアが奥の扉から入ってきた。
何人かの子供たちは、おはようと声をかけるが、フィオーリアはいつものように、まったく無視。
ほんと、いけすかないガキ！
そして、いつものように、礼拝所でもっとも奥まった暗い席へ歩いていく。
だが、その席には、先客が・・・・・・
「レオナルド、いつもいっているように、その席はあたしの席よ、どきなさい！」
子供たちの私語でざわついていた礼拝所の中が、一瞬で静まり返った。子供たちの視線が一斉にフィオーリアとレオナルドに集まった。
当のレオナルドはというと、
「フンッ、チビが！　今は俺様が座っているんだ！　お前こそ、どこかへ行きな！」
鼻でせせら笑う。
「あたし、荷物を置いて、場所とりしてたでしょ？　だからあたしの席なの。そこ、おどきなさい！」
「さあな？　そんなこと俺のしったことじゃないな、チビ！」
フィオーリア、かなり危険な目をしてレオナルドをにらんでいる。
「そう、ならいいわ。そこをどかないのだったら、痛い目をみても

しらないわよ」
「ほう、どう痛い目にあわしてくれるんだ？　チビのくせに」
依然として薄ら笑いを浮かべたまま、レオナルドは左右を振り返って、子分の子供たちに余裕のあるところを見せたのだけど・・・・・・・
次の瞬間、フィオーリアのパンチがレオナルドの顔面にヒットした。
でも、フィオーリアよりも体が大きく、体つきがガッチリしているレオナルド、そんなパンチごときで沈むはずもなくて・・・・・・・
すばやい身のこなしで立ち上がると、こぶしをボキボキ鳴らしながら、フィオーリアを見下ろす。
礼拝所の中が、子供たちの騒ぎでうるさくなった。
だが、この勝負自体は、あっけなく終了した。
レオナルドが殴りかかるよりも前に、フィオーリアの蹴り上げた脚が、レオナルドの股間をまともにとらえたから。
レオナルドは股間を押さえ、苦痛に顔を歪ませて、その場に崩れた。その顔を容赦なく、フィオーリアの二撃目、三撃目のキックが襲う。
「ふっ、毎度、毎度、つまんない手間、取らせるんじゃないわよ！
まったく」
フィオーリアは軽蔑をこめた一言をうずくまるレオナルドの背中に浴びせ、今の一連の動きで乱れた髪を後ろに払った。
「ほら、そんなところで転がってないで、どっか行きなさい、通行の邪魔よ！」
その声を受けて、よろよろと立ち上がったレオナルド。もう戦意も消失したみたいで、とぼとぼとその場を離れていった。
「で、あんたたちも、痛い目みたいの？」
レオナルドが去っていくのを目の端で捉えながら、フィオーリア、冷たい視線をレオナルドの子分たちにも浴びせる。
レオナルドの退散で半分腰を浮かしかけていた子分たち、たちま

ち転がるようにして、レオナルドの後を追っていった。
　ようやくいつもの席を確保して、フィオーリアはなにごともなかったかのように腰掛けた。
「ったく！　ゲスがっ！」
　一方、敗れたレオナルドは、礼拝所の一番後ろまでいくと、やっぱり、いつもの席に腰掛けている。でも、なんだか様子が・・・・・・
　チビの女の子に完敗したというのに、悔しさを顔に浮かべたりなんかせず、机に頬杖をついて、フィオーリアの方を眺めていた。
　どこか恍惚とした表情を浮かべて。
「今日もかわいいなぁ～　しゃべっちゃったよ。触られちゃったよ」

神の娘、光の少女　6

しばらくして、奥の扉から、授業に使う道具を抱えたトマスとエリオットが入ってきた。
さっきの騒ぎでまたざわついていた子供たちも、またピタリと静まった。
エリオットは祈祷台に立ち、子供たちに向き合う。
「はい、みなさん、おはようございます」
「おはようございます」
子供たちは声をそろえて、返事した。
「はい、いいお返事でした。今日もみなさん、いっぱいお勉強しましょうね」
「はい」
「では、授業を始める前に、みなさんに新しいお友達を紹介します。さあ、入ってらっしゃい」
奥の扉の方を振り返って、エリオットが声をかけると、扉の陰から、随分小柄なほっそりとした人影が・・・・・・
豊かな金髪の髪をなびかせた少女。
少女は礼拝所の中をキョロキョロと見回し、おずおずとした足取りで入ってきた。
「わぁ～　すごくかわいい子じゃない」
オイラの隣からシルフさんの声が聞こえてくる。
そのシルフさんの感想、礼拝所の中の子供たちも同じように持ったようで、あちこちから、ため息が聞こえてきた。
「ああ、そうだね」
「フィオーリアが夜空に輝く月だとしたら、あの子は、昼の太陽ね」
「ああ、そう見えるね」
「みなさん、あたらしいお友達のジョゼフィーヌです。これから仲

良くしてあげてね。分からないことがあったら、親切に教えてあげてください。いいですね」
「はい」
やけに力強い返事が子供たち、特に男の子たちから返ってきた。
エリオットは、ぐるりと礼拝所の中を見回し、フィオーリアの隣に目を留めた。
「ジョゼフィーヌ、そこが空いているわね。今日はあそこに座りなさい」
『はい』と鈴が鳴るようなかわいい声で答えて、ジョゼフィーヌはさっきまでレオナルドの子分たちが腰掛けていた席のひとつへ向かった。
途中、子供たちから、『こんにちは』とか、『よろしく』なんて、声がかけられるたびに、『こんにちは』とか、『こちらこそ、よろしくお願いします』なんて、返事をするし。
ホント、どこぞの性悪なガキとは、大違い。
そして、フィオーリアの隣に立ち、挨拶した。
「こんにちは。これから、よろしくお願いします」
右手を差し出す。
でも、その挨拶も、出された手も無視して、フィオーリアはそっぽを向いたまま。
フィオーリアは、ほかの子と同じようには歓迎するつもりがないのは明らかだった。
仕方なくジョゼフィーヌは手をしまうと、黙ってそっと腰掛けた。
そのとき、だれかがポツリとつぶやいたのが、オイラにははっきりと聞こえていた。
「ジョゼフィーヌですって？　フンッ、性悪女にありがちな名前ね」
どこか陽のあたらない、暗い席の方からの声のような気がした。
「だから、大地の神は、その愛娘フィオーレを、たびたび氾濫を起こして、人々を苦しめていた川に封じて、人々を洪水の被害から守

ったの」
エリオットはトマスが掲げる地図を指差しながら、この町の近くを流れる大河について話していた。
子供たちは、一生懸命その話の内容を、ノートに書き取っていく。
そんな中で、相変わらずそっぽを向いている少女の口からポツリとこぼれた言葉をオイラは聞き逃さなかった。
「フンッ！　なにがフィオーレ川よ。あたしが子供だったころは、この川はエフェールって呼ばれていたわ。フィオーレなんて、上流の方の辛気臭いちっぽけな沼の名前でしかなかったのに、ホント、すごい出世だこと」
ん？　一体なんのことだろうか？
エフェール？　沼？　出世？
う～む・・・・・・
その皮肉のこもった陰口が聞こえなかったかして、エリオットは説明を続ける。
「いい？　このフィオーレのおかげで洪水が起きなくなり、人々が安心して暮らせるようになったから、川の神フィオーレに感謝して、人々は川沿いの各地に神殿を立てたの。そのひとつが、今私たちが勉強しているこの場所なの」
「フンッ！　だから、アンタたちも、大きくなったら、私たちフィオーレ教団に感謝の気持ちをこめて、お金を寄付しなさいってことね」
なにか、ブツブツ言っている声が、オイラの鋭敏な耳にまた聞こえてきた。
と、突然、
「先生！　ひとつ質問があります」
甲高い声が礼拝所にあがった。
全員の視線がその声の主に集まる。フィオーリアも思わず、そっちを見ている。
「はい、ジョゼフィーヌ、なんでしょう？」

その声の主はジョゼフィーヌだった。ジョゼフィーヌはハキハキとした声で、質問を始めた。
「大地の神は、確か5人の息子がいて、それぞれをこの国の大河に封じて神にしたハズですが、どうして、この川だけ娘を封じたのでしょうか？」
ジョゼフィーヌは質問を終えて、まっすぐにエリオットを見つめた。
一瞬、エリオットも思わぬ質問にたじろいだ様子を見せたが、すぐに気を取り直して、
「それは、大きい順に男の神たちを封じていった結果、この国で6番目の長さのこの川は、大地の神の5人の息子たちだけでは足りなくなったからですね」
余裕を見せるように、エリオットは笑いかける。
「なるほど。あっ、でも、こないだ派遣されていた国の奥地探検隊が都に戻ってきて、このフィオーレ川は今まで考えられていた以上に長いって報告していたとおもったのですが？」
「え？　そ、そう？」
「ええ、そういうふうにお父様が・・・・・・」
自分でお父様という単語を口にした途端、ジョゼフィーヌ、なぜかハッとした表情を浮かべ、口ごもった。
「い、いえ、なんでもないです・・・・・・」

神の娘、光の少女　7

「ねぇ？　ところで、あそこのむさくるしいのナニ？」
礼拝所の中では、まだ地理の授業が続けられている。どの子も、真剣なまなざしで、トマスが掲げる地図に見入っている。
もちろん、シルフさんがむさくるしいと表現したのは、礼拝所のトマスのことなんかじゃない。礼拝所の外。井戸にもたれかかりながら、外した大剣を鞘ごと抱え込むようにして座り込んでいる男のことだ。
見たところ３０代ぐらい。なめし皮の胸当てをつけ、ボサボサの長髪を首の後ろで束ね、薄汚れた茶色のマントを羽織っている。
明らかに冒険者のなり。
さっきからジッと座っているばかり。身動きひとつしない。すこし伏せた顔が陰になっているが、両目は閉じられているみたいだ。でも、明らかに礼拝所の気配をうかがっている様子だ。
監視しているのだろうか？
でも、特別、殺気のようなものを感じないところを見ると、危険な人物というわけでもないみたいだが・・・・・・
「なんだろう？　分からない。さっきからずっとあそこで座り込んで、ああしているんだ」
「なんなんだろうね？　ヘンなの？　ホント見てるだけで汗臭くなるわね。どっかいってくれないかしら？」
我々が見ていると、ペーターが現れた。
裏の木戸の陰からひょっこり顔を出した途端、固まった。
見慣れないヤツが中庭の中にいるのだから、当然なんだが。
ペーター、警戒しながら、中庭に入り、その男を遠巻きにして神殿の方へ移動しようとしたのだが・・・・・・
突然、男が身動きした。
ペーター、ビクッと逃げ腰。

男は右手をポケットの中へ突っ込んだかと思うと、何かを取り出した。
ジャーキー？
その男、ジャーキーを取り出すと、ペーターに見せびらかすようにして、左右に小さく振る。
ペーターも、男の手の中のものがジャーキーだとすぐに気がついたようで、手の動きに合わせて、視線もユラユラ。いまにもヨダレを垂らしそうな表情。
と、ジャーキーが男の手を離れた。放物線を描いて、ペーターの足元へ。
一瞬、ペーターは飛びのいたけど、すぐに落下地点へ向かってダッシュ。
前脚でジャーキーを押さえると夢中になって食べ始めた。
ったく！　毎日、トマスから肉の切れ端とか、魚の尻尾とか、もらっているくせに、コイツは・・・・・・
ジャーキーを投げたその男はというと、目を細めて、満面の笑みでいるし・・・・・・
さっきまでのクールな冒険者の雰囲気は跡形もない。
顔をくしゃくしゃにして、ペーターがジャーキーをかじっている様子をうれしそうに眺めている。
なんなんだ、コイツは一体・・・・・・・

やがて、礼拝所の中の授業は終わりの時間を迎えた。
「はい、では、今日はここまで。みんな午後からもしっかりお父さん、お母さんの言いつけをきいて、いい子で、元気にすごしてね」
「はーい」
いつものエリオットの終わりの言葉に、子供たちの元気な返事が聞こえてきた。
やがて、
「ジョゼフィーヌちゃん、ジョゼフィーヌちゃんって、どこからき

たの？」
「ジョゼフィーヌちゃん、お人形さんごっこ好き？」
「ジョゼフィーヌちゃんって、兄弟いるの？」
などなど、女の子たちがさっそくジョゼフィーヌに群がって、質問攻めにしている。
それに対して、ジョゼフィーヌはいやな顔ひとつせず。
「私？　私、ニハデの街から来たの」「うん、好きよ」「ううん、私、一人っ子」などなど、丁寧に答えていた。
ホント、ジョゼフィーヌはいい子だ！
それに引きかえ、どこぞのクソガキは・・・・・・
フンッとジョゼフィーヌの周囲に早速出来た小さな一団に冷たい目を向けると、足早に奥の扉へ向かっていった。
そのフィオーリアに、トマスが「フィオーリア、悪いけど、その地図持って行って」などと声をかけるのだけど、もちろん、無視。
乱暴に奥の扉を開けると、さっさと、その隙間へ消えていくのだった。
その背後に残されたのは、いつものトマスの舌打ちと、なぜか凍りついたように立ちすくむ少女がひとりだった。

神の娘、光の少女　8

いつの間にか、井戸のそばにいた男も、いなくなっている。
いや、それどころかシルフさんの気配も。
もしかすると、あの男を追いかけていったのか？
オイラは、なおしばらく窓の外から、子供たちに丁寧に受け答えするジョゼフィーヌの横顔を眺めていた。
実にかわいい。素敵な笑顔だ。
何人かの女の子たちが、ジョゼフィーヌに一緒に帰ろうっと誘ったが、エリオットとまだ話すことがあるとかで、ジョゼフィーヌは礼拝所の中に残っていた。
もう、あらかたの子供は家路につき、礼拝所の中にいるのは、たった二人。ジョゼフィーヌと・・・・・・レオナルド！？
礼拝所の中で二人きりになった途端、レオナルド、ジョゼフィーヌに近づいていく。
なんか、険悪な雰囲気。
ま、まさか、レオナルド、ジョゼフィーヌに悪さでもしようというのか！？
と、とめなければ！
オイラはご主人の書斎で読んだ、攻撃魔法のひとつの詠唱に入った。
「おい！　お前、さっき、フィオーリアのことにらんでいただろう？」
レオナルドは、厳しい声で話しかけたが、ジョゼフィーヌはとびっきりの天使の笑顔で、
「え～？　なに～？　私、わかんな～い」
うう、あんな風な笑顔で話しかけられたら、どんな人間でも蕩けてしまいそうだ。
それでも、レオナルドは態度を崩したりもせず、

「なに、しらばっくれてんだ！　俺、ちゃんと見てたんだぞ！　フィオーリアが出て行くとき、お前がすごい顔して後姿をにらんでたの。お前、なんのつもりだ？」
さっきの天使の笑顔はそのままなんだけど、途端に、何かが抜け落ちたみたいな、冷ややかな空気が漂いだした。
「ええ？　なぁに？　私、わかんな～い」
目が笑ってない・・・・・・
そんなジョゼフィーヌに、指をポキポキ鳴らしながら、迫るレオナルド。
「なに、するつもりだ？　もし、フィオーリアにひどいことする気だったら、俺が絶対、許さないからな！」
「ええ～　この人なに～？　ヘンだよ。こわ～い」
相変わらず、口調はかわいらしい女の子のものなんだけど、目が細まって、厳しくするどい視線でレオナルドを見つめているし・・・・・・
思わず、オイラ、呪文の詠唱を中断してしまった。
レオナルド、さらに一歩詰めより、両手でジョゼフィーヌの胸倉をつかんだ。
「いいな！　わかったな！　フィオーリアには手をだすな！　もしなにかあったら、ただじゃすまさねぇ！」
前後に揺さぶる。
「おい、ゲス野郎！　その汚い手を放しな！」
どこかから低い氷のような声が聞こえてきた。
えっと、今だれがしゃべったんだ？
たしか、ジョゼフィーヌの方から聞こえた気がするのだけど・・・・・・
「放せって言ってんだろが！」
ジョゼフィーヌの口が『ハナセッテイッテンダロガ』と動いていた。
その直後だった。

胸元にかかっていたレオナルドの両手が、ジョゼフィーヌの腕のたった一振りで弾き飛ばされた。一瞬、少女の体が地面に沈んだかと思うと、宙に跳ね上がり、残像を描いて、縦に回転した。
そして、気が付けば、レオナルドのこめかみに少女のかかとが入っていた。
飛び上がり、前転の回転力を加え、威力が倍増したかかと落とし・・・・・・
レオナルドは、一撃に沈んだ。
「フンッ！　ゲスが！」
白目を剥いて足元に倒れている少年にそう吐き捨てるジョゼフィーヌがそこにいた。

「お見事です」
オイラが目の前の光景に、呆然として、立ち尽くしていると、奥の扉の陰から、声が聞こえてきた。
男の声。
その陰から現れたのは、先ほどの冒険者風の男。
「レオン、この虫どこかに片付けといてくれる？」
つま先で、レオナルドの体を蹴飛ばす。
「急所は外しておいたから、そのうち息を吹き返すと思う。どこか玄関脇にでも」
レオンと呼ばれた男は、うなずいた。
「それと、確認した？　黒髪のチビ」
「はい、先ほどエリオット司祭様と話しているのを見かけました」
「そ、ならよろしくね」
また、くったくのない天使の笑顔。
「は、はぁ・・・・・・」
でも、レオンはなぜか、浮かぬ顔。
黒髪のチビ？　エリオットと一緒だった？　それって、一体・・・・・・

「よろしいのですか？　本当に」
「ああ、いいよ。構わない」
「しかし・・・・・・」
「ん？　なに？　なにか問題でもあるの？」
不機嫌そうに片眉を上げて見せるのも、なかなかかわいい。かわいいのだけど・・・・・・
なにか、こう、オイラの胸にモヤモヤした不安が。
「は、はぁ～」
「大丈夫だよ。なにかあっても、お父様に頼めば済むことだし、事件のひとつやふたつ、もみ消してくれるよ」
「し、しかし・・・・・・」
「とにかく、お前は私のためにお父様がつけてくれたのだから、私の命令は、ちゃんときかなくちゃいけないの。わかった？」
「は、はぁ～」

う～ん、この二人、一体何をするつもりなんだろうか？
二人の密談の後、レオンは、レオナルドの体を担いで外へ運び出し、ジョゼフィーヌは、奥の扉から神殿の奥へ歩き去った。
だけど、一体、何をするつもりなんだろうか？
エリオットと一緒にいる黒髪のチビといえば、もちろんフィオーリアのことだろうし。
話の雰囲気からすると、ろくでもないことをしでかそうとしているのだけは確かだが。
う～む。
ま、考えていても仕方がないか。
とりあえずは、これからしばらくは、ジョゼフィーヌとレオンの様子をしっかり見張っていなければ・・・・・・
オイラは、そう結論付けて、ジョゼフィーヌの後を追うことにした。
やっぱり、美少女の後をつける方が、むさくるしい冒険者を観察

するよりもたのしそうだしね。
そういえば、シルフさん、あの冒険者の後をつけてどこかへ出かけたのではなかったっけ？
どこへ行ったのだろう？

神の娘、光の少女　9

ジョゼフィーヌは、物怖じしない足取りで、ずんずん廊下を進んでいく。

途中、トマスとすれ違ったときは、にこやかに挨拶を交わしていたが、フィオーリアの自室の前を通り抜けるときには、ドアが開けっぱなしになって、中でフィオーリアがゴソゴソしている姿が見えていたにもかかわらず、それとなく距離をとり、気づかないフリをして、無言で通り過ぎていった。

う～ん・・・・・・

なにか、気に入らないことが？

たしかに、さっき礼拝所でフィオーリアはジョゼフィーヌに冷淡な態度を示し、侮辱するようなことをボソッと口にしたりしたけど、そのことの報復を企てているのか？

ん？　でも、レオン自身は、中庭にいて、フィオーリアとジョゼフィーヌとの間で、そんなことがあったなんて知らないはずだろうし。

にもかかわらず、レオンは、予めフィオーリアのことを認識し、なにかよからぬ行動の対象にしようとしているようだ。

ってことは、礼拝所の中でのことが原因というわけでもないだろう。

なにか、それ以前、過去にこの二人の間であったのか？

オイラは、フィオーリアが現れてから、今までの出来事を順に思い出していった。

ご主人の小屋での出会い。箱舟に乗っての川くだり。フィオーレ神殿での生活。礼拝所での勉強。

オイラの記憶のどこにもフィオーリアとジョゼフィーヌが出会った記憶なんてないし、もちろん、争ったこともない。

う～む、一体・・・・・・

ジョゼフィーヌは、司祭の部屋のドアの前に立った。
とはいえ、半分開いていたので、中にいるエリオットの様子は外から丸見えなのだが。
エリオットは、ドアに背を向け、机に向かって、なにか熱心に書き物をしていた。
そのエリオットの背中を、ジョゼフィーヌはジッと見つめる。
身動きもせず、むさぼるように・・・・・・
えっと？　ジョゼフィーヌはなにをしているのだろう？
と、エリオットの足元から鳴き声がきこえた。
ニャー！
ペーターだ。さっきレオンからジャーキーをもらって、幸せな気分でエリオットの机の横で寝転がっていたのだろう。そして、ジッと部屋の中を覗いている少女に気がついて声をあげたのか？
エリオットは、机から顔を上げることなく、手を伸ばしてペーターの頭をなでただけだが、ジョゼフィーヌは、ハッとして、慌ててドアをノックした。
――――コンコン
「はーい」
エリオットが振り返った。
「あ、ジョゼフィーヌ。中へ入って。そこ座っていいわよ」
「はい、失礼します」
伏目がちに、ジョゼフィーヌは部屋に入っていく。
エリオットが指したソファーに脚を揃え、行儀よく腰掛けた。
「どう、初日の授業は？　慣れそう？」
「はい。大丈夫そうです」
「ニハデから来たのじゃ、ずい分とレベルの低い授業に感じたのじゃないかしら？」
「いいえ、そんなことないです」
「そう？　ならいいけど・・・・・」

まだ小さいのに、社交辞令をキチンとこなすとは・・・・・・・
「あ、これ、ガシューおじさまから、司祭様に」
ジョゼフィーヌは、ポケットの中から2通の手紙を取り出した。
「それと、こちらはニハデの神父さまから」
「はい、確かに。えっと、まずは、さっきお付きの人が、とてもたくさんの金額を神殿へ寄付してくださったから、あなたにもお礼をいいますね」
「あ、いいえ。そんな・・・・・・」
「あと、ノートとか、鉛筆とか、必要なものがあったら言ってね。用意しておくから」
「ありがとうございます」
「授業は二日に一度。あなたは午前のクラスよ。次の授業はあさってね。それはニハデの町と一緒のはずよね」
「はい」
「あと、ここはなにぶんにも田舎の町だから、都会のニハデと違って、乱暴な口調や態度の子も多いけど、みんな特に悪気があるわけではないので、あまり悪く取らないであげてね。それでも、もし困ったことが起きたら、遠慮しないで、なんでも言ってね」
「はい、そうします」
「はい、では、今日はこれで。さっきの人、え、えーと・・・・・・・」
すこし口ごもる。名前をど忘れしたのかな？　でも、すかさず、
「レオンです」
「そう、レオンさんは、表で待っているのかしら？　帰り気をつけて帰っていってね」
「はい、ありがとうございます」
「じゃ、また、あさって」
「はい、失礼します」
「はーい」
そういって、エリオットは、また机に向かった。ジョゼフィーヌ

は、一瞬さっきと同じように、むさぼるようにエリオットの背中を見つめていたけど、今度はすぐに首を振って、ペコリとお辞儀し、なにかを振り切るように足早に部屋を出てきた。
「あーら？　この二人、なにかあるのかしら？」
突然、オイラの耳元でシルフさんの声がする。
「うをっ！？　ビックリした」
「さっきの冒険者も、この部屋へ来て、エリオットに挨拶していったわよ」
「そ、そうなんだ」
「あの二人、前からの知り合いだったみたい。なにか親しげに話してたもの」
「へ、へぇ～」
そうか、エリオットとレオンが昔からの知り合いか。
・・・・・・
ん？　なにか引っかかるものが・・・・・・
え～と・・・・・・
そ、そうか！　さっき、エリオット、レオンの名前を忘れていた様子だったのでは？
「フンッ！　相変わらずバカね！　あれは知っていて、口にしなかったのよ。というか、ためらったのよ」
「え！？　なんで？」
「そんなの決まってるじゃない！　フフフ」
なぜか自信たっぷりな口ぶりなのだけど、含み笑いをもらすばかりで、その理由を全然オイラに教えてくれようとはしない。
一体、なぜなんだ？
ジョゼフィーヌとレオンとの会話、フィオーリアとの関係、そして、エリオット。今日はナゾだらけだ。どこへいってもナゾに出会ってばかり。
どうなっているのだか。
今日はミステリー記念日だとでもいうのだろうか？

神の娘、光の少女　１０

その夜。
フィオーリアはいつものように、夕方からずっと礼拝所にこもっている。
一度、夕飯にトマスに呼ばれて台所まで出てきたが、食べた後、そそくさと戻っていった。
おそらく、例の祈祷台の陰で、瞑想にふけっているのだろう。
まだ、子供だというのに、何が楽しいのか・・・・・・・
一日中、日の当たらない暗い場所で、印を結んで座っているばかりで、ピクリとも動かない・・・・・・・
オイラは少々あきれながら、中庭にでて、夜空を見上げていた。
今日も星はきれいだ。
さっき、北の空を大きな流れ星が駆け抜けていった。
東の空に黒い小さな雲がいくつか見えるが、明日の天気に影響するようなものではないだろう。
と、不意に・・・・・・・
「ねぇ、アイツ、ガシューの家の裏口を抜けて、こちらに向かって来てるわよ」
シルフさんの声だ。
シルフさんのいうアイツとは、もちろん、レオンのこと。ジョゼフィーヌと組んで、なにかよからぬことをフィオーリアに企んでいるから、シルフさんに監視してもらっていたのだ。
「そう、分かった。こっちへまっすぐ来る？」
「ええ、暗闇づたいだけど、ほぼまっすぐね」
つまり、なるべく目立たぬように、それでいて、すばやくことを起こせるようにってことか。
「なにか、得物をもっていた？　例の大剣とか？」
「ええ、それに、いくつか小刀も」

ってことは、やっぱり、フィオーリアを暗殺するために？
でも、なんで、ジョゼフィーヌがフィオーリアを襲う必要があるのだろうか？
昼以来、なんども考えてみたのだけど、全然思い当たることがない。
一体、なんなのだろうか？
ともあれ、そうこうするうちに・・・・・・・
裏木戸が音もなく開いた。
いつもなら、ギーッと大きな音が鳴る木戸だというのに。
予め、油でも差しておいたのだろうか？
そういえば、授業の間中、レオンは中庭の井戸のそばにいたのだっけ。そのときに、ついでに。
開いた裏木戸を通って、覆面をした男が中庭に侵入してくる。
まるで影か何かのように神殿の壁に張り付き、中の様子を伺うが、やがて、足音を立てることもなく、バルコニーから廊下に入り、掃除道具入れの陰に隠れた。
それから、慎重にあたりの気配をうかがいながら、神殿の奥へと・・・・・・
って、フィオーリアは、反対の方角、礼拝所の中にいるのだけど、それには全然気がついていない。
なんだか、マヌケな暗殺者。
って、普通、こんな時間に少女が一人で礼拝所にこもっているなんて、だれも思わないか。
大抵は、こんな時間には自室にこもって、お人形遊びとか、もっと女の子らしい遊びをしているとか考えるものなんだろうな。
もちろん、この暗殺者もそう考えているようで、昼の間に確認しておいたフィオーリアの部屋の入り口までたどり着くと、静かにドアを開き、音もなく中へ飛び込んでいった。
一瞬、部屋の中で、金属質のものが、月明かりを反射したように見えたが・・・・・・

しばらくして、入ったときと同じように、暗殺者が出てきた。
不首尾だったようで、盛んに首をひねっている。
さらに、奥へ。
エリオットの部屋の中、トマスの部屋、トイレなどなど、順次、気配を消しながらさぐっていったが、やはり目的の人物は見つからなかったようだ。
しかし、それぞれの部屋には、エリオットやトマスだっていただろうに、特に騒ぎをおこすことなく出入りするなんて、このレオンって冒険者、案外凄腕なのかもしれない。
最後に台所を調べて、戸惑った様子で廊下に戻ってきた。
フィオーリアがいないのだ。
しばらく、物陰にこもって、何かを考えるようなそぶりだったが、もう一度、フィオーリアの部屋に戻って、調べなおした。
もちろん、フィオーリアは見つからなかった。
ようやく諦めたかして、首を振り、しぶしぶという形で中庭へでようとした暗殺者だったが、ふっとまだ調べていない扉があるのに気づいたようだ。
中庭へ向かう途中で、きびすを返し、ついに礼拝所の方へ歩を進め始めた。
「そろそろやばいのじゃない？」
「ああ、そうだな」
オイラは、慌てて呪文の詠唱に入った。
もっとも呪文が簡単で、詠唱時間が短くて済む攻撃魔法。
「・・・・・・ディガ、ムンディア！」
オイラの詠唱が完了した途端、目と鼻の先ぐらいの近さで、光の粒が現れた。
そして、その光の粒が急激に膨張し、巨大な火球へ！
そう、オイラはファイアーボールの呪文を唱えたのだ。
オイラが生み出したファイアーボールの中では、腹ペコそうなサラマンダーが舌なめずりしている。

明らかにオイラの全身を嘗め回すように眺めてやがる。
鳥肌が立った。寒気がした。
この魔法を使い続けると、いつかオイラ自身が犠牲になってしまうかも。
とにかく、オイラの生み出した火球、人の背丈ぐらいの大きさで、音もなく空間を飛びぬけて行き、背後から今まさに礼拝所の扉に手をかけた暗殺者へ向けて襲い掛かった。
コレがぶつかったら、体中が火に包まれ、大火傷負ってしまうだろう。暗殺者には、ふさわしいバツだ。
だが、火球がぶつかろうとした瞬間、攻撃に気づいた暗殺者、とっさに鞘から抜く手も見せず、ブンッと剣を一振り、水平に薙ぐ。
シュウゥゥゥ〜〜〜〜
一瞬にして、火球が消えた。
えっ！？　剣の一振りで、火球を切り捨て、消し去るとは・・・・・・
火球が消えた途端、レオンはタンッと地面を強く蹴り、火球の飛んできた方へ跳躍してくる。つまり、オイラの目の前へ。
うっ！　やられる！
いつでも振り下ろせるように剣を構え、自分にファイアーボールを打ってきた魔法使いを切り捨てるつもりで殺気を全身にまとってオイラの目の前に降り立った暗殺者。だが。
レオン、驚きで目を丸くしている。
「ん？　そんなばかな。逃げられるはずはなかったのに・・・・・・」
そう、自分に向かって攻撃してきた魔法使いがいるべき場所に、その姿はなかった。
「ど、どういうことだ・・・・・・」
呆然と立ちすくんでいる。
今のファイアーボールの消失、そして、レオンの反撃、ずい分大きな音がしていたはず。

たちまち、神殿の中から、口々に「どうしたの？」「なにがあった？」などと叫び交わしながら、エリオットとトマスが様子を見にやってくる気配が伝わってきた。

「チッ！　仕方ない」

レオンはマントを翻し、入ってきた裏木戸から走り去っていった。

た、たすかったぁ～～～

オイラは、その場に、ヘナヘナとくず折れるのだった。

神の娘、光の少女　１１

しかし、あのレオンって一体なにもの？
一薙ぎでファイアーボールを消し去るなんて、もっているあの大剣は魔剣だってことだ。
魔剣は、国のあちこちの古代遺跡から、探検家たちが持ち帰ってくることもあるが、その名のとおり、魔力が封じられた剣のこと。
普通の剣では、ファイアーボールを斬っても、まったく役に立たない。大体、火などという実体のないエネルギーの塊が相手なのだ。剣ごときで対抗できるはずなんてない。
でも、魔力の封じ込められた魔剣なら、さっきレオンがしたみたいに、魔法を無効化し、ファイアーボールなどの攻撃魔法に対抗することが出来る。
なら、だれもが魔剣を持ち歩き、攻撃魔法にそなえればいいのだが・・・・・・
実際に、魔剣を持ち歩く人間などいない。
ひとつは、魔剣とは滅多に手に入らない貴重な代物であるから。
古来から旧家に伝わる家宝であり、古代遺跡でときどき見つかることのある遺物である。非常に高価なものなのだ。
また、魔剣は、聖剣にも妖刀にも変わる恐ろしい剣でもある。
剣に魔力が込められているため、その所有者は、その魔力に対抗するだけの体力や剣技、そして、精神力が求められる。もし、これらのうちのどれかが欠けていれば、たちまち魔剣に精神を蝕まれ、体を乗っ取られ、狂戦士・バーサーカーと化して、無差別に人を襲うようになってしまう。
一方、魔剣をキチンと操ることが出来るのなら、その魔力の持つ効果によって、本来よりも、高い体力であったり、力量を発揮することができ、戦闘シーンで大活躍することも可能になるのだ。
東方の国では、聞くところによると、奴隷たちに魔剣を与え、わ

ざと精神を乗っ取らせて、バーサーカー化させ、戦場に投入する狂戦士部隊などというものがあるらしいが、この国では、幼少の頃より、鍛錬を積み、精神修養を重ねた聖騎士たちのみが、魔剣を所持することがゆるされている。

であるのに、冒険者風情に過ぎないレオンが、なぜ魔剣を所持しているのだろうか？

ああ見えて、実は、魔剣に心を乗っ取られたバーサーカーなのだろうか？

でも、そうは見えないが？

それとも、もとはキチンと聖騎士並の修行を積んだ人物で、何かの事情で身を持ち崩し、冒険者になっているとでもいうのだろうか？

レオン、一体、何者なんだ？

その晩、遅くに、シルフさんが戻ってきた。

なんでも、レオンは、今晩あったことをありのままに、ジョゼフィーヌに報告したのだが、ジョゼフィーヌはそれを信じなかったようだ。

大体、姿の見えない魔法使いがフィオーリアを守っていて、自分の暗殺計画の妨害をしてきたなんて報告では、オイラだって、そうそう信じたりはしないだろう。

やはりジョゼフィーヌは、レオンがやりたくない仕事をしなかった言い訳として、適当なことを言っているだけだととったようだ。

もちろん、レオンのいる場では、そんなことをおくびにも出したりはしなかったけど、自室で一人きりになったとき、声を殺して、不満をウサギのぬいぐるみのひとつにぶつけていたという。小刀を引き抜いて、切り裂き、ズタボロにするという方法で。

一方、レオンの方も、ジョゼフィーヌが自分の言葉を信用していないということに勘付いていたみたいだが、なにも口にせず、だまっていた。

レオンの襲撃は、翌日の晩も行われ、ほとんど同じような経緯を

辿った末、撃退することに成功した。
もう、レオンはジョゼフィーヌにありのままを報告するなんてこともせず、襲撃が失敗したとだけしかいわなかった。
もちろん、その晩も新たなウサギのぬいぐるみが被害を受ける羽目になったのだが。

新月の夜　1

また、フィオーレ神殿の学校の日がやってきた。
今日は珍しくレオナルドがお休みで、いつもの一悶着もなく、フィオーリアが礼拝所の暗い隅をすんなりと確保することができた。
一方、反対側、光が燦々とあたる窓際では、日光を盛大に反射する金髪を揺らしながら、ジョゼフィーヌがジェシカたち女の子グループとにぎやかにおしゃべりしあっている。
部屋中の子供たちの視線は、どうしてもそちらの方へ集まり、そのことも意識しているせいか、声や振る舞いにさらなる華やかさが増しているような。
一方、中庭では、レオンが井戸を背に座り込み、大剣を抱え込むようにして、油断なくあたりの気配をうかがっていた。
「一体、このレオンとか、ジョゼフィーヌとか、何者なんだろう？」
「そうね、何者なのかしらね？　ちょっと不気味だわね」
「ああ、レオンは、絶対ただの冒険者なんかであるはずないし、ジョゼフィーヌもヘンだ」
「うん、そうね」
「大体、なんで、フィオーリアを襲撃する必要があるのか？　ただのフィオーレ神殿の拾い児・養女にすぎないのに・・・・・・」
「ホント、ヘンよねぇ～？」
「ああ」
この3日、オイラとシルフさんとの間で何度も交わされた会話が、またオイラたちの間で交わされる。
と、不意に、窓からジョゼフィーヌが上半身を突き出した。
レオンの方に軽く手を振る。
レオンも手を上げて、それに応えた。
「ホント、こうして、近くで見ると、すごくかわいい女の子なんだけど・・・・・・」

シルフさんが感嘆のこもった声をつぶやいた途端、ジョゼフィーヌ、シルフさんのいるあたりを見た。
目がまん丸に見開かれている。
「え？　だれ？　だれかそこにいるの？」
「・・・・・・・！？」
「・・・・・・・！！」
シルフさんの驚いている気配がする。
「えっ？　ジョゼフィーヌちゃん、どうしたの？　なにかあったの？」
部屋の中から、他の女の子の声が聞こえてきたけど、振り返って、胸の前で小さく手を振って、
「あ、ううん、なんでもないの。なんでもないの」
また、シルフさんのいるはずの方向をむいて、ふっとオイラに気づいた。
「あ、ちょっと用事してるね？」
「え？　用事？」
さっきの女の子の声だ。
「トマスお兄ちゃんが、箒、片付け忘れてるみたいだから、私、代わりに片付けてくるね」
なんて言いながら、一旦、窓から姿を消す。
「はーい。ふふふ、ホント、トマスお兄ちゃんって仕方がない人ね。また箒を片付け忘れるなんて」
などと、女の子たちがおしゃべりし合っているのが、窓から聞こえてきているのだけど。
これって、もしかして・・・・・・・？
い、いやな予感が・・・・・・・
しばらくして、礼拝所の横手から、ジョゼフィーヌが現れてきた。
オイラを見つけ、引っつかむと、小声で辺りに話し始める。
「だれ？　さっきここで話をしていたのは、だれ？　妖精さん？

それとも、精霊さん？」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
たぶん、ジョゼフィーヌはシルフさんの声が聞こえていたのだろう。さっきの様子からすると。
「そうね、私の方だったかもね」
「え？　だれ？　私の方ってなに？」
少なくとも、シルフさんのように、オイラの思考を読み取るってことは出来ないようだ。
「ん？　あら、こんにちは。ジョゼフィーヌ」
「こんにちは、君は、ボクの名前を知っているんだね？」
・・・・・・ボ、ボク？
「ええ、一昨日もここにいたもの」
「そうなんだ。君はだれ？」
「私？　私はシルフ」
「シルフ？　じゃ、風の精霊さんだ」
「ええ、そう」
「あれ？　でも、風の精霊のシルフって、下位精霊だから、こんな風にお話なんてできないはずなのに？」
「ん？　そう？　でも、私はできるのよ。特別だから」
「へぇ～　そうなんだ。すごいね」
と、不意に、窓から女の子の一人が身を乗り出してきた。
「ねぇ？　ジョゼフィーヌ、さっきから、だれとお話をしてるの？」
「え？　あ、ちょっと独り言。気にしないで」
「フーン」
納得できないって顔で引っ込んでいったけど、中で女の子同士「ヘンなの」って言い合っているのが、丸聞こえ・・・・・・
ジョゼフィーヌも気まずい思いをしているみたいで、
「シルフさん、ちょっと向こうへ行こう？」
中庭の方へ誘っていった。

「ええ、そうね」
って、誘うのはいいのだけど、だからって、オイラを引っつかんで振り回すのはやめてくれないか？
いくら、女の子たちにヘンな目で見られたのが不愉快だからって、オイラを振り回して、中庭の植物の葉っぱに八つ当たりしなくても・・・・・・
め、目がまわる〜〜〜！！！

新月の夜　2

オイラたちは、中庭を横切り、礼拝所の窓から死角になる場所で、話を始めた。
すくなくとも、レオンの視界の中ではあるのだから、こんなところで、シルフさんと話したりすれば、レオンに不審がられたりするだろうに？
女の子たちからヘンに思われるよりも、レオンに不審がられるのなら、構わないってことなのだろうか？
「ねぇ？　なんで、シルフさん、ボクとお話できるの？」
「ふふふ、さあ、何ででしょう？」
ジョゼフィーヌの髪がさらさらと揺れた。
「ボク、初めてだよ。お話のできる精霊さんに出会うなんて。前にお父様が、ジンだとかの上位精霊と話したことがあるなんて、自慢げに言っていたことがあるけど・・・・・・」
「あら、ってことは、私、上位精霊並ってことね」
「そうだねぇ～　ねぇ？　どうしてしゃべれるようになったの？」
「ふふふ、どうしてでしょうね？」
なんか、シルフさん、わざと話をはぐらかしてない？
シルフさんが話をはぐらかすたびに、オイラをつかんでいるジョゼフィーヌの手、力が入って、すごく痛い・・・・・・
「ねぇ？　シルフさんって、魔法が使える？　精霊魔法とか？」
「ふふふ、さあ、どうかしら？」
って、あの、ジョ、ジョゼフィーヌさん？　オイラを締め付ける力がさらに加わって、非常に痛いのですけど・・・・・・
「お父様がジンとお話したとき、契約して、風の精霊魔法を使えるようになったらしいから、シルフさん、ボクとも契約して、精霊魔法を教えてほしいなって思ったりもするのだけど・・・・・・」
媚びるようにシルフさんのいると思われる空間を見上げたりして。

「・・・・・・・」
シルフさん、返事なし。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・シルフさん？」
「・・・・・・・」
オイラ、雑巾になった気分、締め付けられて、両手でねじられて・・・・・・・
「ごめんなさい。そういうの、私分からないから。また今度にしてくれるかしら。うふふ」
――チッ！
って、今、ジョゼフィーヌ舌打ちしなかったか？
「そう、分かった」
ジョゼフィーヌ、中庭側から、バルコニーを通って、乱暴にオイラを掃除道具入れに放り込んで、礼拝所の扉の方へ去っていった。
ふぅ～　助かった・・・・・・　ようやく、あのキリキリと締め付ける力から解放された。
まだ子供だというのに、すごい力だ。そういえば、こないだは一撃でレオナルドを倒したっけ。
一体、ジョゼフィーヌって・・・・・・・
それはそうと、ここって、このカビ臭い場所って・・・・・・・！？
く、屈辱だぁ～！！！
オイラの頭の中で誰かがケタケタ笑っている声が聞こえていた。

オイラは、誰にも見られないように警戒しながら、掃除道具入れを抜け出した。
このまま中庭へでたら、レオンに見つかってしまうだろう。
ここは、やっぱり、礼拝所の扉の陰から、中の様子を覗いている方がよいかも。
幸い、両手に大量の荷物を抱えていたトマスがキチンと閉めてい

かなかったので、半分開いている。
今日も地理の授業をエリオットは行っていた。
今日は山々の話。
大地の神の娘たちが封じられた１３の山々を順に紹介している。
大地の神は、５人の息子たちと娘を河に封じ、１３人の娘たちを山に封じたのか・・・・・・・
すごい子沢山だね。
「全部同じ母親の子供なのかしら？　大地の神様の奥さんって大変よねぇ～」
ああ、まったくだ。

礼拝所の暗い隅で、今日もフィオーリアが一人ぽつねんと座っている。
エリオットの説明を聞いているのか、いないのか。眠そうな目をして、頬杖を突いている。
で、その隣には・・・・・・ジョゼフィーヌ！？
なぜジョゼフィーヌが？
実際に襲撃を企てるほど、憎んでいたのじゃないのか？
なぜ、よりにもよって、フィオーリアの隣に座っているのだ！
さっきは窓際に席をとっていたはずなのに、わざわざなんでこんな暗い場所へ？
オイラが疑問に感じて眺めていると、ジョゼフィーヌが、なにか暗い炎が燃えているような瞳をして、フィオーリアの方を見た。
すると、ジョゼフィーヌがもごもご口の中でなにかを唱え始めた。
それを耳にした途端、フィオーリアがハッと顔を上げ、隣のジョゼフィーヌを見る。射抜くような鋭い視線で。
でも、すぐに興味をなくしたのか、さっきと同じ姿勢で、つまらなさそうに頬杖を突く。
一体、二人に何が？
また、ジョゼフィーヌが口の中でもごもごいい始め、フィオーリ

アが反応するのだけど、すぐにまた、元の姿勢に戻るなんてことが、さらに3度続いた。
やがて、
「ちょっとアンタ、どういうつもり？　その中途半端な呪文を唱えるのやめなさい。うるさくて、気が散るわ！」
仏頂面で、フィオーリアが抗議の声を上げた。
「えぇ！？　なに？　私、どうかした？」
ジョゼフィーヌは、怯えたかのような表情を浮かべて、あごの下に両こぶしを当てる。
でも、その目は明らかに、挑戦的な光を宿しているのだけど・・・・・・
「いい、アンタ、ファイアーボールの呪文のつもりかなにかしらないけど、『ポリョニゲルンム』の『ニ』の発音は、限りなく『イ』に近い発音をしなくちゃいけないし、最後の『ムンディア』は『ヌンディバ』に近い発音じゃなきゃ、火球発生しないのよ！」
「・・・・・・」
「アンタの発音じゃ、一生かかっても、ファイアーボールなんて、打つことは無理ね！」
そこまで言って、礼拝所中がシーンと静まり返っていることに気がついたみたい。
「フィオーリア、なに？」
エリオットが、眉根をもみながら、フィオーリアを見ている。どうみても、フィオーリアは痛い子だった。
「ああ、また、東の山の魔女さん、暴走しちゃってるよ・・・・・・」
誰かが、そうつぶやいて、子供たちがドッと笑い声を上げた。
「フンッ！　いつか、アンタなんか、スズメにでも変えてやるんだから！」

新月の夜　3

授業が終わった。
フィオーリアはいつものように、とっとと自分の部屋へ戻り、子供たちは、それぞれ家路につく。
礼拝所に最後まで残っていたのは、今日もジョゼフィーヌだった。
なんだか、深刻なそうな表情を浮かべ、考え事をしている。
近寄りがたいオーラを全身にまとっている。おかげで、今日は他の子供たちも一緒に帰ろうなんて、誘ったりしてこなかった。
不意に、足音もなく、レオンが扉から礼拝所へ入っていく。
「そろそろお帰りになられませんか？」
「ああ、レオン。うん、そうする。けど・・・・・・」
椅子から立ち上がろうとすら、なかなかしない。
「あのチビ、もしかしたら、本当に魔法使いかもしれないな」
「と、いいますと？」
授業中のフィオーリアとのやり取りについて、レオンに詳しく話して聞かせた。
「あいつ、確かにファイアーボールの呪文を知ってた。それも、ボクより詳しく」
「とすると、一昨日や昨日、私にファイアーボールを投げつけてきたのは、あの子だと、おっしゃりたいのですね」
「うん、そうかもね」
「なるほど、それなら、一昨日や昨日の攻撃のナゾ、一応は説明がつきますね」
「知ってるか？　アイツ、自分のことを東の山の魔女だと言ってるんだと」
「東の山の魔女？」
「ああ、今朝ジェシカが、そう教えてくれた」
「なるほど、ですが、山の魔女が、あんな子供で、しかも、こんな

街中で神殿学校の授業を受けているのですか？」
「ああ、そこが引っかかるところなんだけど」
ジョゼフィーヌとレオン、盛んに首をひねっている。
「とにかく、このこと、お父様に知らせておいた方がよくない？」
「と申しますと？」
「だって、こんな街中を我が物顔で魔女がウロウロしているんだよ。絶対、よくないよ」
「う、う～む・・・・・・」
「アイツ、何を考えているか分からないし、そのうち、町の人たちを乗っ取って、この町や国を支配しようなんて考えているのかも。そうならないうちに、退治しておかなくちゃ！」
「い、いや、しかし・・・・・・・　まだ、魔女だと決まったわけでも・・・・・・・」
「なに言ってるの？　お前だって、問答無用で攻撃されたのでしょ？」
「そ、それはそうですが、私の場合、私の方にも非がないとは・・・・・・」
少し恨みがましい目でジョゼフィーヌを見つめる。
ジョゼフィーヌ、ちょっと咳払いして、
「と、とにかく、魔女なんて、この世にいちゃいけないんだ。だから、退治しなきゃ！　お父様に頼んで、魔女退治のエキスパートを派遣してもらわなければ！　ね？」
「う、う～む・・・・・・・」
「だから、お前、お父様に連絡をとってよ」
「し、しかし、あなたのお父様からは、あちらから連絡をとるまでは、こちらから接触しようとするなと、ご厳命をいただいておりますのですが・・・・・・」
「そ、そうだけど、でも、現に今、悪い魔女がこの町にいるんだよ。退治しなくちゃ！　ね？」
無邪気な天使の笑顔での説得工作。

って、悪い魔女って、なんか釈然としない。フィオーリアは、確かに性悪で無慈悲でいけ好かないクソガキだけど、自分からなにか悪事を企てたり、他人を操ったりしたことなんて一度もない。
いつも、フィオーリアにちょっかいをかけてくる子供たちを手ひどく痛めつけることはあっても、なにも手出しをしてこない相手を、痛い目にあわせたりなんかは絶対にしない。
むしろ、どういう理由があるのかしらないが、問答無用で暗殺しようと毎日襲撃してくる方が、はるかに悪質だと思うのだけど、オイラ的には？
ともあれ、ジョゼフィーヌの説得、効果があったみたいで、最後にはレオンも不承不承うなずいた。
「分かりました。私が直接、お父様に連絡をとるってわけにはいきませんが、ガシュー殿と相談の上で、なにか連絡をとる方法がないか、考えてみます」
「そ、分かった。よろしくね」
「はい・・・・・・」

ところで、そういえば、なんでジョゼフィーヌとその父親、直接連絡をとりあっちゃいけないのだろう？
まるで、ジョゼフィーヌの身柄を何者からか隠して保護しているかのような扱い。
ジョゼフィーヌには、敵でもいるのかな？　もしかすると、その父親の周囲の人物で、ごく近しい間柄だとか？
そもそも、ジョゼフィーヌって、何者？　本人はニハデの街から来たといっているが？
一昨日、エリオットにニハデの神父さんからの手紙を渡していたのだから、それは間違いなさそうだけど・・・・・・
とすると、ニハデの商人の娘なんだろうか？　それも、大商人の？
でないと、魔剣を所持しているような高い能力をもった冒険者・レオンを雇えるはずはないし。

ってことは、大商人の財産相続をめぐる争いか？
でも、そういえば、シルフさんとも話ができたし。ってことは、精霊使いの素質をもっているってこと。
ジョゼフィーヌの父親はジンと契約したとかも言っていたな。
上位精霊のジンと契約できるぐらいだから、ジョゼフィーヌの父親は高い精霊使いの素養をもっているはず。この国で有力な精霊使いといえば・・・・・・
昔、建国の大王が４大精霊の力を借りて、この国を興した話が有名だから、王家に近しい人物ってことになるのだろうが。でも、そもそもニハデの街に住む王族なんて聞いたことがないような。
いや、そもそもニハデの街自体、自由商人の町で、どこの国であれ、王家や貴族たちの力は及ばないはずなんだけど・・・・・・
なんだか、ナゾが深まるばかりだ。

新月の夜　4

それから一週間が過ぎた。
今日は新月の晩。月は昇らない。
襲撃をするのであれば、月明かりがなく、真っ暗な新月の晩こそ、もっともふさわしいだろう。
オイラとシルフさんは、今日も油断なく中庭で待機していた。
でも、あれ以来、レオンの襲撃ピタリと止んでいる。
ジョゼフィーヌの父親から連絡があるまで、フィオーリアを襲うのは、中止することにしたのだろうか。
とはいえ、油断は大敵だから、襲撃に備えておかないと。
あれから、もちろん、二日に一度の神殿学校でも、フィオーリアとジョゼフィーヌ、お互い口をきくことはなかった。フィオーリアは、ジョゼフィーヌを完全に無視しまくっているし、ジョゼフィーヌは、ジョゼフィーヌで、フィオーリアを危険な悪い魔女として、それとなく敬遠しているようだった。
さらに、ジョゼフィーヌがシルフさんに再び契約を迫ることもなかった。
もう、シルフさんと、精霊魔法の契約を結ぶことをあきらめたのかな？
なんか、違うような気もするのだけど・・・・・・
とりあえず、この神殿では、平和に時間が流れていた。
でも、あのジョゼフィーヌのこと、なにか裏で企んでいそうな気がする。
オイラたち、油断なく監視は続けていかなくちゃ！

「しかし、ジョゼフィーヌの父親って、何者なんだろう？」
「さあ？　だれなんだろうね？」
オイラとシルフさんは、あれこれ想像して頭を悩ます。

「上級精霊のジンと契約するなんて、よっぽどのことだわ。普通の人間がジンに出会うなんて、十年に一度あるかどうかだし、まして、契約をするなんて・・・・・・」
「百年に一人いるかどうかってぐらいの精霊使いってこと？」
「うん、もしかしたら、千年に一人とか、それぐらい珍しいことだわ」
「へぇ～」
「大体、精霊に人間が出会ったとしても、それに気づけるのは、精霊使いの素質を持ったものだけだし、そんな人間なんて、滅多にいないもの」
「ああ、そうみたいだね」
「この国でジンと契約できるような精霊使いの素質をもった者といったら・・・・・・・」
「・・・・・・・？」
「う～ん・・・・・・・？」
「・・・・・・・？」
「・・・・・・・」
「もしかして、いないの？」
「うん、というか、よく知らないわ」
「・・・・・・・」
「だって、そんなに人間たちの世界をあちこち行って、話しかけたりとかしたことないもの」
た、たしかに・・・・・・
ここ数年、大抵、オイラのそばにいて、オイラと一緒に、フィオーリアの成長を見守り続けてきたわけだし・・・・・・
というか、オイラのそばにばかりいて、シルフさん、大丈夫なんだろうか？
なんだかんだいっても、風の精霊なのだから、なにか自然界の役割みたいなもの、持っているのじゃないだろうか？
たとえば、春には暖かいそよ風を南から送ったり、冬には、冷た

い木枯らしとなって吹き荒れたり。
もしかして、これまで、そういう役割を放り出して、オイラたちのそばにいてくれていたのだろうか？
そうだったら、すごく申し訳ないような・・・・・・
「あら、私たち精霊は、みんな自由気ままにすごしているばかりで、そんなご大層な役割なんて、だれも持っていやしないのよ」
そ、そうなのか・・・・・・
「そういうのは、私たち風の精霊の仕業というより、季節の神様たちの仕事ね。季節の神様が神通力でそれぞれの役割をこなしているだけなのよ。私たちにはあんまり関係ないわ」
だそうな。
ん？　待てよ。大体、自由気まま過ごすだけの風の精霊のはずなのに、なんで、好き好んで、オイラのそばにいるのだろう？
オイラ自身、一緒にいて楽しい愉快な生活を送っているなんて、思えないのだけど？
むしろ、クソガキの面倒をみたり、畑仕事に精をだしたり、主のいないご主人の小屋を守ったり、すごく地味でつまらないことばかりなハズ。
う～ん・・・・・・・　これは、一体？
オイラ、考えた。一生懸命考えた。
そして・・・・・・・
ハッ！？　も、もしかして！！
その途端、頭の中に、シルフさんの氷のように冷たい声が聞こえてきた。
「アンタ、バカ？　そんなわけないじゃない！」
「え？　まだ、オイラ、なんにも結論を出していないのだけど・・・・・・」
「考えなくても、分かるわよ、それぐらい」
「て、ことは、やっぱり、シルフさんは、オイラのことを・・・・・・」

オイラ、体中が熱を帯びてきたように感じていた。
「バ、バカね！　どうして、私がアンタなんかを！」
なんだか、すこし早口で急いでいるような口ぶり。さっきのひややかな口調よりも、あきらかに温度が違う気が・・・・・・
「大体、私が好きでどこにいようが、アンタの知ったことじゃないわ！」
「ムゥ～～～」
確かに、それを言われちゃ、言い返せない。その通りなだけに。
ん？　待てよ。
――私が好きでどこにいようが？
「って、ことは好きでオイラのそばにいるんだ・・・・・・」
「バ、バカじゃないの！」
声に焦りが。フフフ
「じ、じゃ、どうして、いつもオイラのそばにいるの？」
「そ、それは・・・・・・」
「ねっ、どうして？」
「・・・・・・」
「・・・・・・？」
オイラは、期待を胸に、シルフさんがなにか素敵なことを言ってくれるのを待っていた。
でも、
「バ、バカッ！！」
不意に、オイラの毛をそよがせて、突風が吹き抜けていった。
「シ、シルフさん？」
オイラの呼びかけに、いつまで経っても、だれも応えてはくれなかった。

新月の夜　5

「ラララ～♪」
神殿の奥から、間の抜けた鼻歌が聞こえてきている。
エリオットだ。
ときどき、機嫌がいいと、こうして鼻歌を歌うのだが、あまり上手とはいえない。いや、はっきり言って、音痴だ。
調子っぱずれで、音程もめちゃくちゃ。トマスといい、フィオーリアといい、いまだかつて、エリオットがなんの曲を歌っているのか、正確に当てたものなどひとりもいなかった。
今日も、ナゾの歌をハミングしている。
それとも、誰かを呪っているのか？
中庭に面した窓からは、カーテン越しに、エリオットが部屋の中で踊っているシルエットが見えている。
相当、上機嫌なようだ。
そういえば、今日は新月。
例の黒マントの男が忍び込んでくる日だ。
うむ・・・・・・・
気をつけないと、黒マントの男とレオンが鉢合わせになったり、あるいは、オイラが間違えて攻撃してしまうなんてこともないとは・・・・・・
いつもなら、シルフさんが周囲を警戒して、レオンの足取りなんかを報告してくれるのだが、今日はどうなんだろうか？
シルフさん、戻ってきてくれるのだろうか？
ちょっと心配になってきた。

タッタッタッ――――
しばらくして、裏通りを駆けてくる足音が聞こえてきた。
オイラは一瞬レオンかと疑ったが、でも、よく考えると、レオン

がこんな風に足音も高く駆けてくることなんてない。
暗殺行為をしようというのに、わざわざ自分の存在を相手に勘付かれかねない、間抜けなマネをする刺客なんていないだろう。
さっきの足音、裏木戸のところで、ピタリと止まった。
やがて・・・・・・
ギィィィ〜〜〜〜
中庭の奥、裏木戸が開いた。
裏木戸を通って、男が一人走りこんでくる。
レオンではないだろうとは思うのだが、一応念のため、気構えはしておく。
不意打ちにあったりしたくないもんね。
オイラは身構え、建物の陰から、その男の様子をうかがった。
中庭に入り込んできたその男、いつものレオンとは違って、大剣を持ち歩いてはいない様子。
エリオットの部屋から漏れる明かりに照らされた姿を見た限り、２０代前半の若い男。動きやすそうな軽装に、腰に護身用の小さな剣を帯びているだけ。まったく殺気のようなものは感じられない。
髪型も、レオンのようなボサボサの長髪ではなく、さっぱりと短く刈り上げている。
見慣れない若者。
一体、コイツは？
その男、中庭に走りこんでくると、しばらくは腰をかがめるようにして、両膝に両手をつけて、荒い息を吐き出していた。
よっぽど長い距離を走り通しだったのだろう。
やがて、かたわらに井戸があるのを見つけると、さっそく水をくみ上げ、あごから水をしたたらせながら、ゴクゴクと飲み干した。
ふっと見ると、エリオットの部屋の窓のカーテンに、中庭を覗き込むかのような体をかがめているシルエットが浮かんでいた。
さすがに、井戸水を汲む、バシャバシャという音で、誰かが中庭にいることに気がついたようだ。音痴な歌もすでにやんでいる。

「だれ？　だれかいるの？」
エリオットの不審そうな声が聞こえてきた。
その男、一瞬ビクッと体を震わせたが、すぐに声のした方向を向き、片膝をついた。
「あ、あなたは、エリオット様ですか？」
「ええ、そうよ」
「わが主より、コレを預かってまいりました」
そういって、懐の中をゴソゴソと探す。
やがて、手紙を取り出した。
「手紙？」
「はい、主より、あなた様宛てでございます」
「そう、分かったわ。どなたからかしら？　あちらのバルコニーからお入りになって、この部屋までお越しください」
「はい。分かりました」
男は立ち上がって、中庭の奥のバルコニーへ向かった。

新月の夜　6

「えぇぇぇ！？」
エリオットの絶叫が。
「今晩、ジャン・ルイは来ないの！！」
手紙を読み終えたエリオットが、絶望の声を上げた。
「どうして？　なぜなの？　アンタ、ジャンから何か聞いてないの？」
コレは、部屋のソファーに腰掛けているはずの、さっきの青年への問いかけ。
「はっ、特になにも・・・・・・」
「一体、どういうこと？　毎月、新月になったら、必ず私の元へ来てくれていたのに・・・・・・」
「は、はぁ～」
ってことは、ジャン・ルイっていうのが、いつもの黒マントの男の名前ってことか。で、今日現れたこの青年は、そのジャン・ルイの従者かなにかって所かな？
いずれにせよ、ジョゼフィーヌやレオンの関係者というわけでもなさそうだ。
ちょっぴり一安心。
安心した途端、これからこの二人の間で何がおこるのか、むくむくと興味がわいてくるもので。
「ま、まさか、ジャンに他の女が・・・・・・！？」
「い、いえ、決してそのような・・・・・・」
今頃、部屋の中では、嫉妬に狂って、顔から血の気が引いたエリオットが、手紙をねじって、唇をかんでいるのかも。
オイラは、中庭にいて、部屋の中の様子が見えないが、あれこれ想像をめぐらして、中の気配を探っていた。
もちろん、目だけは油断なく、路地裏の暗闇を見張ってはいたけ

ど・・・・・・

「わが主は、ただいま王都にご滞在でございます」
「王都？　王様に呼ばれているの？」
「はい、そのようでございます」
「そうなの・・・・・・」
「はい」
しばらくの間、部屋の中が沈黙していた。
「そう、それなら仕方がないわね。王様のお呼びじゃ」
「はい」
「でも、ジャン・ルイに王様がなんの御用なのかしら？」
「さ、さぁ？　私には、分かりかねます」
「そうよね。さ、お茶でも飲んでちょうだい。冷めないうちに」
「ありがとうございます。いただきます」
青年がズズとお茶をすする音が聞こえてきた。
「今晩は、王弟殿下主催の晩餐会もございまして、そちらへ向かわれる前に、私に手紙をお預けになられたのです」
「ん？　そうなの・・・・・・」
なぜかより一層沈んだ様子。
「王弟殿下といえば、キャスリーン様、お元気？」
「はい？　奥方様ですか？」
「ええ」
「はい、お元気で、いつもうるわしくおわせられます。先日も奥方様のお父上様であらせられます王弟殿下がガスペールのお屋敷の方においでになられまして、お泊りになっていかれました」
「そうなの・・・・・・」
ガスペール？　どこかで聞いた名前だ。
え～っと・・・・・・
でも、そのときは、オイラ思い出せなかった。
「じゃ、それじゃ、セバスチャンは？」

「せ、セバスチャン？　ああ、若様のことですか？　さあ、若様は、先日、王都の寄宿学校へご入学遊ばれて以来、旦那様も、私たちもお会いしておりませんので・・・・・・」
「そうなの・・・・・・」
ため息をひとつ。
「あの？　ひとつお尋ねしてよろしいでしょうか？」
おずおずと青年が質問をする。
「あなた様は、旦那様と、その、どのような？」
「どのようなって・・・・・・」
そんなことを改めて尋ねるまでもなく、わかるでしょ？　普通、若者よ！
すこし間があって、
「あ、いえ、失礼いたしました・・・・・・」
この青年、すこし察しが悪いようだ。
「あの、その、あなた様は、若様のことをご存知なのですか？」
「え？　どうして？」
「あの、その、先ほど、呼び捨てになさいましたので・・・・・・？」
すこし考えるかのような間があって、
「ああ、そうか、ええ、そうよ」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
何かを待っているかのような間、そして、何も答えたくないという頑な沈黙。
ハァ〜
今、ここにシルフさんがいてくれたらな。
エリオットと青年の会話に、適切な解説をしてくれただろうに・・・・・
もしかしたら、今までの一連の会話の中から、なにか思わぬ事実を取り出して、オイラに教えてくれたかもしれない。

はやく、シルフさん、戻ってこないかな〜

新月の夜　7

ふっと、バルコニーにつながる廊下の方を見ると、誰かが暗がりに潜んでいるのが見えた。
白いトーガのようなものを着たモジャモジャ頭の男・・・・・・・
影の形だけで誰だか分かる。
トマス。
トマスは、暗がりに潜んで、オイラと同じように、エリオットの部屋の中の気配を探っていた。
と、その背後に、小さな影が、足音もなく忍び寄り・・・・・・・
ニャゴォ～～～！！
大騒ぎを始めた。
ペーターだ！
ペーターがトマスにシッポを踏まれて、抗議の悲鳴を上げたのだ。
「イタッ！　ペーター引っ掻くな！」
ギャギャ！　グーッ！！
うなり声がトマスの声に重なる。
と、エリオットの部屋のドアが開き。
「ペーターどうしたの？　トマス、何があったの？」
たちまち、トマスは飛び上がった。
「は、はい！　あの、その・・・・・・・イタッ！」
トマスを引っ掻いたペーターは、一目散に開いたドアから、エリオットの部屋へ飛び込んでいった。
「なに、こんな時間に・・・・・・・」
「あの、その、僕が廊下を歩いていて、知らずにペーターのシッポを踏んじゃったみたいで・・・・・・・」
トマス君、うそつきは泥棒の始まりという言葉をしらないのかね？
でも、まあ、まさか、エリオットの部屋の気配をうかがっていて、ペーターを踏んづけたなんて、正直に言えるはずないか。

「そ、今度から、気をつけなさい」
「はい」
「じゃ、トマス、おやすみなさい」
「あ、はい、おやすみなさい・・・・・・」
そのまま、エリオットがドアを閉めようとした。
トマスは、一瞬、切なげな表情を浮かべた。ま、今日は新月で、エリオットのもとへ男が忍び込んでくる日。トマスが気をもむのも仕方がないこと。
トマスが、必死に表情を殺して、ドアを閉めようとしているエリオットに話しかける。
「あの？　お師匠様、お客様ですか？」
「え？　ああ、はい、そうよ」
「そ、そうですか・・・・・・」
もう少しで、『どちらさまですか？』って口に出しそうな様子だったけど、
「お茶菓子でもお持ちしましょうか？」
「え？　ああ、いいわ。すぐにお帰りになられるみたいだし」
「そ、そうなんですか・・・・・・」
「ええ、気を使ってくれて、ありがとうね、トマス」
「い、いいえ。では、おやすみなさい」
「おやすみ」
エリオットがドアを閉めた。
一瞬、物を考えるそぶりを示したけど、急にトマスの表情が明るくなった。
どうやら、今日はいつもの男ってわけではないらしいと気がついたようだ。
そうなると、現金なもので、ちょっとスキップしながら、自分の部屋の方へ戻っていった。
「それじゃ、ジャン・ルイによろしくお伝えください」

「はい。承りました」
エリオットは、手紙の返事を書いて、その青年に渡したようだ。
それから、二人して中庭へ出てきた。
その青年が帰っていくのを見送るためだろう。
エリオットが裏木戸を開けた。
「では、私は、これで」
「はい。今日は新月で夜道は暗いですから、これをお使いください」
そういって、持っていたランタンを差し出す。
「あ、いや、私は夜目が利くものですから」
「でも、街中ならともかく、暗い中、王都まで戻られるのでしょう？」
「はい」
「それほど明かりもないでしょうし、ぜひ」
「は、はぁ～」
って、よく考えてみれば、来るときも、この青年、明かりなしで来たのだから、そんな心配する必要はないのだけど・・・・・・
エリオットは、やわらかく微笑み、有無も言わせず、ランタンを押し付けた。
「で、では、お借りいたします」
「はい。では、お気をつけて」
「はい、ありがとうございます」
青年は、ぺこりと一礼すると、体を翻し、走り去っていくのだった。
一方、エリオットは、空になった右手を上げて、その背にちいさく手を振っていた。
やがて、ランタンの明かりが裏通りの角を曲がり、見えなくなると、フッと一息はきだした。
「ジャン・ルイ・・・・・・」
ポツリとつぶやく。そして、
「セバスチャン・・・・・・」

切なげな吐息がもれた。
かすかな星明りで、その頬を流れる水滴が光って見えた。

新月の夜　8

ずい分前に、エリオットは自室に戻った。
すぐに部屋の明かりが消えたし、もう就寝したのだろう。
エリオットの部屋からは、何の気配も感じられない。
一方、裏木戸に面した裏通りの方からも、特に殺気のようなものが伝わってくることもない。
レオンは、今日もこないのだろうか？
今日も、平和な夜がこのままふけるのだろうか？
それは、そうと、シルフさん、そろそろ戻ってこないかな？
オイラ、かなり退屈になってきたのだけど・・・・・・
星を見上げて、線で繋いで、星座を作り、その物語を考える。
あれとあの明るい星と、向こうの青い星、それに、手前の小さな星で・・・・・・
オイラと同じ箒の形。
今日から、この星座を箒座と呼ぼう！
そう、この箒座は、天の星々の支配者。星座の王！
すべての星は、この箒座の指図に従って、夜空を運行し、東の空から、西の空へと天を渡る。
南の空のクソ生意気なフィオーリア座も、東の空の性悪ジョゼフィーヌ座も、箒座のおかげで、夜空で輝くことが出来るのだ！
もし、箒座の怒りを買うことがあれば、星々はその身を恐怖で震わせ、光をまたたかせて、身を投げ出し、箒座の許しを請わねばならない。
なんと、すばらしい星空の世界！
ウハハハハ・・・・・・・
と、不意に、視界の端の方で、
オッ！？　流れ星！
長い尾を光らせ、地面へと落ちていく。

一瞬で消えた。
あんな瞬間で消えるのでは、三回も願い事を唱えるなんて、土台無理な話。
この世界で、流れ星が消える前に、願い事をキチンと三回唱えた人物など、歴史上、一人でもいるのだろうか？
大いに疑問だ！
というか、それぐらいの能力があるのであれば、なにかもっと自分を活かす道があって、そちらを追及する方が、本人のためだと思うのだけど・・・・・・
などと、とりとめもなく考えていた。

不意に、風が中庭に吹き込んできた。
シルフさんだ！
シルフさん、開口一番、困惑しているかのような声をだした。
「ねぇ？　なんか、ヘンなのよ！　さっきからヘンなヤツラが、この町へ向かってきているの！」
「あ、シルフさん、おかえり。ヘンなヤツラ？」
「うん、そう、一応、冒険者みたいな格好をしてはいるのだけど、妙にその人数が多いの」
「何人ぐらい？」
「１００人はいたわね。もしかしたら、もっとかも」
「１００人？　盗賊団かなにかかな？」
「ううん、そうじゃなさそう。盗賊たちみたいに、薄汚れた格好はしていなかったし。冒険者風といっても、キチンと身奇麗な感じ。それに、なんていうか、整然としているというか、その、う～ん・・・・・」
「統制がとれているの？」
「そう、それ！　各自が自分勝手に行動してなんかいないの！」
「う～む、軍隊みたいな感じ？」
「うん、そう！　でも、格好は冒険者風」

「な、なんだろうね？」
「なんでしょうね？」
オイラもシルフさんと一緒になって、困惑するばかり。
冒険者なんて、ダンジョンにもぐりこんだり、モンスターを退治したり、隊商や旅人を護衛したりするのが主な仕事。
一瞬の判断ミスが、生死に直結するような危ない仕事する連中。
そして、なによりも、冒険者というのは、任務の達成すらよりも、生きて帰るのが一大命題の存在なのだ。任務を達成するために、犠牲者を出すなんてことは絶対に許されない。
生還してこそ、冒険者としての名声や富を享受できるのだから、死んでしまってはもともこもない。
もちろん一方で、犠牲をいとわずに、任務の達成を目指す存在もこの世にはあって、それが軍隊ってもの。冒険者とはまったく違う考え方で行動する。
だから、冒険者がパーティを組んで行動するときには、どんなに多くても、１０人未満でしかない。
それより多いと、連携がうまくとれず、かえって、犠牲者が発生してしまうことになる。それでは冒険者失格！
なのに、冒険者が１００人？
自分たちの安全に敏感な冒険者たちにとって、ありえない！
一体なんなのだ？
なにものが、こちらへ向かってきているのだろうか？

新月の夜　9

「どっちの方向から、この町へ向かっているの？」
「えっと、北の街道沿いだから、王都からかしら？」
「王都？」
なんか、最近、王都がどうとか、よく聞くような・・・・・・・
軍隊みたいに統制が取れている冒険者の大集団？
そういえば、ジョゼフィーヌが一週間前に、魔女退治のエキスパートの派遣を父親に頼みたいって言っていたけど。でも、だからって、こんな大集団なわけがないだろうし・・・・・・
そもそも、王都のある北からより、ニハデのある西の方から来るほうが自然だ。
「その集団、この町が目的地みたいなの？」
「う～ん？　どうなんだろう？　わからないわ。だれも私語とかしてなかったから」
「沈黙の冒険者たちか・・・・・・」
ますますヘンだ。冒険者といえば、にぎやかで陽気なのがトレードマークみたいなものなのに。
コレがどこぞの軍隊とでもいうのであれば、不思議ではないのだが。
軍隊なら統制がとれた一糸乱れぬ動きをするし、１００人以上いたとしてもおかしくはない。それに行軍中に私語なんて、普通はしない。
「・・・・・・・！？」
「・・・・・・・！？」
「って、もしかして、本当に冒険者に化けているどこぞの軍隊なんじゃ？」
「か、かも！？」
「な、なんで、こんな時期に軍隊が！？」

「さ、さあ？　知らないわよ！　大体、アイツらが本当に軍隊かどうかも分からないのだから」
「そ、それはそうだけど・・・・・・」
この国には、軍隊がいくつかある。
もちろん、国直属の正規軍がもっとも人数が多く、精鋭ぞろいで、国内最強だといわれている。
その他に、王家直属の近衛隊、有力貴族や商人たちが所有する私兵などがある。
最近、特にこれといって反乱が起こったなんて噂を聞いたこともないし、軍事訓練が近くで催されるなんて話もない。
正規の国軍が動いているのなら、ある程度事前に沿道の町々へ連絡があって、宿舎や食料の拠出などの協力を求められるのが常だけど、そんな要請は最近この町で聞いたことはない。
ということは、正規軍ではなく、どこかの私兵か？
でも、有力貴族たちの私兵は反乱を起こさせないために、法律で、それぞれの領地以外への出動が禁止されている。もし無断で領地外で活動していることがバレると、即座に、いかなる理由があろうと反乱とみなされ、国軍を中心に、各有力貴族の私兵団も含めた討伐軍が編成されることになる。
ん？　待てよ！
もしかすると、この冒険者集団は、本当に、どこぞの有力貴族の私兵たちか？
身元がバレないように、冒険者を装っているとか？
それなら、つじつまが合いそうではある。
ずい分、リスクの大きい行動だけど、十分にありえるだろう。
なにはともあれ、この冒険者たちの目的地はどこか、そこで何をしようとしているのか、早急に探り出さないことには、オイラとしては、どうしようもない。
ここは、シルフさんに、もう一度探ってきてもらわなくちゃ！
「そ、そうね。わかったわ」

オイラの思考を読んでいて、シルフさん、そういうと、再び、どこかへ飛んでいった。

一体なんなんだろう？　この突然現れた冒険者たちって？

う～む・・・・・・

襲撃　1

オイラは、『シルフさん、早く戻ってこないかなぁ？』と中庭の暗がりにとどまって待っていた。
もちろん、この間も、レオンの襲撃が万一あっても対処できるように、油断なくあたりの気配をうかがうのは忘れない。
タタタ――――
トトトトト――――
しばらくして、裏通りをこちらの方へ近づいてくる足音が聞こえてきた。
今度は、さっきの若者とは違って、駆けてきたわけではないようだ。
足音からすると、二人分。小走りな感じ。
やがて、裏木戸のあたりで足音がやんだ。
そして、
ギィィィィ～～～～
この裏木戸が外から開かれるのは、今晩は二度目。
やっぱり、裏通りを進む足音が聞こえてきていたから、おそらくレオンの襲撃ではないだろう。
オイラは、どこか気の抜けた感じで、裏木戸を通りぬける人影をみていたのだが・・・・・・
開いた裏木戸から最初に中庭へ入ってきたのは、背の高い男。なにか板のような大きなモノを背負い、長髪を首の後ろで束ね、マントにくるまっている。
ムッ！　見覚えが！
オイラが、そう感じた途端、気がついた。
レオンだ！！
ついに、レオンが襲ってきた！
オイラは、慌てて呪文を唱え始めた。

今、このとき、レオンが一目散に礼拝所へ走りこんだなら、オイラが攻撃魔法を放つ前に、フィオーリアの命を絶つことができたに違いない。
オイラは焦っていた。
おかげで呪文の文句を途中で間違えた。
チッ！
もう一度、最初からやり直し！！
く、くそーー！！！
でも、焦っているオイラの目の前では、レオンは神殿の内部へ走りこもうとはせず、中庭にとどまって、裏木戸を押さえたまま立っている。
そんな開いたままになっている裏木戸を通って、小柄な人影が中庭に出現した。
えっ！？
もちろん、レオンと一緒にいる小柄な人物といえば・・・・・・
ジョゼフィーヌ！！！
とうとう、襲撃の失敗つづきに痺れを切らして、本人がやってきたのか？
ち、ちょうどいい！
もし、レオンがフィオーリアを手にかけるようなことがあったら、ジョゼフィーヌに復讐してやる！
オイラは咄嗟にそう決心した。

ジョゼフィーヌが中庭に入り込むと、レオンは裏木戸から頭だけ出して、左右を確認し、木戸を閉めた。
「どうやら、大丈夫なようです。つけている者はいなかったようです」
「そう」
ジョゼフィーヌは短く答えた。
「しかし、一体、ガシュー殿は、なぜこんな時間に我々をたたき起

こして、こちらへ来させたのでしょう？」
「さあ？　ボクにもわからないよ」
二人とも、困惑して、肩をすくめるばかり。
ってことは、神殿へこの二人を寄越したのは、エリオットの父親で、この二人の世話を焼いているガシューか。
「とにかく、エリオット様に案内を請いましょう」
「ああ、・・・・・・そうして」
レオンは、エリオットの部屋の窓の近くに移動した。そして、窓枠をコンコンと叩き始めた。
「もし、エリオット様？　もし、もし、エリオット様？」
もちろん、普通の人は既に寝入っているはずの時間帯、そんなことでエリオットが起きるはずなんてないだろうに？
オイラは、ちょっと皮肉な気分で、レオンの愚かな行動を眺めていたのだけど・・・・・・
二回目に、レオンが窓枠を叩こうとした瞬間、エリオットの部屋に明かりがともった。
えっ？　エリオット起きてたの！？
驚いたのは、オイラだけではなかった。
レオンもジョゼフィーヌも、みんなその場で石化したように固まっていた。
「だれ？　もしかして、ジャン・ルイ？　ジャン・ルイなの！？
やっぱり、来てくれたのね？」
カーテンが勢いよく開かれる。
そして、ランプの光が窓の下のレオンを照らす。
「おお、ジャン・・・・・・」
中庭にレオンが立っているのに気がつき、眼が点になったエリオットの顔が見え・・・・・・
次の瞬間、超音波の悲鳴が、平和な夜の静寂を引き裂いた。
神殿の周囲では、様々なガラス製品が粉々に砕け散ったという。

襲撃　2

オイラは開けっ放しになっている入り口からエリオットの部屋の様子を覗いていた。ちょうど扉の陰になっている場所だから、だれにもオイラの姿は見えないはず。

レオンは伸びていた。

エリオットの悲鳴の直撃を食らったのだ。当然だ。

ソファーに横たえられ、額に井戸水に浸した手ぬぐいがあてられている。

ジョゼフィーヌも部屋の隅に椅子を与えられ、座ってはいるが、なぜか顔色がすぐれないようだ。それに、常に眼が不自然に泳いでいる。

基本的には、部屋の奥、書き物机の椅子に座っているエリオットの姿を求めて、エリオットのいる方へ視線が向かうのだが、そのエリオットを視界におさめると、たちまちあらぬ方へ視線が飛んでいき、また再び、エリオットの姿を求めて・・・・・・

それをさっきから延々と繰り返している。

一体、なんなのだろうか？

「で、なんで、レオンたちが、ここにいるの？」

レオンは、手ぬぐいが落ちないように押さえながら、上半身を起こした。

「それなんだが、私も、よく分からない」

「ん？　どういうこと？」

レオンもエリオットも困惑気味。

「今晩、私たちが寝室で寝ていると、ガシュー殿が飛び込んでこられて、急いでフィオーレ神殿へ向かうようにと」

「ん？　お父様が？」

「ああ、なんだか、ひどく慌てた様子だった」

「お父様が・・・・・・？　一体、なんだろう？」

エリオット、首をひねるばかり。特に心当たりもなさげだ。
「後で、われわれを追いかけてこられるとおっしゃっておられたから、そのときにでも、事情が聞けるのでは」
「そうね。分かったわ」
ちょうど、そこへ、台所の方から、トマスが盆をもってやってきた。
「失礼します」
「あ、トマス。悪いわね、こんな時間に」
「と、とんでもない！　とんでもないです」
トマス、エリオットの部屋に入ると、中の三人に順にお茶を手渡していく。
「あ、ありがとう」
「ありがとう」
「・・・・・・」
そして、部屋の入り口へ戻っていった。
「では、失礼します」
ぺこりと一つ頭を下げ、また台所の方へ。
と思ったら、オイラと同じように、中から見えないよう陰にまぎれて、エリオットの部屋の様子を伺っているし。
う～ん・・・・・・・
やっぱり、トマスも、いま何か異変が起きようとしているのに、気がついて興味津々って様子。
ったく！　この司祭見習いは！

中の三人は、それぞれ思い思いにトマスがいれてくれたお茶をすすっていた。
無言で。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

だれも、なにもしゃべらない。ただ、だまって、お茶をすすっているだけだが、同時に外の気配をうかがっている様子だけは共通したもの。
しばらくして・・・・・・
タタタタ――――
小走りに走ってくる足音が聞こえてきた。
エリオットが立ち上がり、部屋の外へと歩いてきた。
暗がりに隠れていたトマス、慌てて、自分の部屋の方へと引き返す。
そんなトマスに気づくこともなく、エリオットは、廊下にで、バルコニーから中庭へ出て行った。
裏通りの足音は、裏木戸あたりで止み、
ギィィィ～～～～
今日は裏木戸大活躍だ！
裏木戸を開けて中庭へ入ってきたのは、小太りな人影。
「お父様？」
「ああ、エリオットか」
ガシューだった。
「レオンさんたち、無事到着しているか？」
「はい、さきほど。で、何がありましたの？」
「ああ、それは、レオンさんたちにも話さないと」
「みなさん、私の部屋です」
勝手知ったる娘の神殿。ガシューはエリオットを従えて、サッサとエリオットの部屋へと入っていった。
一体、こんな夜更けに、なんの騒ぎなのだろうか？
オイラとまた戻ってきたトマスは、すこしワクワクしながらも、聞き耳をたてるのだった。

襲撃　3

「レオンさん、アランをご存知でしたよね？」
「アラン？」
「ほら、先日、お手紙をお預かりして、王都のレオンさまのご実家へ届けに向かった」
「ああ、あの老人か」
「そのアランが、どうやら王都で豪遊しているようなのですよ」
「ご、豪遊？」
　ん？　何のことだ？
「女郎宿に入り浸って、何日も宿に戻ってこないのです」
　レオンも困惑気味。いや、レオンだけでなく、部屋にいる全員が、不審げな表情を浮かべていた。
「・・・・・・それが？」
「別に本人が何をしてようが、仕事さえキッチリこなしてくれるのであれば、私どもとしては構わないのですが・・・・・・」
　一体、ガシューはこんな夜更けの時間に、部下のグチを聞かせるために、みんなを神殿に集めたとでもいうのだろうか？
「ただ、今回は、帰還の期日になっても、アランが宿に戻ってこないし、アランを心配して、仲間が様子を見にいっても、あちらの宿の者たち、泊まっているはずのアランに会わせようともしないのですわ」
「・・・・・・？」
「つまり、アランが、レオン様のご実家にお手紙を届けてから、いまだに私どもの手の者、だれもアランの姿を確認していないってことです」
「と、いうことは・・・・・・」
「おそらく・・・・・・」
　途端に、やけに心配そうな表情をレオンとガシュー、同時に浮か

べた。
「お父様？　それはどういうことですの？」
「うむ・・・・・・」
「さっきから、話題に出てるアランって、アランおじちゃんのこと？」
「ああ、そうだ」
「えっ？　でも、アランおじちゃん、来週あたり、お孫さんが生まれるって、こないだうれしそうにお喋りしていたのに・・・・・・」
「ああ、だから、おかしいのだ。そんなヤツが帰還を忘れて、王都に留まろうとするはずなんてない」
「そ、そうね」
「まして、あの実直な性格のヤツが出先で女を買うなんて・・・・・・」

「で、これがアチラ側の仕業だとすると・・・・・・」
ガシュー、心配そうな視線をジョゼフィーヌとエリオット、レオンに、順に向けた。
「我々の居所が、またバレたかもしれないってことだな」
「ええ、おそらく」
たちまち、レオンも深刻そうな表情を浮かべる。
「もしかすると、なにか手を打ってくるかもしれません。ニハデのときのように、暗殺者を送り込んできたりとか。ともかく、南の林の中に、私どもの寮があります。レオン様、一旦、そちらへ避難していていただけますか？」
「うむ、分かった」
アチラ側？　この口ぶりからすると、ガシューもレオンも、対峙しているのは、なにものか、知っているかのようだ。
しかも、そいつらは強力な存在なのだろう・・・・・・
ガシューもレオンも戦うことを最初から放棄しているのだから。
「寮の場所は、エリオットが知っていますので。エリオット、分か

るな？」
「はい、お父様」
「私は、一旦、店に戻って、様子をみてみます」
「ああ、よろしく頼む」
「はい、なにごともなければいいのですが・・・・・」
と、不意に、部屋の入り口から風が入り込んでいった。
部屋の明かりのランプの炎を揺らし、カーテンを揺する。
「大変！　アイツら、ガシューの店を襲うつもりよ！」
オイラの頭の中に、シルフさんの声が響いた。

王都からの街道を進んできた男たち。町の近くまで来ると、街道を外れて、町の外の林の中に入り込んでいった。一旦、林の中で休憩。
その間に、青年が一人、街道を北上していったが、男たち襲ったりしなかった。
追いはぎや盗賊ではないようだ。
むしろ、休憩を取りながら、装備の整備に余念がない様子。
明らかに、この町を襲う準備だ！
やがて、リーダーらしき男が、今晩の襲撃目標を指示した。
「町の東にある大きな商店を本隊で襲う。商店の名前はガシュー商会。本隊の任務は、魔剣を所持している男と、その男に同行している７，８歳ぐらいの子供の命を奪うこと。任務遂行の際、抵抗するものがあれば、切り殺して構わん。また、襲撃の最中にその年頃の子供を見かけることがあれば、捕まえておくこと。もちろん、生死は問わん！」
ずい分と血なまぐさい指示。
「それと、この中から、３０人を別働隊として、川向こうの林の中の別荘へ派遣しておく。本隊の襲撃を逃れた標的の人物たちが、そちらへ避難してくる可能性がある。同様に、別に２０人程度の別働隊を町の北、フィオーレ神殿にも派遣する。あの尖塔のある建物だ」

リーダーはフィオーレ神殿の尖塔を示した。
「逃げこんでくる者を捕捉し、その中に標的がいれば、確実に仕留めるように」
黙ってリーダーの指示を聞いていた全員がうなずいた。
指示自体は、明らかに、レオンとジョゼフィーヌの暗殺。
でも、リーダーにとって、この指示は、ちょっと気が重いようで、
「今回の任務は、少々残酷なものではあるが、これも我らの主君のため。どうか、堪えてもらいたい」
顔をゆがめて、頭を下げた。
そして、顔を上げ、
「以上！」

襲撃　4

「だそうよ！」
「えっ！？　じゃ、ガシューの心配的中したんだ！」
オイラは驚きの声を上げてしまったのだが、幸い、その声を聞くことのできる人間はこの部屋にはおらず・・・・・・
あっ！　そういえば、シルフさんの声なら聞くことのできる人間が、この部屋にいたのだった！！
もちろん、その人物・ジョゼフィーヌはシルフさんの報告に耳を傾けていて、
「ち、ちょっと待って、レオン！　ガシューおじさん！」
話し合いが済み、エリオットの部屋を後にしようとしていたエリオットもレオンもガシューも、その声に立ち止まった。
「どうしたの？　ジョゼフィーヌ？　寮へ急がないと」
「ダメです！　今、追っ手が寮へ向かっています」
「えっ？　なに言ってるの？」
大人たちは、全員不思議そうな表情を浮かべて、奇妙なことをいう少女を見つめた。
「ううん、寮だけでなく、お店もこの神殿も襲うつもりです！」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「王都の方から来た、冒険者風の１００人以上の集団が、今、町の外の林の中に待機していて、お店を襲撃するつもりらしいです。で、寮とこの神殿にも人数を割いて、ボクたちが逃れてきたときに備えて隠れている計画みたい」
やけに確信をもって断言するジョゼフィーヌに、大人たちは戸惑うばかりだった。
「ど、どうして、そんなことが？」

「いまシルフがボクに教えてくれたの」
「シ、シルフ？」
「シルフ？　風の精霊か」
「シルフ・・・・・・」
大人たちは、ジョゼフィーヌを信じられないものでもみるかのように見つめていた。
「あなた、精霊使いの素質があるの？」
「ええ、我が家は代々そういう家柄なので」
「そ、そう・・・・・・」
エリオットは、なにか思い出したのか、考え込む。
「その話が本当だとすると、どこか他の場所へ向かった方がいいか」
「しかし、この近辺で、まだアチラ側の息のかかっていない安全な場所を探すのは、難しいのではないでしょうか？」
「うむ・・・・・・」
ガシューとレオンが顔を寄せ合って、ヒソヒソ相談し始めた。
二人とも、微塵もジョゼフィーヌの言葉を疑ってはいない様子だった。
こんな小さな子供が精霊と話ができるというのに、疑問をもたないのだろうか？
「万事窮すに近いかもしれませんね」
「かもしれんな・・・・・・」
って、二人ともあきらめるの早ッ！
「でも、まあ、アチラも、まさか既に我々がこちらへ逃げ込んでいることまでは知らないだろうから、こちらから打って出るってのも、ありかもしれんな」
「ふむ・・・・・・」
ガシューがレオンの意見を検討している間に、レオンが振り返って、
「ジョゼフィーヌ、こちらへ向かって来る人数は何人か分かるか？」
「はい、えっと、２０人です」

「２０人か・・・・・・　相手が本当に冒険者であれば、２０人ぐらいの相手なら、何とかなるのだが・・・・・・」
「どうやら、冒険者を装ってはいるみたいだけど、おそらく、どこかの兵隊たちだろうって」
「だろうな、やっぱり・・・・・・・」
レオン、苦笑い。
「たとえ、こちらに向かってくる２０人を倒したとしても、いずれ、ガシュー殿の店を襲撃した数十人の者たちが気づいて、こちらへ向かってくるだろうし・・・・・・」
「ええ、やはりここは、かなり危険ですが、フィオーレ河を船で一旦河口まで下って、国外へ脱出するしかないかもしれませんな」
「ああ、そうだな」
ようやく、今後のことについて、ガシューとレオンの話し合いがまとまった。
「よし、じゃ、分かりました。これから、ちょっと行って、船頭たちをたたき起こし、船の準備をさせてきます」
「ああ、よろしく頼む」
そして、ガシューは神殿を出ようとしたのだが・・・・・・

ヒュゥゥゥ～～～～
町の東の方角から、奇妙な音が聞こえてきた。
そして、パッと東の空が明るくなる。
花火か！？
全員が、東に面した窓へ駆け寄った。
でも、眼にしたものは、花火とはまったく違うものだった。
町の東の空が赤々と光っている。
「火事だ！！」
だれがつぶやいた言葉か・・・・・・
チッ！　もう始まったか！
うめき声も聞こえてきた。

やがて、町のあちこちでも、その赤い空の光景に気がつく人が現れたようで。
火事だ！！　火事よ！！
と騒ぎ始めた。
町が一気に目覚めた。

襲撃　5

通りには寝巻き姿の人が出ていた。
みんな東の空を不安そうに見上げている。
『あの天を焦がす盛大な火事、まさかこちらの方まで、燃え広がることないだろうな！』
『風はどっちをむいて吹いている？』
などなど、お互いに話し合っている。
でも、そんな中でも、通りのところどころで、この閑静な地区では、あまり見かけない冒険者の格好をした者たちが、あたりを油断なく警戒しつつ、物陰に潜んでいる。
レオンとガシュー、それにジョゼフィーヌは、東側の窓枠に身を隠して、目だけ出して、外の様子を観察していた。
「すでに囲まれている」
「案外、動きが早いですな」
「ああ、ヤツラの方が、一歩も二歩も先んじているってことだ」
悔しげにレオンがつぶやいた。
「どうです、出れますか？」
「う～む、まわりに町の人たちがいなければ、なんとかなるだろうが・・・・・・」
「というと？」
「今でて、斬りあいになれば、騒ぎになるだろうから、その騒ぎで、俺たちの位置がヤツラにばれてしまう」
「なるほど・・・・・・」
と、また再び。
ヒュゥゥゥ～～～～
東の空がより一層明るくなった。
町の人々の喧騒も、一層高まる。
「ガシュー殿、店の人たちは？」

レオンが一応尋ねると、ガシューも不敵に笑った。
「あなた様がたをお預かりしてより、この方、こういうこともあろうかと、店の者どもみな覚悟していたことです。それぞれ、自分たち自身の才覚で、なんとか生き残ってくれるものと、信じておりますよ」
「そ、そうか。すまぬ」
「いいえ、なんの。こんなことは、私ども商人にとっては日常茶飯事のこと。盗賊が押し入ったり、ライバルの商人たちの妨害にあったり。商人となったときに、私ども、とっくに腹をくくっているのですよ。気になさらないでください」
「し、しかし、ああやって店が燃えているのだし・・・・・・」
「ああ、大丈夫です。店が燃えても、財産の大部分は予め安全なところに隠してあります。店が燃えて、灰になったのなら、また、あたらしく店を建てればいいのですよ。それに、あの方には、娘ともども、よくしていただいたのですから、ご恩に報いるために、これぐらいのこと当然ですよ」
東の窓からガシューの店の方を心配そうに眺めていたエリオットが、二人の会話に自分のことがでてきて、一瞬、不思議そうな表情を浮かべた。
「さて、それじゃ、私は行って、船頭どもに船の準備をさせてきましょう」
「でも、大丈夫、お父様？」
エリオットの心配そうな声に、ニコリと笑いで返して。
「大丈夫じゃ、ヤツラの狙いは、レオン殿とジョゼフィーヌ嬢ちゃんのはず。わしがこの神殿から外へ出て行っても、それほどヤツラも警戒するまいて」
「そ、そうですか・・・・・・？」
「ああ、心配いらない」
ガシューはさらに安心させるかのように、エリオットの肩を叩いた。

でも、エリオットはそんなことでは安心できるはずもなく。
「じ、じゃ、トマスを呼びましょう。トマスに、お父様について行ってもらって」
「トマス？　ああ、神殿の司祭見習いの若者か。じゃ、ついでじゃ、明かりもちにでも頼もうかの」
「はい・・・・・・・　トマス！　トマス！」
エリオットが大声を上げた。
もちろん、トマスは部屋の入り口の物陰の中。呼ばれて、すぐに飛び出る。
「はい、お師匠様」
「トマス、こんな時分だけど、お父様のお供をお願いできる？　フィリップ親方のところまでかけるの」
フィリップ親方は、河舟の船頭のかしら。
「はい、分かりました」
そして、ガシューとトマスは、慌てて夜の町へと飛び出していった。

ガシューたちを見送ると、エリオットが眼を吊り上げて、レオンをにらみつける。
「で、レオン？　あなたは私の友達でしょ？　たしか私たちが王都にいたとき、あなた、私に絶対隠し事しないって約束してくれたわよね？　正直に教えてちょうだい！　これはどういうこと？　どうして、あなたが狙われるの？　それに、ジョゼフィーヌまで？」
「そ、それは・・・・・・」
レオンは逡巡して、言いよどむ。
正直に本当のことを答えるべきか？　それとも答えをはぐらかすべきか？
「なんで、ガスペール家とあなたたちが関係するわけ？」
「う、うう・・・・・・」
と、不意に、レオンの袖をジョゼフィーヌが引く。

「なんですか？」
「本当のことを話した方がいいのでは？」
「う～む・・・・・・」
「もし、ボクがここで死んでしまったとしたら、もちろんこれが最後の機会になるのだし、生き延びたとしても、ボクは外国で暮らすことになるのでしょ？」
レオンは、ハッとジョゼフィーヌを見た。
ジョゼフィーヌは、眼の端に光るものを浮かべている。
美少女の目に涙。きれいな光景だ！
レオンも、胸をつかれたようだ。
決然と顔を上げ、エリオットを見た。
「エリオット、実は・・・・・・」
ヒィィィ～～～！！！

襲撃　6

ヒィィィ～～～！！！
神殿の裏で女性的な悲鳴が！
そして、なにやら争うような音がして。
バタンッ！
裏木戸が勢いよく開けられ、影が転がるようにして、中庭に飛び込んできた。
それを追って、エリオットの部屋から漏れる明かりに反射して、鈍く光る刃を振りかざしたマントの男が飛び込んでくる。
レオンは、窓の桟を飛び越え、腰の刀を抜きつつ、男が振り下ろした剣を、下から受け止めた。
後から飛び込んできたマントの男は、一瞬、驚いた顔をしたが、次の瞬間には、ニヤリと笑顔になった。
「その姿、見たことあるぞ！　レオン・フランシスだな？」
そして、一歩飛びのいて、レオンの胴払いの一撃を交わし、懐から笛を取り出し、吹いた。
ピィィィ～～～～♪
甲高い笛の音が町の中でこだまする。
「チッ　見つかったか・・・・・・」
神殿の中庭で、レオンと冒険者風のマントの侵入者が剣を構えて対峙していた。
「おい、お前、大丈夫か？」
レオンが小声で、背後でへたり込んでいる最初に中庭に飛び込んできた男に尋ねる。
「は、はい。大丈夫です。ちょっと腕を切られただけで。でも、お店が！　お店が！」
「ああ、分かってる。ガシュー殿も既に承知している」
その男、レオンの言葉をきいて、安堵したようだ。

そして、バルコニーまで出てきたエリオットの姿を見つけ、慌てて駆けていった。
「エリオットさま、ご無事で」
「ああ、ジョーンね。お前も無事でよかったわ」
「はい・・・・・・」
その二人の目の前で、レオンと侵入者、剣を交えた。
侵入者の裂帛の気合をこめた一撃を、レオンが一歩踏み込んでよけ、必殺のレオンの突きを侵入者が後ろに跳び退ってかわす。
明らかにレオンの方が技量は上。
たちまち、侵入者、裏木戸のかたわらまで追い詰められた。
追い詰められ、焦りの色が見え始めた侵入者、一か八かの捨て身の突撃。
それを冷静によけて、軽い一振りで、侵入者の手から剣を叩き落とす。
勝負あり！
侵入者は、突撃した勢いのあまり、四つんばいになって、レオンに無防備な背中を向けている。そして、落とした剣はレオンの足元。
あとは、レオンが剣を一振りするだけで、侵入者の命を立つことができる！
だが、レオンは剣を振るわなかった。
それどころか、急に振り返って、何もない空間を剣で払った。
キィンンンン〜〜〜〜〜！！
なにか、金属質のものが、剣に触れて、火花を飛ばす。
さらに、もう一振り。
キィンンンン〜〜〜〜！！
だれかが、外からナイフを投げているのだ。
と、這いつくばっていた侵入者、立ち上がった。捕まえ、羽交い絞めにしようと両腕を広げて、レオンに突進していく。
「あぶない！」
エリオットの悲鳴で、とっさに、レオン、脇に飛び、飛び掛って

きた侵入者をやり過ごした。
侵入者はレオンを捕まえ損ねたことで、悔しそうにチッと舌打ちをひとつしたが、足元に転がっている剣を拾い上げ、また、構えた。
レオンは、今や2対1。
剣の技量では、はるかに勝っているようだが、多勢に無勢。
おそらく、さっきの笛の音に引かれ、これからもっと敵が増えるだろう。
だれが見ても絶望的な戦いだった。

「ちょっと、なんなのよ！　さっきから、うるさいわよ！」
緊迫した戦いの最中の中庭に、イライラした甲高い声が。
全員の視線が、礼拝所の前にたたずむ一人の少女のもとへ集まる。
「ったく！　精神集中の邪魔だってぇの！　静かにしなさいよ！
今、何時だと思ってるの！　そんなに騒ぐのだったら、呪いでトカゲに姿を変えてやるわよ！　まったくもう！」
もちろん、中庭に登場したのは、いつものように礼拝所で瞑想していたフィオーリア。
「ち、ちょっと、フィオーリア、危ないわよ！　隠れてなさい！」
エリオットの悲鳴に近い注意が飛んだ。
だが、フィオーリアが状況を把握するよりも、最初の侵入者がフィオーリアへ駆け寄っていく方が早かった。
レオンは、牽制のためのナイフが飛んできて、追うことができない。
ヒィィィィ～～～～！！！
次に起きる惨事を想像して、エリオットが悲鳴を上げた。
その間に、フィオーリアに迫った侵入者の剣が振り上げられ、振り下ろさ・・・・・・
ピカッ！！！
フィオーリアに迫った侵入者、その瞬間、光に包まれた！
振り上げた剣に雷が落ちた。

いや、正確には、雷撃が中庭を横切って、侵入者を打ち倒した。
突然のことに、外からナイフを投げていた敵も呆然とし、隙が出来た。その隙を逃さず、レオンが弾きとばしたナイフのひとつを拾い上げつつ、投げつける。
まるで、予期していたかのような行動。
ギャッァァァァ〜〜〜〜！！！
最初の戦闘は終わった。
オイラたちの勝利だった。

襲撃　7

「一体、なにがあったの？　なにか雷のようなものが、私の脇を通り抜けた気がしたけど？」
「ああ、その話は後で、とりあえず、礼拝所の方へ、避難してましょう」
「ええ、あ、ジョーンの手当てをしないと」
というわけで、オイラたちは、礼拝所に篭ることになった。
礼拝所の中の長ベンチを取り外して、窓という窓、ドアというドアにバリケードが築かれている。
レオンとジョゼフィーヌ、フィオーリアにエリオット、それに、ジョーン、もちろんオイラも礼拝所の隅にいる。
シルフさんは、外の様子を見てくると言い残して、偵察中。
礼拝所はすでに敵に囲まれている。
エリオットの手当てを受けて、さっきまで血の気のない様子だったジョーンにも、しだいに血の色が戻ってきていた。
「旦那様がたがお出かけになったあと、私どもはなにかあってはいけないと寝ずに警戒していたのですが・・・・・・」
なんでも、ガシューが店をはなれてしばらくして、突然、花火のようなものが打ち上げられ、それが店の４階の窓に飛び込んで破裂したらしい。
たちまち、４階が火に包まれ、消火しようと、店のものが騒いでいるところへ、襲撃がはじまった。
敵は、消火に手一杯で無防備な店の者たちに近づいて、手刀の一撃で、次々と店の者たちを気絶させていった。
どうやら、店の者たちの命までとる気はなかったようだ。
ただ、ジョゼフィーヌと同じぐらいの年頃の小僧たちは、敵に捕まり、どこかへ連れていかれたという。
で、ジョーンはたまたま店の高価な品物を延焼から救い出そうと、

倉庫の中で作業していたところだったので、襲撃に気づいたときに、物陰へ隠れて、難を逃れることができたらしい。
　そのまま、敵の目を盗んで逃亡し、ガシューに知らせようと神殿近くまで走ってきたところで、さっきのヤツラに襲われたのだった。
「そう・・・・・・」
　エリオットが悲しげな表情を浮かべた。
「しかし、見事に囲まれたな。これでは、ガシュー殿が河舟を用意できたとしても、抜け出せそうにもないな」
「そうね・・・・・・」
　窓の隙間から見た感じでは、囲んでいるのは、もともと神殿の周辺にいた敵の２０人ほど。
　でも、最初の戦いで二人がすでに倒されているからか、警戒して神殿を囲むだけで、手出ししてこない。おそらくガシューの店を襲った者たちも呼び寄せて、合流してから、襲撃してくるつもりだろうか。
　近所の町の人たちも、異様な雰囲気に、怯えて、すでにそれぞれの家の中に閉じこもってしまっている。
　異様に、静かだ。
「ったく！　なんなの？　この騒ぎは、一体？」
　そんな中、一人事情を飲み込めないでいる少女が一人。
「外のアイツらは、ナニ？」
「・・・・・・」
　でも、だれも答えない。
「ちょっと、無視するな！　人が訊いているのだから、答えなさいよ！」
　一番手近かにいたジョゼフィーヌに詰め寄る。
「うるさい！　今、それどころじゃないの、分からないのか！」
「はぁ～！　何様のつもり？　たかが人間の分際で！」
「なんだと！　お前こそ、何のつもりだ！　卑しい魔女のくせに！」
「なんですってぇ！」

「なんだよ！」
場所柄をわきまえず、喧嘩を始めそうな二人を止めたのは、レオンだった。
「たしかフィオーリアちゃん・・・・・・だったよね？」
「ええ、ここではそう呼ばれてるわ」
「すまない、我々のために、君までこんなことに巻き込んでしまって」
「ん？」
「外の敵は、私たちの命を狙っているのだ。私とそこにいるジョゼフィーヌの」
「・・・・・・？」
不審げな眼をレオンとジョゼフィーヌに向ける。
ひとしきり二人の姿をたっぷりと眺めた後、
「なんで？」
でも、レオンは首を振る。
「すまない、今はそれを話せない」
「ふ～ん・・・・・・？」

「まあ、いいわ。とにかく、アンタたちのせいで、あたしまで、命の危険にさらされてるってことね？」
「ああ、そうだ。すまないと思ってる」
「じゃあ、あたしたちが生き延びるためには、アンタたちを外にたたき出すか、外のヤツラをやっつけなければいけないのね？」
「・・・・・・ああ」
「ふ～ん・・・・・・」
なぜか、じろりとジョゼフィーヌをねめつける。
「アンタ、外へ出て行けば？」
「なんでだよ！」
「アンタ、いらない！　アンタのために、死にたくない！　だから、アンタが死ね！　わかった？」

「お、お前な！」
じ、邪悪なヤツ！
「レオンなら、助けてあげてもいいけど、アンタはヤダ！」
「ハァ～？」
って、フィオーリアの命をレオンが散々狙っていたのだけど・・・・・・
そこへレオンが困惑顔で、
「それは困る。私は、ジョゼフィーヌの護衛を頼まれたのだ。私が死ぬことがあっても、ジョゼフィーヌに死なれては・・・・・・」
ム～～～
フィオーリアうなり声を上げた。
「なら、アンタたち二人とも、外にいって、アイツらに殺されてらっしゃい」
「お前なぁ～！！！」
どこまで自己中なのだろうか・・・・・・
「こら！　フィオーリア、いい加減になさい！　さっきから聞いてると、いい気になって！」
エリオットの叱責が飛んだ。さすがに、普段から説教とかしなれている司祭なだけあって、ものすごい声量だ。しかも音がこもる礼拝所。まさに音の暴力だ！
柄（頭）がガンガンする。
フィオーリアも同じようで、フラフラしている。
「大体、アンタみたいな子供が口を挟んでいい状況でないことぐらい、分かるでしょ？　まったく、この子は！」
そして、レオンに向き直って、
「レオンもレオンよ！　こんな子供のたわごと、一々相手しないで！　今は、そんな場合じゃないでしょ？」
レオンも、首をすくめている。
「今はみんな絶体絶命のときなの！　真面目に、この状況を切り抜ける方法を考えなくちゃいけないの！　みんな、分かった？」

「ああ・・・・・・」「うん・・・・・・・」「はい・・・・・・・」
力強く宣言したが、どこか、戸惑ったような返事がパラパラと返ただけだった。

襲撃　8

フィオーリア、ジョゼフィーヌ、レオン、今度は、三人で、祈祷台の陰に集まって座り込み、こそこそ相談を始めた。
ここなら、声をひそめれば、ジョーンとなにやら、熱心に話し込んでいるエリオットには話を聞かれる心配はない。
「で、魔女。この状況、なんとかなりそう？」
「だれに、口きいてるのよ。虫の分際で」
「なんだと、腐れ魔女め！　生き残ったら、絶対、お前を火あぶりの刑にしてやる！」
「ふん！　その前に、アンタをネズミの姿にしてやるわ！」
って、いつのまにか、この苦境から脱出して、生き残ること前提になってるし。
話がまた脱線しそうなので、レオンが介入。
「魔法で、外の敵を始末できるか？」
「う～ん・・・・・・　わかんない。今の私の魔力じゃ、ファイアーボールひとつ打てないし」
途端に、レオンの目に戸惑いの色が・・・・・・
ま、こないだから、散々ファイアーボールに悩まされ、さっきは雷撃の魔法を見せられたのだし、当然か。
「でも、アンタのそれ、魔剣でしょ？」
「ああ、そうだ。我が家に先祖代々伝わる聖剣メテオ・クラッシャーだ」
「ふ～ん、なら、それ、貸して？」
「・・・・・・な・に？」
「だから、そのメタルクラッカー？　とかいうの、貸して！」
「・・・・・・メテオ・クラッシャーだ！」
逡巡の色が顔に・・・・・・
そりゃそうだろう。

まがいなりにも、レオンが所持しているのは、オイラのファイアーボールすら、一撃で切り払ってしまえるほどの魔力を秘めた魔剣。滅多やたらに貸し与えれば、たちまち精神を乗っ取られて、バーサーカー化してしまう。
「分かっているだろうが、これは魔剣だからな。精神を乗っ取られることもある危ない剣だぞ？　妖しいそぶりを見せれば、すぐに取り上げるからな」
散々、ぐずったあげく、フィオーリアに背負っていた大剣を渡した。

受け取った剣を目の前に横たえると、
「箒、ちょっとこっちへ来て、あたしを手伝いなさい！」
フィオーリアがオイラを呼ぶ。今まで一度もなかったことだ。
三人の視線が、隅にいたオイラに集まった。
人前では、絶対に動いたりしない主義なんだけどな、オイラは！
「ほら、箒。なに、ぐずぐずしてるの！？」
ム～～～！
主義に反するのだけど。ま、この場合は、仕方がないか・・・・・・
オイラは、起き上がり、とことこと三人のもとへ歩いていく。
途端、ジョゼフィーヌとレオン、腰を浮かせ、逃げ腰、恐怖の表情。
「ほ、箒が・・・・・・！」
「ほ、箒が歩いた！！」
なんだか、新鮮な気分。歩いて見せただけなのに、こんな風に怖がってくれるなんて。
ぐふふ。
クセになりそう！
でも、オイラが近づくと、ひとり当然という顔で怖がっていないフィオーリアは、無造作にオイラの柄をつかんだ。

そして、空いている方の手で、目の前の魔剣メタルクラッカー（だっけ？）を触る。
「ふぅ～　さすが、魔剣なだけあるわね。すばらしい魔力だわ。もう、あたしの魔力容量いっぱいになっちゃった。まだまだ瞑想修行が足りないわね。魔力をもっともっと練らなくちゃ」
そして、フィオーリアにつかまれている部分から、何かがオイラの中に注ぎ込まれてきた。

しゅうぅぅぅ～～～～
なにかが萎むようなマヌケな音が聞こえてくる。
「な、な・・・・・・　め、メテオ・クラッシャーが・・・・・・・」
レオンの悲痛な声。
オイラの中、半分くらい何かが溜まった。
「ふぅ～　こんなものね。箒はまだまだいけそうだけど、魔剣の方が魔力残ってないみたいだし・・・・・・」
反対側の手を見ると、テーブルナイフほどの大きさと形の金属片が・・・・・・
その金属片を、泣きそうな表情で、まじまじと見つめるレオンがオイラの前にいる。
フィオーリアは、そのテーブルナイフをヒョイと取り上げると、レオンに渡した。
「ほい　メタルクラッカー」
「め、メテオ・クラッシャーが！　我が家の家宝メテオ・クラッシャーが！」
「あ、そうか、メテオ・クラッシャーとかいう大層な名前だったわね、それ」
「め、メテオ・クラッシャーが！　我が家の家宝メテオ・クラッシャーが！」
フィオーリアの言うことなんて、聞いちゃいない。
「ったく！　いい加減、うるさいわね！　それは元々魔剣なんだか

ら、1万匹ほど、魔物を殺して血を吸わせれば、元に戻るじゃない！」
ムッとした顔で言うフィオーリアに、呆れ顔のジョゼフィーヌが、
「って、どこに魔物なんかいるんだよ！　それも1万匹も！」
冷静な突っ込み。少なくともオイラは今まで魔物なんて、見たことない（ただし、オイラ自身はのぞく）。
そして、フィオーリアはふんぞり返って、のたまった。
「・・・・・知るわけないでしょ、あたしが、そんなもの！」
「って、オイ！」
そんな二人の近くで、手の中のテーブルナイフを見つめて、いつまでも同じ言葉をつぶやく男が一人。
「め、メテオ・クラッシャーが！　我が家の家宝メテオ・クラッシャーが！」
あわれ・・・・・・
ともあれ、レオンはメテオ・クラッシャーを失い、テーブルナイフを手に入れた！！

襲撃　9

「それと、アンタ、腰に差している方の剣も貸しなさい」
フィオーリアは、テーブルナイフを両手に持って、嘆き悲しんでいるレオンに言う。
途端に、ビクッと全身を震わせ、腰を全力で押さえて、わさわさと逃げ出そうとした。
まあ、目の前で大切な家宝の剣がああなってしまったのだしね。
そんなレオンをジト眼でにらみ、
「なにやってるのよ！　はやく、渡しなさい！　時間ないんだから！」
奪い取ろうと近づいていく少女フィオーリア。
「や、やめてくれ！　こ、これだけは、これだけは！」
「なによ？　これだけはって？」
「これは、祖父の形見なんだ。これだけは、見逃してくれ！」
「ハァ〜？　アンタ、なに言ってるの？」
フィオーリアは、片眉をあげ、さも馬鹿にしたように、
「アンタのそれ、それも魔剣だってわけじゃあるまいし。って、それ魔剣なの？」
途端に、レオンが大きく何度も首を左右に振る。
「なら、心配いらないわ、アンタのその剣に魔法を掛けてあげるだけなんだから」
「ま、魔法・・・・・・？」
「ほら、早く寄越しな！」
そう言って、強奪していく。
「あ、ああ・・・・・」
レオンが切なげな声を上げる。ちょっと、気持ち悪い。
「心配なら、そこで大人しく見ていなさい、いい？」
レオンが心配そうな表情を浮かべて、見つめている中、フィオー

リアは手に握った剣をじっくりと鑑賞しはじめた。まるで、値踏みでもしているかのような目で。
いや、フィオーリアのことだから、心の中で値段を計っているのかも。
「あら！？　意外に、いい剣じゃない。無名だけど、腕の確かな刀鍛冶が全身全霊を込めて鍛えた一振りって感じね。これなら、いろいろできそうね」
フィオーリアは剣を床に置くと、オイラを握ったまま、もう一方の手の平で、その剣をなでていく。両目を閉じ、なにかの呪文を唱えながら。
なんだか、オイラの中から、何かが少しずつ抜け出ていくような・・・・・・
しばらくして、剣から手を離した。
レオンの剣には、特に変わった様子はなかった。
床に置いたときと、同じ大きさ、同じ刃の輝き。
レオンは、何事もなかったので、ホッと息を吐く。
「もう、いいか？」
フィオーリアは、ウンとうなずいた。
そこで、レオンが無造作に剣を持ち上げようとすると・・・・・・
「ムッ・・・・・・！？」
なにか、異変があったのだろうか？
「おい、剣、重たくなってるぞ？」
フィオーリアは勝ち誇ったように、
「当たり前じゃない。アンタのその剣に、スプラッシュの魔法を１０回分付与してあげたんだから」
「・・・・・・！？」
「それで、火の方を切れば、スプラッシュの魔法が発動して、消火してくれるわ」
得意げに顔の横で人差し指を立てて言う。
「あ、もちろん、さっき言ったように、魔法が発動するのは、１０

回までだから、気をつけなさいよ！　１０回発動したら、元の剣に戻っちゃうから」
レオンは、目をパチクリとさせ、胸に抱くようにして剣をひったくる。
「ま、元の剣に戻るって言っても・・・・・・」
なにか、フィオーリアが口の中でゴニョゴニョ言っているようだが、だれにもうまく聞き取ることはできなかった。

レオンは、長剣（『スプラッシュ－１０』）を手に入れた。

ようやく、準備が整ったようで、フィオーリアはジョゼフィーヌとレオンの顔を見回し、
「じゃ、行って、外のヤツラ蹴散らしてきてあげるわ。みてらっしゃい」
それから、オイラにおもむろにまたがった。
エリオットとジョーンはその頃には、手当ても情報交換も終わったようで、祭壇にあるフィオーレ女神の神像に向かって熱心に祈りをささげている。
二人とも、オイラたちの様子は眼にも耳にも入っていないようだ。
やがて、フィオーリアは口の中で、
クカタラソ、ベート、キウホ・・・・・・
オイラもよく知っている飛翔の呪文。
もちろん、いつものように、まわりを風が渦巻くこともなく、少女の髪の毛が逆立つこともない。
あたりの景色はなにも変わらない。
ジョゼフィーヌもレオンも何かを期待して、ワクワク顔で、フィオーリアの姿を見ていたが、何も変化が起きないことに、しだいに失望の表情を浮かべ始めた。
「お、おい？　お前、なにやってんだ？」
そんなジョゼフィーヌなんて、完全無視！

「お、おい！」
ついに痺れを切らして、ジョゼフィーヌがフィオーリアの肩をつかんだ瞬間だった。
――――ベート！
呪文の最後が唱えられた。そして、フィオーリアが地面を思いっきり蹴る。
「うおっ！？」
オイラたち、礼拝所の中を浮き上がった。
「と、飛んでる！？」
なにか、余分な声がオイラの上から聞こえるような。
「ち、ちょっと、アンタ、どこ触ってるのよ！　手、放しなさいよ！」
「と、飛んでる！　ボク、飛んでるよ！　イタッ！」
オイラの上では、オイラにまたがっているフィオーリアとその肩に手を置いているジョゼフィーヌがいた。そして、ジョゼフィーヌがフィオーリアに頭をはたかれている。
「な、なにするんだ！　痛いじゃないか！」
「なにするのってのは、こっちのセリフよ！　勝手に、人様の体に触れて！　いい加減、その汚い手を離しなさい！　虫の分際で、この魔女様に手をかけるなんて、１００万年早いわ！」
「な、なに！　この腐れ魔女が！　調子に乗るな！」
「フンッ！　その手をとっととお放し！　そして、そのまま、墜落して、首の骨を折って、死んでしまいなさい！」
途端に、ジョゼフィーヌ、心配そうな表情になる。
「えっ！？　この手放したら、落ちるの？」
「だから、そう言ってるじゃない！　お放し、虫！」
もちろん、そんな状況で手を放すバカはなかなかいないもので。
「って、アンタ、なに、私に抱きついてきてるのよ！　き、気持ち悪い！　放れろ！　放れろ！」
じたばた暴れるフィオーリアの抗議もむなしく、結局、ジョゼフ

ィーヌは礼拝所の天井までついてきてしまった。そのまま、開いていた天窓から、屋根の上へ、さらに、尖塔の天辺へ。

さあ、いよいよ攻撃の開始だった。

魔女の言うことは信じるな！　1

オイラを握るフィオーリアと、そのフィオーリアにつかまっていたジョゼフィーヌ、尖塔の天辺に座りこんでまわりを見回していた。
「あそこの井戸の陰に一人いるわね。それに、あのユリアン爺さんちの大木の後ろ」
「ヒューイの家の納屋の裏にも二人いるよ」
「ええ、それで、全員かしら？」
「たぶん・・・・・・　で、これからどうするの？」
「ふふふ。いい、見てらっしゃい。偉大なる魔女様の真の実力を、虫けらのアンタにも見せてあげるわ。見て、腰を抜かしなさい！
そして、神のごとく崇めなさい！」
瞳を妖しく光らせて、立ち上がった。となりで、ジョゼフィーヌ、閉口。
やがて、両目を閉じ、空いた方の手を頭上に掲げ、口の中でなにかゴニョゴニョつぶやき始める。
呪文を唱えている。それも、オイラの知らないヤツ。
と、頭上に掲げた手の先の空間に小さな光の粒が現れた。同時に、オイラの中から何かが急激に抜け出ていく。
見る間に、その光の粒が膨れ上がり、レモン大に、オレンジ大に、メロン大に、そして、スイカ大に・・・・・・・
それでも光の膨張とまらない。
なんだか、下の方がざわざわしてきたような。
まあ、突然、監視対象の塔の上に光が現れたのだし、ビックリしない方がヘンか。
さらに、犬ほどの大きさに、豚ほどに、人ほどに、馬ほどに、牛ほどに！
下の襲撃者たち、こちらを指差して、口々になにか言い始めたのがみえる。

その間に、荷車ぐらいに、納屋ほどに、そして、ついには、この神殿並みの大きさに！！！

フィオーリア、妖しく瞳を光らせ、フフフと不敵に笑っている。

ジョゼフィーヌの眼にも怯えの色が・・・・・・

「さあ、下等な虫ども、消滅しておしまいなさい！」

フィオーリアが手をゆっくりと下ろすと、頭上の光も下へ向かい始めた。

はじめはゆっくりと、しだいに加速度がついて、速く。

そして、少女は、最後の一言を叫んだ。

「ブレイク！！」

神殿ほどの大きさの光の塊、その途端、何十にも分裂した。そして、無秩序な軌跡を描いて・・・・・・

――――チューン、ドドドドドドッ！！！！！！

あたり一面に無差別爆撃。

あっという間に、あたりは火の海に変わった。

「フホホホホ！　見た？　いい気味だわ！　ウホホホホー！！！」

「す、すごい・・・・・・！？」

「さあ、燃えておしまい！　何もかも、みんな燃えておしまい！！

ホホホホホーーー！！」

下の火の海からの照り返しの中、哄笑を上げているフィオーリアの横で、ジョゼフィーヌがハッとした表情を浮かべた。

「って、おい！　お前、なにやってんだ！　あそこには、敵ばかりでなく、町の人もいたんだぞ！　どうしてくれるんだよ！」

ジョゼフィーヌのまっとうな非難ももう耳に入らないようで、再びさっきと同じ呪文を唱え始めるフィオーリア。

「お、おい！」

「チッ！　うるさいわね！　アンタも吹っ飛ばすわよ！」

キッとジョゼフィーヌをにらむ。

ヒィィーーー！！

思わず、ひるんだジョゼフィーヌ。

ダメだ、こいつ完全にいってる！
ジョゼフィーヌがそうつぶやいていた。

不意に、オイラの耳にシルフさんの声が聞こえてきた。
「ちょ、ちょっと、今のなによ？　なにがあったの？」
「あ、お帰り」
「このあたり火の海じゃない！　信じらんない！」
「ああ、オイラもだ！」
「ああ、ボクもだ！」
オイラとジョゼフィーヌが同時に返事をした。
「ああん？　なにがボクもなのよ？」
シルフさんの声をとらえられないフィオーリアが、冷たい声音でジョゼフィーヌに質問。
「い、いや、なんでも・・・・・・」
ブルッと震えて、口の中でモゴモゴ・・・・・・・
か、可哀そうに・・・・・・・　すっかり怯えて・・・・・・・
「それより、来たわよ。ガシューの店を襲ってた連中。ほら、大通りの方」
オイラがシルフさんの言う方向を見ると、確かに東の大通りの方角に、数十人の人影が見える。
でも、何か立ち止まって、混乱しているような。
って、いきなり目的地の方向が火の海になったのだから、当たり前か。
「お、おい、フィオーリア・・・・・・・さん？」
ジョゼフィーヌが遠慮がち（？）に、
「ああん？　ナニ？　あたし、いそがしいんだけど？」
「い、いや、その、大通りの方、新手が・・・・・・」
「ん？　ああ、あれね、分かったわ」
そして、呪文の詠唱が終わった。
頭上には、再び、神殿ほどの大きさの光の塊が。

「ふふふ、さあ！　絶望しなさい！　苦しみなさい！　生まれてきたことを後悔しなさい！　虫けらどもめ！」
なんか最低な言葉を発して、腕を大通りの方へ振った。
頭上の光の塊、その動きにつられて、大通りの方へ。
最初はゆっくりと、しだいに加速度をつけて。
よく見ると、大通りの人影、動揺し、背を向け、バラバラになって逃げ出していく。
「フンッ！　今頃逃げ出しても遅いわ！　虫けらどもめ！」
にやりと悪魔的に笑い。
「ブレイク！」
再び数十の光の玉が、無秩序な軌道を描いて、逃げていく襲撃者たちの背中を襲う。
――――チューン、ドドドドドドッ！！！！！！
そして、大通り方面も火の海と化したのだった。

魔女の言うことは信じるな！　2

バンッ！
ちょうどそのとき、オイラたちの足元の方から、扉が勢いよく開けられる音が聞こえてきた。
たちまち、
「な、なんだ、これは！」
大人の男の驚愕した声が上ってきた。レオンだろう。
レオンたち、ようやくバリケードを取り外して、外にでてきたようだ。
さっきからすごい異様な音が外から響いていたから、様子を見にでもでてきたのだろうか？
つづいて、
「まあ！　なんなの、これは！」
エリオットの声かな？
「おお、神よ！」
当然、ジョーンか？
「とにかく、町の人を救助しなくちゃ、レオン、ジョーン、手伝って！」
「お、オー！」
「はいっ！」
神殿の周りの火の海へ駆け出していく人影が見えた。
その人影へ向かって。
「ちょっと、レオン！　あんた何のために、腰の剣もってるの？」
人影のひとつが、オイラたちの方を見上げたようだ。
尖塔に上に、オイラたちの姿を認めると、なにか問いたげな表情を浮かべた。
やがて、ひとつうなづくと、ソロリと腰の剣を抜く。構えると、
「エリオット、ジョーン、待った！　そこを動くな！」

そして、鮮やかに剣を一振り。
次の瞬間、振られた剣の軌跡から、大量の水流が家々を燃やす炎の方へ跳んでいく！
まるで滝のように。
神殿の前の家々の火事は一瞬のうちにおさまった。たった剣の一振りによって。
レオンは、同じように神殿の四方で剣を振るい、町の家々の火事を消していく。
結局、神殿の周りの火の海は、たった四回の素振りによっておさめられたのである。
幸いなことに、火の海になっていたとはいえ、炎は家々の外側を焦がしただけ。町の人々は、襲撃者たちの異様な雰囲気を恐れて、扉や窓を堅く閉めていた。消火もレオンによって、すばやくなされた。
そのため、家の中まで火がまわることもなく、神殿の周囲の人々で命を落とした者はだれもいなかった。ただ、数人軽い火傷を負ったぐらいで。
だが、襲撃者たちの方はそうはいかなかった。
彼らは屋外にいて、まともにフィオーリアの光の玉を浴びたのだから。
朝になって日が昇ったとき、町の人々は、人型の炭をあちこちで見かけることになる。

レオンは、大通りの方へ駆けていった。
神殿の周辺の消火は済んでいるが、まだ大通りの方は火の海のままだった。
家々を舐める火の手に向かって剣を振るう。
振るった剣の軌跡から、大量の水流が飛び出し、滝のように燃えている家々を襲う。
すぐに、火勢は弱まり、白煙を上げるだけとなる。

それを道々何度か繰り返し、大通りの火事はほぼ消し止められた。
大通りの両側の家々の外観は、黒く焼け焦げたものになったが、人的被害はここでもほとんどなかった。
そして、さらに、東へ駆けていくと、今まさに炎を噴いて燃え盛っている建物が見えてきた。
ガシューの店だ。
元々2棟の大きな建物だったはずだが、すでに一棟は燃え落ち、倒壊したようだ。
残りの一棟も逆巻く火炎に包まれている。
これでは火を消しても、使い物にはなりそうもない。取り壊すしかないだろう。
だが、ここで火の手をとめなければ、周囲の民家も巻き込んで倒壊する恐れが十分にある。
レオンはガシューの店に向けて、剣を構えた。
そのときだった。
左手の家の軒先に停まっていた荷車の荷台に腰掛け、レオンの様子をジッと見つめていた一人の男がユラリと立ち上がった。
レオンはその人物から猛烈な殺気が発せられているのを感じ取った。
炎の明かりに照らされたその顔は、シルフさんならすぐに気づいただろうが、襲撃隊のリーダーだった。
彼は生き残っていた。フィオーリアの攻撃魔法をかいくぐって。
「そこもとは近衛隊フランシス隊長のご子息レオン・フランシス殿とお見受けする」
レオンは、その人物に視線を向ける。
「左様」
「我は、王て・・・・・・」
襲撃隊のリーダーが名乗りを上げようとするのを制して、
「待て！　もし、おぬしが今晩の襲撃に関係する者であるのなら、我がここでその名を聞いたのでは、我が友にとっても、そちらの主

君にとっても、差しさわりがあろう」
「うむ、確かに・・・・・・」
その人物も納得したようだった。
「では、改めて、我が名は、マーティン・ジャスティス。お主に3年前の御前試合で苦杯をなめさせられた。あのときの屈辱、今ここで、晴らさせてもらうぞ！」
復讐に燃える強い眼光でレオンを見つめるのだが、レオンはというと、
「ま、マーティン・ジャスティス？　だれだそれ？　そんなヤツと、戦ったか？　3年前に？」
怪訝な表情。実際、まったく覚えていなかった。
「な、なに！？　我を覚えていないだと！」
「どこで対戦した？　決勝ではないよな。確か決勝の相手は、国軍のブライト・ヒューイとかいう小隊長だったし」
「我を見忘れただと！　覚えてないのか？　・・・・・・ほ、本当に？」
探るような眼。
「うむ。準決勝じゃないよな。確か、あの時は、対戦相手が前の試合で負傷して、不戦勝だったし、準々決勝は・・・・・・　確か、ロンバール公のご子息だったはず。お前じゃないよな？」
「ち、ちがう！」
「あとは・・・・・・　大した相手いなかったはずだが？」
「なっ、なに！　あの突きを忘れただと！」
「はて・・・・・・？」
「お、おのれぇぇぇぇ！！！」
リーダーは剣を構えた。その剣、薄く光っているところを見ると、魔力を秘めているようだ。
レオンもそれに気づいたようで、剣を構えなおす。
そして、壮絶な決闘がはじまった。

魔女の言うことは信じるな！　3

オイラたちは、再び空を飛んでいた。
今回は、天井へ飛び上がるのではなく、中庭へ降りるために。
オイラたちは、ふわりと羽のように地面に降り立った。
「ふぅ～　やっと終わったわ。これでまた静かになるでしょう」
フィオーリアはやれやれというように、額の汗を手の甲でぬぐう。
「・・・・・・」
一方、ジョゼフィーヌは、さっきから無言のままだった。なにかを思いつめでもしたような厳しい顔をしている。
フィオーリアは井戸の水を汲み、グビグビと飲み始めた。
そのときだった。
ジョゼフィーヌが、中庭の隅へ走り出した。
そのジョゼフィーヌが走っていく先には・・・・・・
雷撃を受けて倒れている襲撃者の姿。最初に倒された襲撃者だ！
オイラたちが見ている中で、ジョゼフィーヌ、襲撃者のかたわらに落ちていた抜き身の剣を拾い上げ、フィオーリアに向かって構えた。そして、
「死ね！　極悪魔女め！」
フィオーリアへ向かって切りかかっていく。
「ちょ、ちょっとナニよ！　まったくもう！」
フィオーリアはすんでのところでジョゼフィーヌの切っ先をかわした。それから手に持っている棒のようなものを構えた。
手に持っている棒のようなもの・・・・・・　つまり、オイラだ！　ヒィィィ～～～～～！！！
「なんなのよ、アンタ！　あたしに恨みでもあるの？」
「フンッ！　先ほどからの行動をみれば、お前が極悪魔女だというのは、明らかだろうが！　殺すには、それだけで十分だ！」
「アンタたちの命をだれが救ってあげたと思ってるのよ！　ったく

！　これだから、下等生物は・・・・・・キャッ！」
ジョゼフィーヌが切りかかってきた。どう見ても、ジョゼフィーヌの剣捌きは、普段から訓練を積んだそれに見える。それに対して、フィオーリアはオイラをめちゃめちゃに振り回して、対抗しようとする。
って、や、やめて！　いくらオイラでも、剣相手じゃ切られちゃうよ！　オイラの柄、そんなに丈夫じゃないんですよ！
ふ、フィオーリアさん、お願いですから、オイラの体で剣を受けとめようとしないで！
あ、あぶない！
オイラの体のすぐ近くを剣の刃がすり抜ける。
「ちょ、ちょっと、箒！　なにやってるのよ！　アンタ、あたしを守って戦いなさいよ！」
オイラ、必死にジョゼフィーヌの剣をよける。
「くねくね身をよじって、避けるんじゃないわよ！　あたしがあぶないじゃない！」
って、オイラが危なくてもいいんかい！
ひゃっ！　きたっ！
「死ねッ！　腐れ魔女！」
オイラは思いっきり、身（柄）をそらして、ジョゼフィーヌの攻撃をよけた。
なんとか、オイラはジョゼフィーヌの必殺の一撃を、髪（毛）一重の距離でよけることができた。だが、その行動は、ジョゼフィーヌにとっては、まったく予想外の動きだったようだ。
当たり前の話だ！　どこの世界に、くねくねと動く剣があるというのだ！
そして、オイラのよけた先に飛び込んできたのは、ジョゼフィーヌの頭だった。
バチコーン！！！
盛大な音を立てて、ジョゼフィーヌはオイラとぶつかった。

一瞬、オイラの中で不気味な軋み音が・・・・・・・
でも、なんとか、オイラは耐えた。でも、ジョゼフィーヌは・・・・・・・

ジョゼフィーヌはその場に仰向けで倒れて、伸びていた。
剣は手を離れ、遠くに吹っ飛んでいる。
その神々しい長い金髪は後ろに転がって・・・・・・・　転がって？
ジョゼフィーヌの体と髪の毛の間に地面の土が見える。
って、ことは・・・・・・？
ジョゼフィーヌの長い髪、カツラだった。本当の髪は、短く刈り込んだ金髪だった。
ジョゼフィーヌ、男だった！？
オイラが衝撃の光景に驚いて呆然としていると、
「よくやったわ、箒。褒めてあげる」
満足そうなフィオーリア。一方、
「大丈夫？　怪我とかしてない？」
シルフさんがおろおろとした声で、心配してくれる。
「ああ、なんとか」
やっぱり、性悪クソガキより、風の精霊さんの方が何万倍も素敵だ！
「まぁ～！」
風が、オイラのまわりを優しくまわった。

魔女の言うことは信じるな！　4

フィオーリアは、オイラを手放すと、ジョゼフィーヌにまたがり、胸倉をつかんだ。
そして、右手を大きく振りかぶると、ジョゼフィーヌの頬に、
バシンッ！！！
さらに、引き際に手の甲で、
バシンッ！！！
往復ビンタ。い、いたそう～
「ほらっ！　おきなさい！　なんなのよ、アンタは！」
ジョゼフィーヌ、頬の痛みで目が覚めたみたいで、
「うっ、うう・・・・・・」
「おらっ！　どういうつもりよ、いきなり襲い掛かってきたりして！」
もう一度、往復ビンタ。
ようやく、はっきりと目が覚めたようだった。
さらにもう一発と構えるフィオーリア。
「わっ！　よ、よせ！　それ、ムチャクチャ痛い！」
もちろん、容赦するフィオーリアではなかった。

「で、なんで、あたしを襲ったの？」
「う・・・・・・　悪い魔女だから」
「ああん！　なにか言った？」
鋭い目でにらむ。怯えるジョゼフィーヌ。
「お前は、お母様を奪った悪いヤツだから・・・・・・」
「お母様？　だれよ、それ？」
「ボクは悪くないんだ！　ボクは広い屋敷で一人ぼっちなのに、お前が、悪い魔法でお母様をたぶらかすからいけないんだ！」
「なによ、それ？」

「ボクがお母様の本当の子供なのに、お前がお母様の子供のフリして！　絶対、許さない！」
ジョゼフィーヌが憎々しげにフィオーリアを見つめる。
「・・・・・・」
「絶対、お前を殺して、ボクはお母様を取り戻すんだ！」
えっと、どういうことだろう？
オイラの頭の中は疑問符でいっぱい。
フィオーリアが誰かの母親を奪ったことってあっただろうか？
まして、ジョゼフィーヌの母親らしき人を？
「あっ！　わかった！　フフフ」
このタイミングで素っ頓狂な声を上げたのは、シルフさんだった。
「え？　だれ？　ジョゼフィーヌの母親って、だれ？」
「フフフ、そうか、そういうことだったのね？」
ジョゼフィーヌ、一瞬、驚いたような表情を浮かべたが、フィオーリアをにらみつけなおす。
「だれよ？　アンタの母親って？」
「フンッ！　いいだろう、教えてやる！」
ここで、一旦、十分な間を取る。案外、芝居がかったヤツ。
そして、精一杯、厳かに告げた。
「お前の育ての親、エリオット司祭様だ！」
ガーンッ！！！　衝撃の事実！！！
なんてことだ！　エリオットの子供がジョゼフィーヌだというのか！？
「・・・・・・」
でも、驚いているのは、オイラだけみたいで。
「フン！　やっぱりね。そんなことだろうと思ったわ。このとっちゃん坊やめ！」
「あはは、やっぱりそうか。私の思ったとおりだわ！」
ジョゼフィーヌは、どうだ驚いたか！？　みたいな顔をしていたのだけど、フィオーリアの方はまったく動揺の色なし。

「だいたいね、なんで、あたしが、アンタの母親を盗らなきゃいけないのよ！　バカじゃない？　エリオットは、あたしの乳母であって、あたしの母親じゃないわ！」
「・・・・・・！？」
動揺しているのは、ジョゼフィーヌの方。自分の発言で目の前の悪い魔女が動揺し、怯えるとでも思っていたのだろう。でも、実際には、そんなことなんてなく。
そんなジョゼフィーヌの動揺をつくように、早口でフィオーリアが言う。
「いいこと？　アンタのエリオットは、あたしが魔法で奪ったからアンタの元を離れたんじゃないわ！　アンタのことを思って、自分から離れていったのよ！　分かる？　エリオットの気持ち？」
「・・・・・・ど、どういうことだ？」
「自分が、卑しい庶民の娘、商人の娘で、アンタは大貴族の跡取り息子。身分が違うわ！　だから、アンタが将来、そのことで苦労することのないように、だれからも後ろ指差されないように離れていったんじゃない！　全部、アンタのためを思ってしたことよ！　そんなことも分からないの？」
「な・・・・・・　そ、そんなはずは・・・・・・！！　う、ウソだ！　全部でたらめだ！　お前が考えたウソっぱちだ！」
フィオーリア、軽くため息。
「ホント、アンタってバカね。そんなわけないじゃない！　大体、なんで、あたしがそんなウソつかなきゃいけないのよ？」
「お前が悪い魔女で、魔法でみんなを操っているのを隠すためだ！」
「ハァ～？　アンタ、なにとち狂ってるの？　あたしがみんなを操ってるのだったら、とっくに、アンタもレオンもあたしの思い通りに操っているわよ！」
「ぅ・・・・・・」
「そもそもあたしぐらいになると、アンタが今考えたみたいなこと、絶対思いついたりしないようにだって魔法でできるのよ」

「・・・・・・！？」
ジョゼフィーヌ、激しく動揺している。
「いい？　あのエリオットはね、あたしがここに来たとき、毎日泣いていたわ。来る日も来る日も、泣いて泣いて泣いて。『アンタに会いたい！　アンタに会いたい！』って。でも、会いに行ったら、アンタに迷惑かけることになるから、我慢して会いにいかなかったの！　ううん、行けなかったの！」
「そ、そんな・・・・・・」
って、あれ？　そうだっけ？　可愛いフィオーリアの面倒を看れるって、結構楽しげに、毎日笑ってすごしていたような気がするのだけど・・・・・・
「全部、アンタのためじゃない！　それなのに、まるであたしが悪いみたいに言って！」
目を怒らせて、ジョゼフィーヌをにらむ。
その眼を直視できず、ジョゼフィーヌはうつむいていた。
「いい！　アンタは、今でもエリオットに愛されているの！　エリオットに思われているのよ！　エリオットは、アンタのことを忘れてなんかいないの！　エリオットは、だれにも奪われてなんかいないの！　エリオットは、今でもアンタのものなの！　あたしのものなんかじゃないわ！　ヘンな誤解しないで！」
「う、うう・・・・・・」
「エリオット、毎朝、なんて言って祭壇でお祈りをあげているか知っているの？」
「・・・・・・」
「『あの子が幸せでありますように！　今日も健康で健やかでありますように！』って泣きながら祈っているの！　分かった？　アンタは今でもエリオットに想われているの！」
って、そうだっけ？　たしか、『あの人がいつまでも私を忘れないでいてくれますように！』とかいうのが、いつもの祈りの言葉だったような気が・・・・・・？

ともあれ、とうとう、ジョゼフィーヌは大粒の涙をその眼からこぼすのだった。

魔女の言うことは信じるな！　5

ジョゼフィーヌは泣いていた。
「母上！　母上！」
嗚咽をあげて。心の底から。
そこへ、やさしい笑顔でフィオーリアが手を差し伸べる。
「ほら、立ちなさい」
ジョゼフィーヌはしゃくりあげながら、立ち上がる。
その肩をフィオーリアは優しく抱きしめる。
さっきまで憎みあい、殺しあった二人の美少女（？）の感動的な和解。うつくしい場面だった。
「さ、もういいでしょ？　あたしを襲う理由なんてないの分かったでしょ？」
ジョゼフィーヌは『ウンウン』と何度もうなずく。
フィオーリアは満足そうに微笑むと、少し離れた場所に転がっていた剣を取り上げた。
「さあ、その剣をとり、あたしに誓うのです。二度とバカな真似はしないと。二度とあたしを襲わないと」
ジョゼフィーヌは素直に、剣を受け取ると、片膝をつき、刃の方を自分の胸に当て、剣をささげ持った。
「ボク、ジャン・セバスチャン・ガスペールは、二度と魔女フィオーリアを襲ったりしません。神にかけて、これを誓います！」
「そう、あなた、ジャン・セバスチャンっていうの。いいわ。私は、あなたの誓いを受け入れますわ」
フィオーリアは上品にジョゼフィーヌのささげる剣の柄をつかむと、取り上げ、柄に軽くキスして、ジョゼフィーヌに返した。
「これで、契約成立ね」
フィオーリア、さっきまでの蕩けるような優しい笑顔が一変して、なにか底意地の悪い表情を浮かべて、笑っている。いや、嘲笑して

いるのか？
「フフフ、フフフフフ」
「えっ？」
フィオーリアの突然の笑い声に、眼の端に涙を浮かべたままのジョゼフィーヌ、顔を上げた。
「アンタ、今、騎士の誓約をしたでしょ？」
ジョゼフィーヌ、一瞬考え込む。そして、ハッとした表情を浮かべた。
「あたしに剣をささげて、あたしは、その剣に口づけして返したわね」
ジョゼフィーヌ、真っ青になった。
「アンタ、今の誓約で、あたしに忠誠を誓ったことになったのよ。分かった？」
勝ち誇ったような満面の笑顔。衝撃を受け、今にも心臓がとまりそうなほど驚いている顔。
「これから一生の間、アンタはあたしに仕えなきゃいけないのよ！
それが騎士の誓い。もし、この誓いを破るようなことがあれば、アンタ自身の名誉にかけて死ぬしかないわよ」
指を突きつけて、断言する。
「しかもそれは、このあたし、魔女フィオーリアへの誓約。魂の契約が同時になったってこと。あたしの今言ったこと、魔法の力によっても、補完されているの」
ジョゼフィーヌ、口をパクパクさせて言葉も出ない。
「アンタ、あたしを裏切ったら、魔法の力で、冗談抜きで、本当に命を失うわよ。ふふふ」
フィオーリアが冷たい眼でジロリと眺める。
「う、うう・・・・・・　だ、だましたな・・・・・・」
「ふふふ　バカね。だれもアンタに騎士の誓いをしろなんて、一言も命令していないのに、アンタが勝手に誓いを立てたんじゃない」
「そ、そんな・・・・・・」

ジョゼフィーヌが絶望の表情を浮かべていた。
って、あの時は確か、フィオーリア自身が、ジョゼフィーヌに剣を渡して、誓えって強要してなかったっけ？
普通、相手が騎士や貴族の出で、心理的に上の立場にいる人間から、誓いを立てろと剣を渡されたなら、ついつい忠誠の誓いの仕草をしちゃうものなんじゃ？
なんというか、ずるいというか、狡猾というか・・・・・・
唖然としているオイラの目の前で、フィオーリアが満面の笑顔で言った。
「ふふふ　さあ、あたしの騎士セバスチャン、これから一生の間、よろしくね。仲良くしましょうね」
そうして、悪魔的な哄笑が、いつまでもいつまでも中庭に響き渡るのだった。

魔女の言うことは信じるな！　6

一方、ガシュー商店の近くの大通りでは、二人の戦士が激しく剣を交えていた。
斬り、突き、払い、薙いで、押しこむ。
二人の戦士の力量はほぼ互角だった。
パワー、スピード、テクニック。
どちらも十分に鍛錬され、高度に錬成されていた。
キィーーーン！！！
ガシッ！
ガシャッ！
カキィーーーン！！！
二人の体は何度もぶつかり合い、飛び離れ、突進していく。
どちらも体のあちこちに無数の切り傷を作り、血をにじませているが、どのキズも深いものではなかった。
ガシュー商店を包む火炎に照らされた二人の戦士は、まるで奇妙なダンスをお互いの周りで踊りあっているかのよう。
とても幻想的な光景だった。
ただ、そんな二人の間で、無数の火花が現れては消え、現れては消えしているのが、二人が戦っていることの証であった。
キィーーーン！！！！
剣を打ち合い、火花が飛び散る。全身の筋肉を使い、押し合う二人。でも、次の瞬間には、二人の体は離れた。
その飛び離れる瞬間に、一本の剣は、切り落とすかのように、上下の半円を描き、もう一本は、水平に扇状に刃の軌跡をきらめかす。
「ふっ！　やるな！　ジャスティス！」
「ふふふ、レオン・フランシス、お前も！」
「しかし、これだけの腕前の相手なら、私が、忘れるはずはないのだが・・・・・・？」

「・・・・・まだ、思い出さないというのか！」
「すまぬ。生憎と・・・・・・」
「お、おのれぇ～！！！」
マーティン・ジャスティスの目に怒りの色が。とはいえ、それでも、その怒りに全身を支配されるなんてこともなく、頭の中は冷徹なまま。
二人の戦士は、ジリジリと時計回りにまわり始め、次の瞬間、突撃に移った。
カキィーーーン！！！
剣が打ち合う。火花が散る。
二人とも半歩跳び下がり、構えた。
先に動いたのはレオンだった。
渾身の力をこめて、剣を振るいジャスティスに叩きつける。
だが、ジャスティスは冷静な頭の片隅で、距離を測っていた。
これなら、体を開くだけで、レオンの剣先は、鼻先を掠めるのみで、ジャスティスの体には届かない。
そして、渾身の力をこめて振るっただけに、剣の勢いに引きずられ、必ず、レオンは一瞬だけ、バランスを崩す！
そこを水平に払えば、致命傷まではともかく、相手の動きを弱めるのに十分な深手ぐらいは負わせることができるだろう！
そのとき、ジャスティスは自分が勝ったということを確信していた。
思わず、笑みがこぼれ、魔剣を握る手に力がこもった。

ジャスティスは勝利を確信していた。
あとは、タイミングを合わせるだけ！
３年前、まだ、国軍所属の騎士であったジャスティスが、王都の御前試合でのトーナメント一回戦、始めの合図の音が完全に消え去る前に、突きの一撃で倒された屈辱！
あれは絶対、レオンのフライングだ！

必死の抗議も審判団に受け入れてもらえず、かえって、未練がましく女々しい行為だとして、国軍を追い出される羽目になった苦い記憶。
どれもこれも、レオンのせいだ！
復讐してやると、必死に鍛錬しつづけた3年間だった。
そして、とうとう、そのレオンを倒す瞬間が、訪れようとしていたのだ。
言い知れぬ歓喜が、全身を襲っていた。
俺は勝った！　勝ったぞー！！！
そう叫んで走り回りたかった。
だが、ジャスティスにとって、不幸な事実がひとつあった。
ジャスティスは気がついていなかったし、レオン自身も、特に気にも留めていなかったことだが。
それはジャスティスの背後に今まさに燃え落ちようとしているガシューの店があったこと。
・・・・・・

「フッ！　強敵だった。だが、しかし、おかしいな、コレだけの相手なら、私の記憶に残っているはずなのだが・・・・・・」
レオンはそうつぶやくと、足元に転がっていた剣を拾い上げた。
マーティン・ジャスティス・・・・・・とことん不幸な男だった。

レオンは、マーティン・ジャスティスが所持していた魔剣ストロング・ブレードを手に入れた。
もちろん、その剣は、レオンが神殿に戻ってきたときに、フィオーリアに取り上げられ、オイラの魔力の足しとなる運命にあるのだが。
というわけで、レオンは、テーブルナイフ2号を手に入れることになる。
「マーティン・ジャスティスの形見が・・・・・・」

無念そうな表情を浮かべて、好敵手の不幸を嘆き悲しむ男を残して。

魔女の言うことは信じるな！　7

「ほら、セバスチャン、アンタ、今日はもう帰ってもいいわよ。あたしは魔法をたくさん使って疲れちゃったから、寝るわ」
「・・・・・・」
「こんなに真夜中にハードワークしちゃうなんて、お肌に毒だわ！
ホント、今日はロクでもない晩だったわ。じゃ、お休み」
「・・・・・・」
呆然と立ち尽くしているジョゼフィーヌを残して、フィオーリアはサッサと自分の部屋へ戻っていった。
そのジョゼフィーヌの頬を風がなでた。
「あら、ボーっとしちゃって、よっぽどショックだったのね。うふ、かわいい♪」
「って、シルフさん、そういうのが好み？」
「ふふふ、母性をくすぐられるわ。あは！」
風の精霊に母性本能みたいなものがあるかどうかは、大いに疑問だけど・・・・・・
でも、その声でジョゼフィーヌ、気がついたみたい。
そして、大粒の涙を目の端に浮かべて、
「・・・・・・く、腐れ魔女のバカァ～～～！！！」
そう叫んで礼拝所の方へ駆け去っていった。
「あら？　あの子、カツラ忘れていっちゃったわよ」
シルフさんの言うとおり、中庭には、金髪のカツラがいつまでも取り残されているのだった。

ジョゼフィーヌが礼拝所に泣きながら飛び込んだとき、礼拝所では、フィオーレ女神の神像に祈りをささげている女がいた。
エリオット司祭。
ジョーンとともに町の人々の救助を開始したエリオットだったが、

途中、船頭たちを連れて戻ってきたガシューやトマスを加え、今回の襲撃でほとんど被害を受けなかった町の西側や南に住む人々の協力もあって、救助・救援作業、順調に進んでいた。
しかも、この町のあちこちで火の海が発生したというのに、町の人々で命を落とした者もなく、軽い火傷をおったものが数名だけ。
幸運だった。
これはすべてフィオーレ女神の加護のおかげだろう。
フィオーレ女神が、この町を守護し、町のあちこちを火の海に変えるような極悪非道な襲撃者たちから、この町を守ってもらえただけでなく、ほとんど人的被害を出さずにすんだ。
これは奇跡だ！！
エリオットは感動していた。
そして、町の人々に代わって、女神に感謝の祈りをささげ、これからもこの町を守ってくれるように願っていた。
バタンッ！！
不意に、奥の扉が開き、金髪の子供が飛び込んできた。
腕に顔を埋め、泣きながら。
「あら？　ジョゼフィーヌ？　どうしたの？　なにかあったの？」
この近辺で金髪の子供なんて、そうそういないし、着ている衣装は、さっきまでジョゼフィーヌが着ていたもの。
当然、その子供をジョゼフィーヌだと認識したエリオットだったが・・・・・・
その子供が泣き顔をあげた。
「うぐっ！　うぐっ！」
涙に濡れたその端整な顔は、ジョゼフィーヌの長い髪で縁取られるものではなく、短く借り上げた頭の少年の顔。
「えっ！？」
エリオットの驚く顔を眼にして、ジョゼフィーヌ自身も、自分が今カツラを被っていないことにようやく気がついたようで、
「あっ！」

慌てて、頭を押さえる。
「あ、あなた、もしかして、せ、セバスチャン？」
エリオットは自分が見ているものが信じられないというような驚愕の表情を浮かべ、眼を瞠っている。
「じ、ジャン・セバスチャン・ガスペール？」
ことここにいたっては、観念せざるを得ない。
ジョゼフィーヌは、小さくうなづいて、微笑を浮かべようと努力した。
その途端、エリオットの眼に大粒の涙が・・・・・・
「せ、セバスチャン！　おお、セバスチャン！」
涙をボロボロこぼし、両手で顔を覆った。
「は、母上？」
ジョゼフィーヌ＝セバスチャンも、涙を浮かべたまま、エリオットを心配そうに見つめている。
その声に、顔をあげると、エリオットは両手を大きく広げ、さっきまでの祈りの体勢でひざまずいた姿勢から、2，3歩いざって近づいていく。
ジョゼフィーヌ＝セバスチャンは、思わず駆け寄っていった。
そして、二人はしっかりと抱き合ったのだった。
お互い激しく呼び合いながら。
「おお、セバスチャン！　セバスチャン！・・・・・・・」
「母上！　母上！　母上！・・・・・・」
そんな二人をフィオーレ女神の神像だけが、微笑を浮かべて温かく見守っていた。

「ね？　シルフさん？」
「ん？　なあに？」
「シルフさんは、魔女の魂の契約って知ってる？」
「ふふふ、そんなの私が知るわけないじゃない！」
「あっ、やっぱり！　悪魔の魂の契約なら知ってるけど、魔女の方

は聞いたことないよね？」
「うん、それに、悪魔の魂の契約でも、契約にそむいたからって、死んじゃうなんて、ないはずだけど・・・・・？」
「ああ、そうそう。それに、もうひとつ。騎士の忠誠の誓いは、成人して、キチンと騎士として、認められた人物でないと無効だったんじゃ？」
「うん、たしかそうよ」
「・・・・・・ハァ～」
シルフさん、深い深いため息。やがて、
「ジョゼフィーヌって、前々から思ってたのだけど、バカ？」
「かもね」
それから、これだけはひとつ言えるだろう。
――魔女の言うことは、信じちゃいけない！

エピローグ　～授業のはじまり～

今日もいつものようにフィオーリアは礼拝所へ向かった。
オイラのかたわらを通り、尻尾の焦げたペーターを一撫でし、ポツリとつぶやく。
「また、今日から退屈な授業が始まるのね」
あれから、一週間が経っていた。
今回の襲撃で被害を受けた家々は、外観こそ焦げて黒くはなっていても、内部はまったく被害を受けていない。
この町の領主であるガスペール大公からの十分すぎる見舞金もあって、あちこちの家で外壁の修復が行われている。
一番被害が大きかったガシューの商店も、財産のほとんどは別の安全な場所に移されてあったので、再建のメドがすでについている。

レオンは、２本のテーブルナイフを手に入れたが、それだけでなく、さらに二つのものを手に入れた。
ひとつは、あのときの消火の大活躍によって、人々はレオンをあだ名で呼ぶようになった。
『ファイアーマン（消防士）』と
これ以降、レオンは、レオン・“ファイアーマン”・フランシスと人々によばれ、歴史書にもそう記録された。本人は、そのあだ名で呼ばれるのを、大いに嫌がったのだが・・・・・・
もうひとつは、レオンの腰の無銘の長剣。
無名ながら腕のよい刀鍛冶が魂を込めて鍛えた一振りなだけに、成長属性がついていた。そこへ、スプラッシュの魔法を１０回も放ち、魔剣ストロング・ブレードを所持するマーティン・ジャスティスと死闘を繰り広げたのだ。経験値が貯まり、成長属性が発動するのに十分だった。
そのため、レオン・“ファイアーマン”・フランシスは、長剣ス

プラッシュ・ソード＊＋1を腰に差すこととなったのであった。
でも、本人は、いつまでも家宝のメテオ・クラッシャーが・・・・・・・　と嘆き続けてはいたのだが。

ガスペール大公家でもあれから動きがあったようだ。
なぜか、王弟殿下の息女で、ガスペール大公ジャン・ルイ・ガスペールに嫁いでいたキャスリーン姫が実家に戻られたという。
離婚はまだ成立してはいないようだが、王都の人々は、この大貴族と王族との突然の別居騒動をかまびすしく噂しあったという。
先代の王子として多額の歳費を国から得ている王弟殿下だが、その子供の世代になると、王孫となるので、歳費は１０分の１以下となり、孫の代になると、王族籍すら剥奪され、歳費も支給されなくなる。
だから、国で１，２を争う大貴族ガスペール大公の支援を得、あわよくばガスペール大公の地位を乗っ取ろうと、娘を嫁がせたりしてきた王弟殿下だったが、なにか些細な行き違いがあって、大公の怒りを買ったのだろうというのが、人々の噂の主な内容だった。

フィオーリアが礼拝所に足を踏み入れると、すでにほとんどの子供たちが集まってきていた。
いつものもっとも日当たりの悪い席へ向かう黒髪の少女をだれも気にしない。
少女は胸をはり、昂然とした態度で一歩一歩進むのだが、いつもの自分の席近くまで来たとき、眼を瞠った。
「な、なんで、アンタがここにいるのよ！」
いつもの少女の席は空席だったが、その席の隣に座っている金髪の長い髪の少女が憮然とした表情で見返してきた。
「だって、お父様が、好きなだけお母様の近くにいてもいいって、許可してくれたんだもの！　こんなチャンスめったにないわ。これで、お前さえいなければ最高なのに！」

「フンッ！　それは、こっちのセリフよ！」
少女たちは、お互いにそっぽを向き合いながら、隣り合った席に座るのだった。
そして、奥の扉からエリオットとトマスが入ってきた。
さあ、今日も授業の始まりだ！

エピローグ　～授業のはじまり～（後書き）

フィオーリアは冷たい瞳で見つめている。
「ふっ！　最後までよくついてきたわね。褒めてあげるわ。でも、最後に『評価』と『感想』と『レビュー』を書きなさい！　さもないと、あたしの魔法でアンタたちをトカゲの姿に変えてしまうわよ！」
そうして、高らかに哄笑するのだった・・・・・・・

とりあえず、『魔女の言うことを信じるな！』完結です。
普段は、ブログ（『恋とか、愛とか、その他もろもろ・・・・・・』：ｈｔｔｐ：／／ｌｏｖｅｅｔｃ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／）とかで、恋愛物などを主に書いているのだけど、この『小説家になろう』のサイトでは、ファンタジーが人気みたいなので、ファンタジー物を書いてみました。
ま、ないとは思いますが、続編希望の人がいれば、そのうち書いちゃうかも♪
ともあれ、次もファンタジーのお話を。って、ファンタジーはファンタジーでも、召還モノだけど。
年内に書きあがればいいのだけど・・・・・・
書きあがったら、また、よろしくお付き合いねがいます。

作者　拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5702q/

魔女の言うことは信じるな！

2011年2月6日21時25分発行